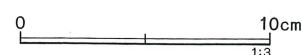
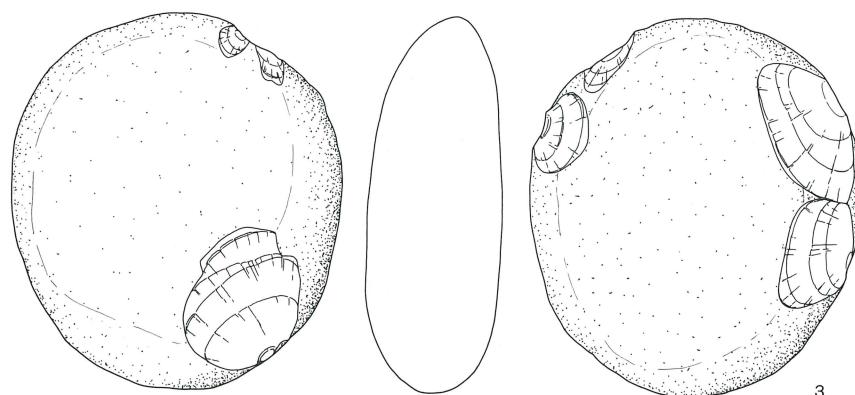
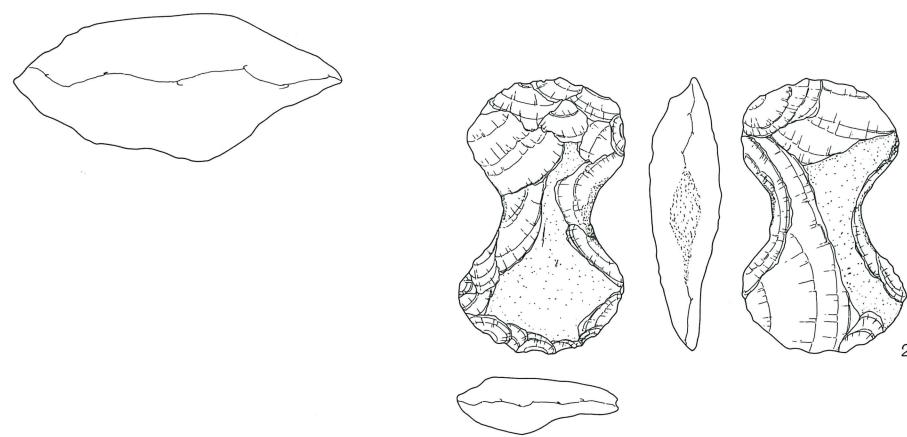
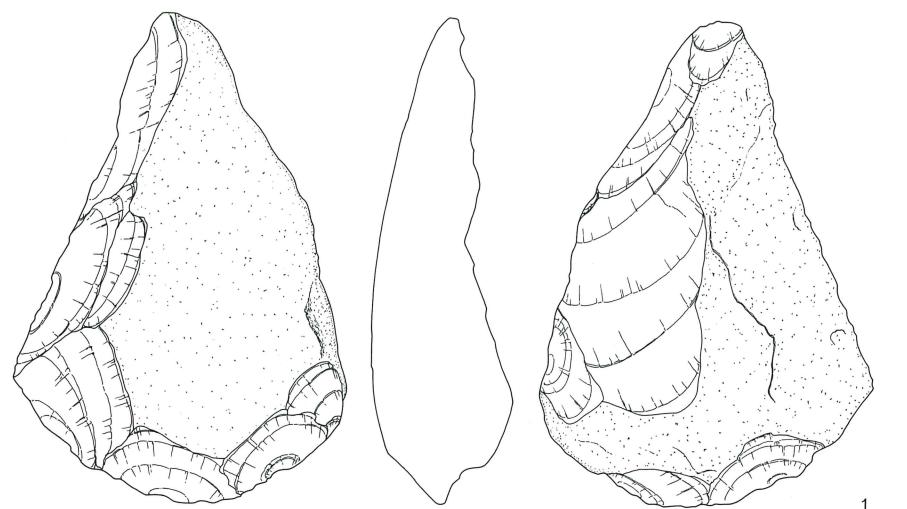
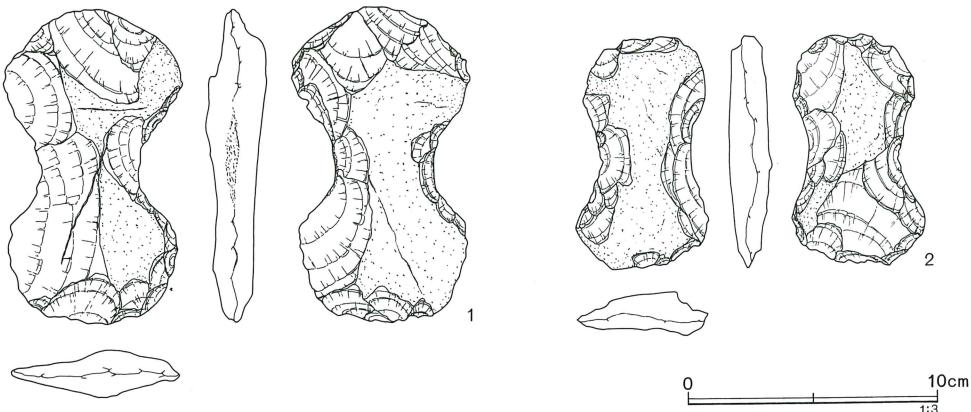


第57図 第30号住居跡出土土器 (3)



第58図 第30号住居跡出土石器



第59図 第31号住居跡出土石器

31号住居跡では、縁石には砂岩を主体に石墨片岩が多く用いられており、全体の7割りを占めている。

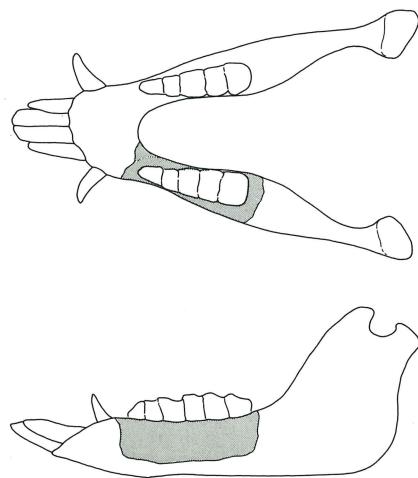
敷石面を調査後に、敷石を除去して掘り方の精査をおこなったところ、径が約25cm、深さ約10cmの皿状の掘り込みが検出された。出土位置が第30号と31号住居跡の境であり、敷石が除去されていた部分であったが攪乱された様子が見られなかったことから、第30号住居跡に帰属するものと考えられる。覆土内からは獸骨が出土した。鑑定したところ約2歳のイノシシ左下顎骨と判明した。被熱したために遺存したのであろう。

第30号住居跡出土遺物

第55～58図は第30号住居跡の出土遺物である。第55～56図は住居の張り出し部に埋設されていた深鉢形土器である。第55図（1号埋甕）は張り出し部の先端に第56図（2号埋甕）は1号埋甕の北西側に埋設されていた。共に胴くびれ部から口縁部にかけて欠損している。

1号埋甕は2段J字文を基本にスペード文の充填によって構成されており、文様を描く際に生じた狂いを、沈線を付け足すことによって解消したために、ネガ・ポジの関係が一部で逆転している。2号埋甕は、胴部に4単位のクランク状の区画をもち、胴下半では区画内にJ字とスペード文が配置されている。胴上半の文様構成は定かではない。区画内には単列の列点が、モチーフ内には縄文が充填されている。縄文はいずれもLRである。

第57図は住居主体部から出土した破片を一括した。1は平行する微隆起線で曲線的な文様が描かれる土器で、第53号土壙出土土器（第116図）のような構成が考えられる。縄文LRが充填されている。2～17・28は、沈線文間に縄文が充填される称名寺式土器である。2は双頭状の波状口縁間



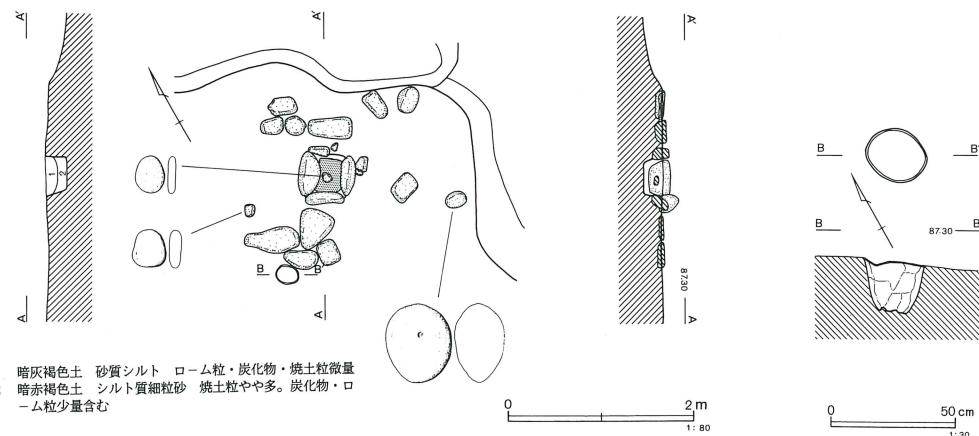
第60図 第30号住居跡出土獸骨残存部位

に小突起をもつ。文様構成の詳細は不明だが、7は1帯の文様が胴屈曲部を境にクランク状に構成されるようである。充填される縄文はすべてLRである。17は沈線と列点で文様構成される土器、18~26・29は沈線のみで文様構成される土器で、充填縄文の土器群と比較すると、沈線が細く、やや直線的に描かれる傾向が観察される。22~23は同類の口縁部で、口唇内面が肥厚している。27は胴部に密接の条線をもつ土器である。

第58図に石器を一括した。1~2は打製石斧である。1は両面に自然面を残し、粗い剝離によって形状を整えている。2は文錐形で両面にし全面を残す。両側縁には敲打による刃潰しが顕著である。3は円盤の両面に部分的に剝離が施されたもので、磨耗痕はみられない。おそらく敲石として用いられた石器であろう。

第31号住居跡出土遺物

住居跡から出土した遺物は石器のみで、図示した2点のみが出土したにすぎない。共に分錐形の打製石斧で、両面に自然面を残す。剝離は全体に粗く、1は片側縁に敲打による刃潰し加工が観察される。



第61図 第32号住居跡

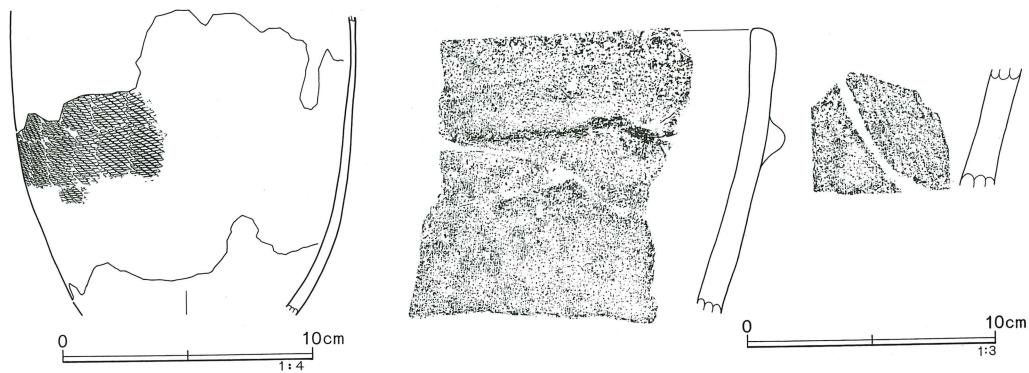
第32号住居跡（第61図～第63図）

第32号住居跡はM~N-11グリッドで検出された。住居は炉と敷石の一部が確認されただけで、15・16号墳の周溝によって大半が破壊されていた。炉は石囲い炉で、一辺が約50cmの方形を呈している。確認面からの深さは22cmである。炉石は被熱し赤変していたが、覆土内には焼土粒子が若干含まれていた程度である。炉の周囲には敷石が散在しており、炉から約60cm南には口縁と底部が欠損した深鉢形土器が埋設されていた。

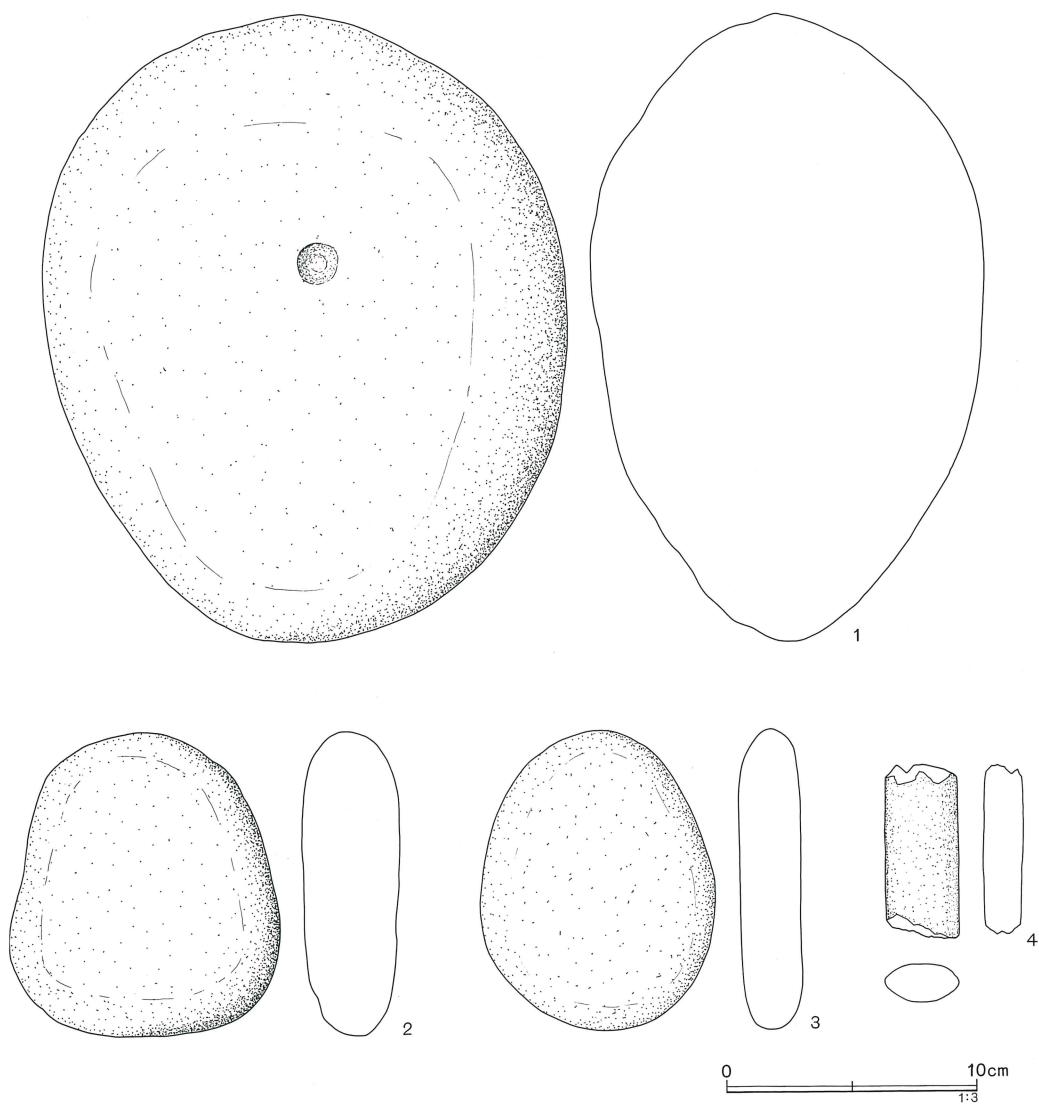
敷石を除去した後に、敷石下および周辺部を精査したが、住居に関連する遺構を検出することはできなかった。

第32号住居跡出土遺物

第62~63図に住居跡の出土遺物を図示した。第62図1は炉の南側に埋設されていた深鉢形土器である。胴上半と胴下半から底部が欠損していた。器面は風化が進んでおり、施文された縄文がわず



第62図 第32号住居跡出土土器



第63図 第32号住居跡出土石器

かに残っているにすぎない。器厚が4 mmと薄手である。2～3は炉の覆土内から出土した。2は隆起線文の深鉢形土器で、底部から緩やかに立ち上がり、口縁が直立気味の器形が想起される。幅広い無文部と胴部を区画する隆起線が鰐状に突出している。3は称名寺式の胴部破片である。

石器は4点出土した。第63図1は大型の磨石で、片面に円形の浅いくぼみをもつ。2～3は両面に磨耗跡をもち、磨石・石皿両用途を持っていたようである。4は石剣の欠損品で、研磨によって仕上げられている。1～2は住居の敷石として転用されていた。3～4は炉の覆土内から出土した。

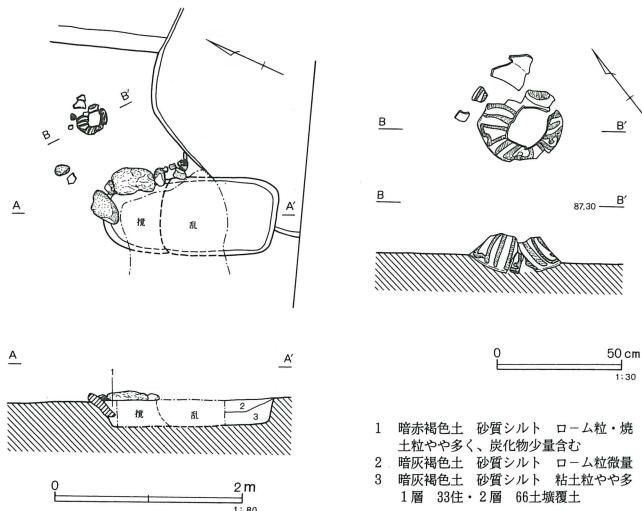
第33号住居跡（第64図～第65図）

この住居跡はI～J-16グリッドで検出された。第28号住居跡の5 m東側に位置している。石囲い炉の一部が検出され、炉の北側に隣接して検出された伏甕も住居に伴うものと考えた。検出された炉跡は石囲い炉であるが、66号土壙によって破壊され炉石の大半が除去されていた。また住居の埋没後に古墳が築造されたことや、住居の西側に掘削された近世の溝によって著しく破壊されており、調査区界にあるために、住居の掘り込みや敷石・或いは炉石など、関連した遺構を検出することができなかった。従って住居の規模は不明である。炉にはわずかに焼土の堆積が認められたが、炉石は被熱し、赤～白色化していた。伏甕は本来住居の床面に位置していたと考えられ、古墳の石室や周溝あるいは近世の溝などからはずれていたため、辛うじて残存したのであろう。

第33号住居跡出土遺物

第65図1は称名寺式の深鉢形土器である。2単位の波状口縁をもち、胴くびれ部以下が欠損していた。文様は平均幅4 mmの単沈線で描かれており、沈線断面が浅い蒲鉾状を呈している。この種の称名寺式土器としては、最も普遍的な描出手法である。胴下半が欠損しているため推定の域を出ないが、器形と残存部位から想定して、胴くびれ部を境にJ字文が4単位上下2段にネガ・ポジの逆転関係をもって描かれるようである。沈線間に繩文LRが充填されている。推定口径28cm・現存高15.6cmである。

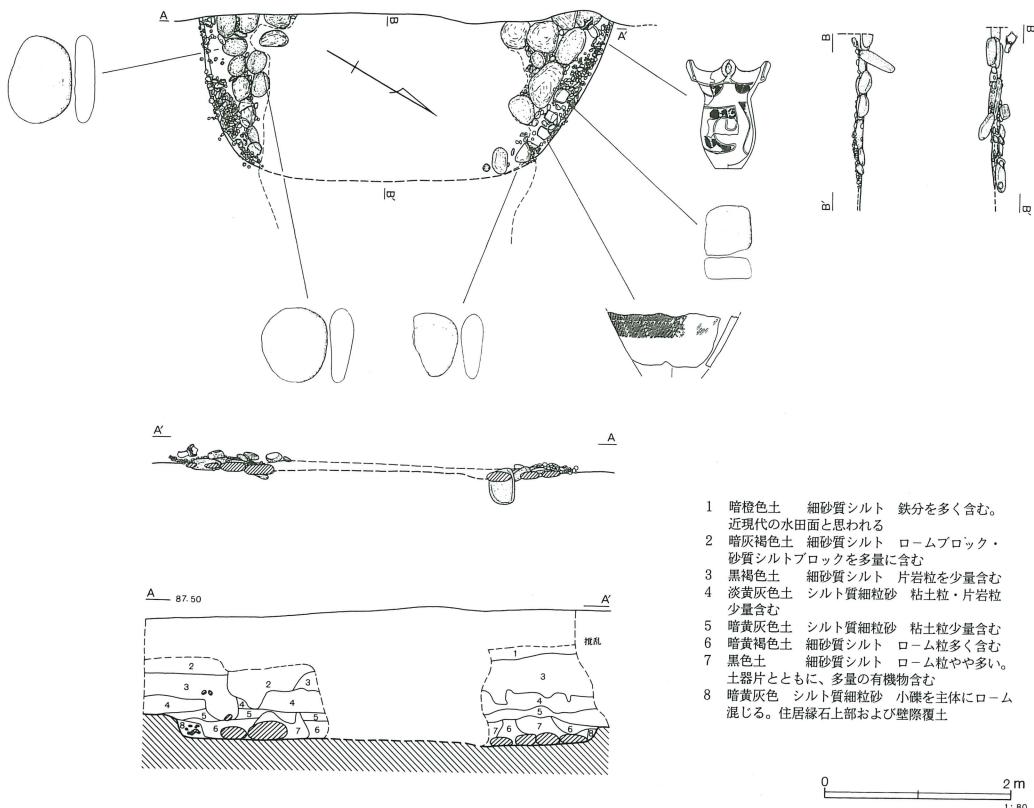
同図2は隆起線文で文様が描かれる土器である。炉石際から出土したため、伴うものと判断した。器形は1と同様であるが、屈曲部から上半が内湾気味である。文様の詳細が定かでないが、隆起線内側には繩文LRが充填されている。



第64図 第33号住居跡



第65図 第33号住居跡出土土器



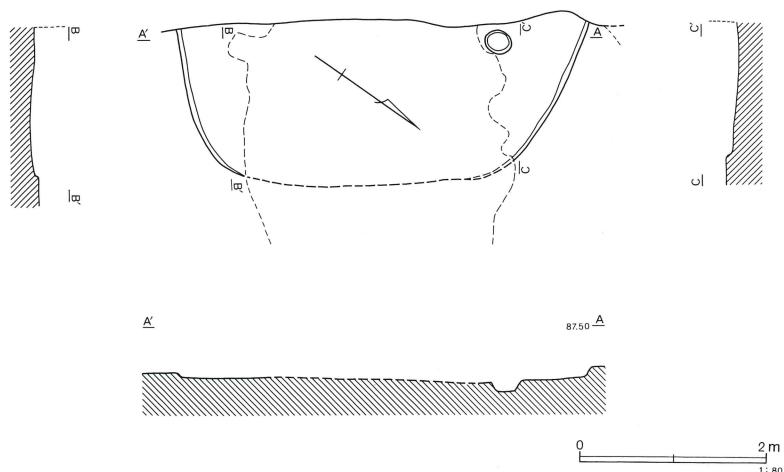
第66図 第34号住居跡敷石面

第34号住居跡（第66図～第70図）

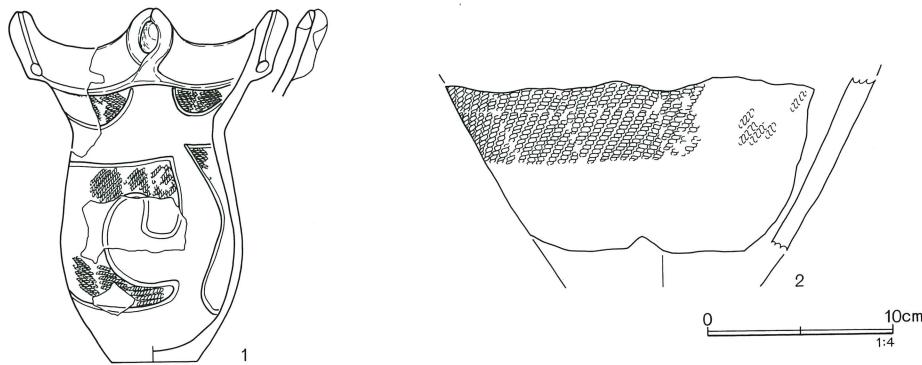
この住居はP-10グリッドで検出された。住居の西側が調査区域外にあたるため、全体を明らかにすることことができなかった。寄居面Ⅱで検出された住居跡では西端に位置している。

住居跡は標高

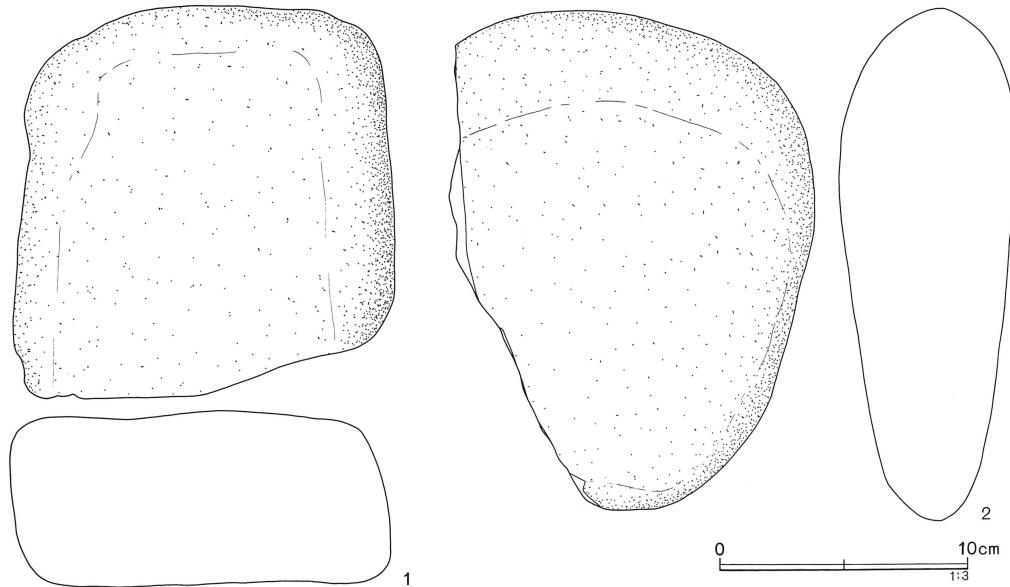
87mの平坦面に構築されており、主体部のおおよそ東半分が検出されたに過ぎないが、五角形の平面形態が推定される。主体部の中央では、東西に工場建設に伴い著しい攪乱を受けており、このために敷石や炉・縁



第67図 第34号住居跡掘り方



第68図 第34号住居跡出土土器



第69図 第34号住居跡出土石器（1）

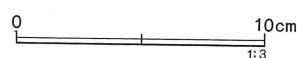
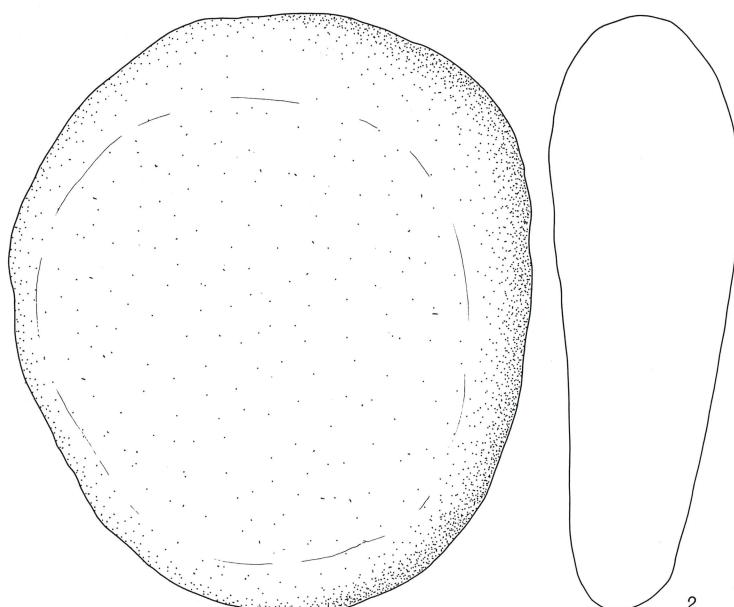
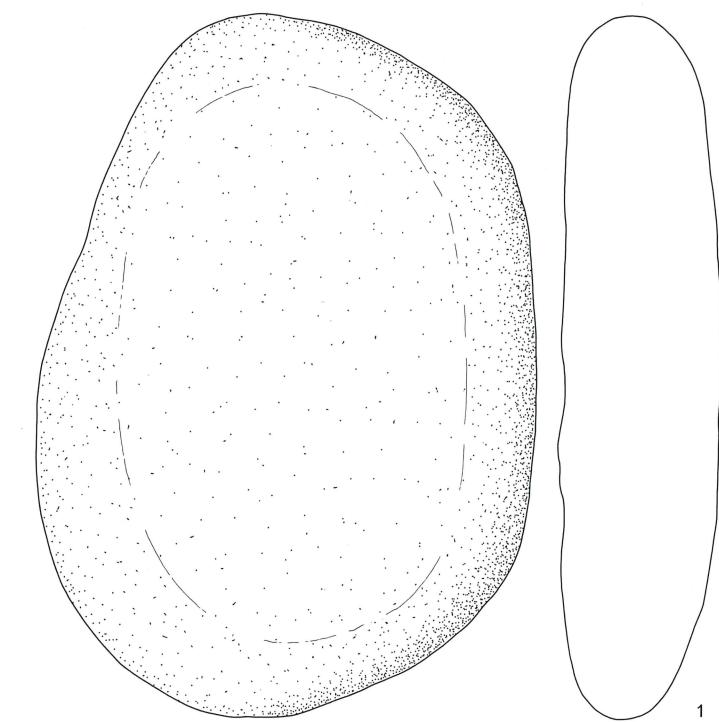
石などの大半が失われていた。現存部分では南北4.9m×東西1.7mである。主体部が約5m程度と推定され、樋ノ下遺跡にあっては標準的な規模の住居である。張り出し部は調査区域外にあたるため調査できなかった。

床面には河原石が敷かれており、敷石縁辺部をめぐる縁石には小礫がいわゆる周礫状に充填されており、北壁側では積み上げるように形成されていた。住居跡の南側縁石上からは、小型深鉢形土器と底部付近の大型破片が検出された。

土層を確認したところ、敷石面直上の第8層には、微細な有機物や炭化物が多量に含まれていた。敷石を除去し精査したところ、敷石下から柱穴が1基検出された。

第34号住居跡出土遺物

第68図1は、いわゆる関沢類型と呼称される土器である。4単位の波状口縁で、隆起線で文様帶



第70図 第34号住居跡出土石器 (2)

区画され、文様は沈線で描かれる。波頂部には「の」の字状の貼付文が付され、貼付上にはナゾリが加えられ浅くくぼんでいる。胴部は、くびれ部を境に2帯に分帶され、上部には隆起線に接して弧状のモチーフが、下部にはJ字のモチーフが描かれている。各モチーフ間には縄文LRが充填されている。風化が著しく、詳細が把握不可能であった。口径14cm・器高19cmを測り小型である。

2は深鉢の胴下半で、縄文LRが施文されている。底部直上の縄文は磨消されたようである。

石器は図示した4点が全てである。いずれも石皿で、住居の縁石や敷石に転用されていたものである。河原石がそのまま用いられているため、不定形である。片面にのみ磨耗痕が発達している。

第35号住居跡（第71図～第72図）

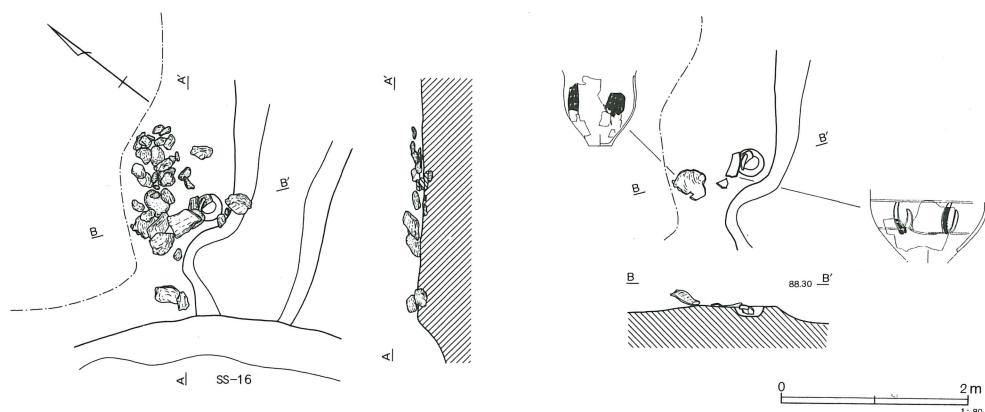
この住居跡はN-11グリッドに位置し、第15号墳の調査途上で検出された。検出された遺構は、敷石住居の張り出し部と考えられたために、住居跡と認定した。住居は第15号・16号墳築造に際して破壊され、さらに近世の第6号溝によっても破壊を受けたために、張り出し部の極く一部が残存していたに過ぎず、主体部は失われていた。古墳の調査を終了した後に、周辺を精査したが、関連する遺構を検出できなかった。

張り出し部と考えられる遺構は石が不規則に残存していただけであり、復元は不可能であった。石を除去し、掘り方の調査を行なったところ、石下から埋甕と大型の深鉢形土器破片が出土した。

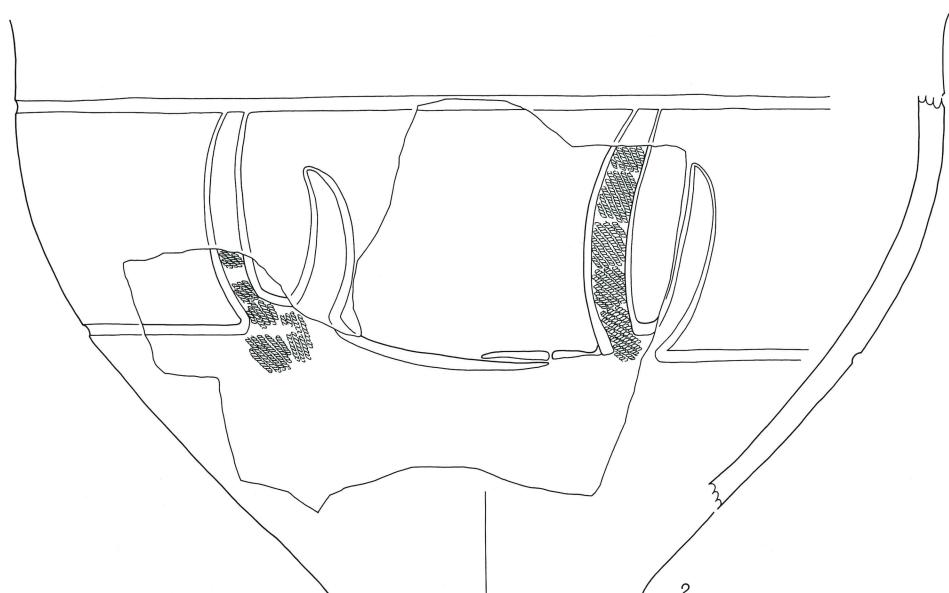
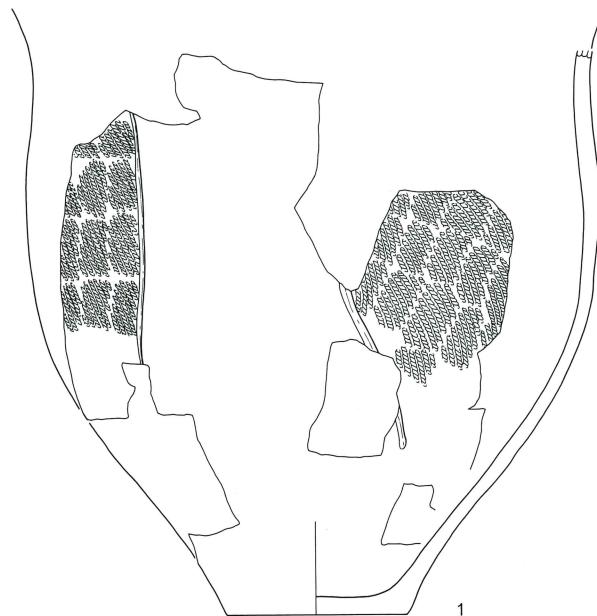
第35号住居跡出土遺物

第72図1は隆起線で文様が描かれる深鉢形土器である。文様の全体が把握できないが、末端が開放され、直線的に垂下するものと斜行する隆起線の構成が推定される。あるいは第27号住居跡出土土器（第34図1）のような文様構成が想起されよう。隆起線間には縄文LRが充填されている。底径9cm、現存高29.5cmである。

2は4単位のJ字文が、帯状の平行沈線を挟んで上下2段に構成されるものと考えられる。下段のJ字は末端が開放されている。沈線間には縄文LRが充填されるが、風化が著しく、文様以下の詳細は定かでない。現存部最大径が推定50cmで、大型土器である。



第71図 第35号住居跡



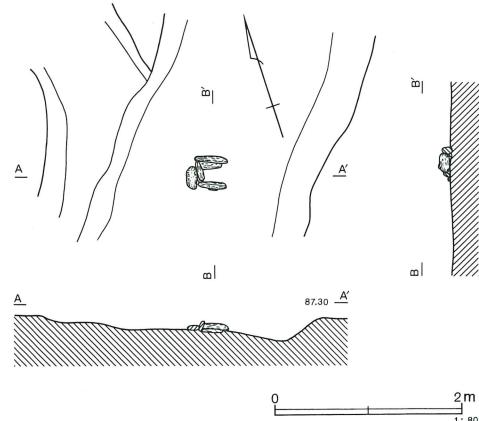
0 10cm
1:4

第72図 第35号住居跡出土土器

第36号住居跡（第73図）

この住居はL-14グリッドで検出された。近世の第6号溝の底面に方形の石組み遺構のみが検出されたものであり、周辺の精査によても付随する施設を検出することはできなかった。当該グリッドは、著しい攪乱を受けていたことも大きな原因であろう。従って、この遺構のみで住居と判断するには多少疑問もない訳ではない。

検出された石組み遺構は、扁平楕円の石墨片岩ないしは結晶片岩を用いて方形に組んだものであり、南側の一片が失われていた。遺構内部はもとより周辺部からも遺物は検出されなかった。また、遺構内覆土にも焼土・炭化物の堆積は認められない。石組みは一片が約40cmと小型で、おそらく方形を呈していたものと考えられる。類似した遺構には、第28号住居跡の石囲炉南東部で検出された石組み遺構が挙げられる。



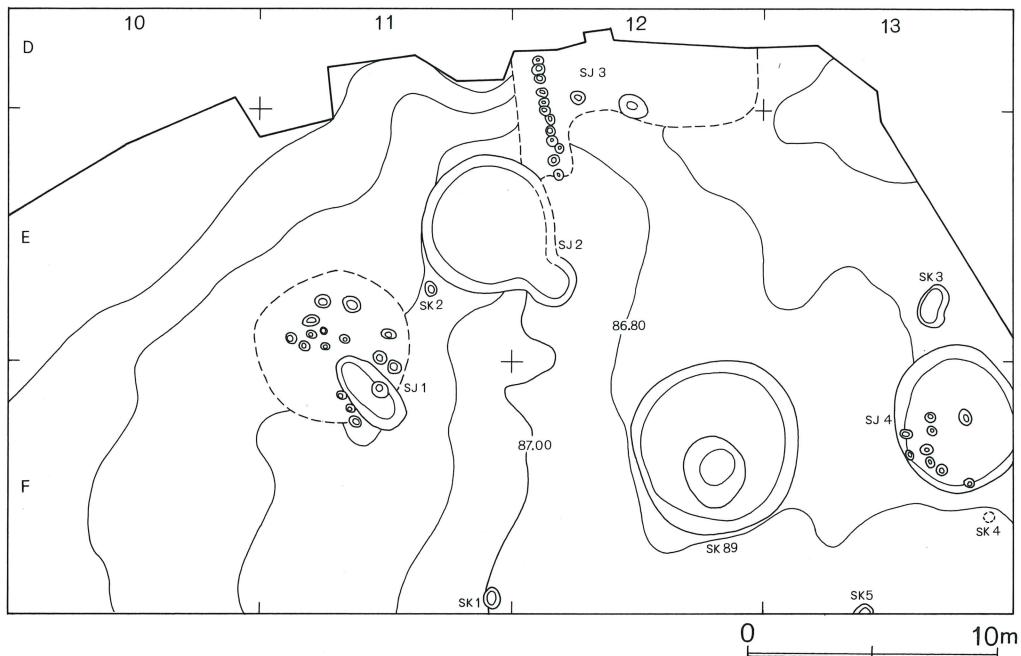
第73図 第36号住居跡

（3）土壙と出土遺物

樋ノ下遺跡からは、総計109基の土壙が検出された。このうち縄文時代に属する土壙は59基である。土壙には、単純な掘り込みだけのもの（A類）で、円形を基調としたもの（A1類）と楕円径ないしは隅丸長方形を呈するもの（A2類）・同様の形態で配石を伴うもの（B類）・2個を1単位とした配石を伴うもの（C類）・土器が埋設されたいわゆる屋外単独埋設土器（D類）などの種類に分類される。

土壙は調査区の段丘上位面（寄居面Ⅰ）から下位面（寄居面Ⅱ）の両面に分布していたが、住居跡と近接して集中している傾向が窺えたため、それら土壙群を記載するにあたり、集中傾向が窺える土壙群を1～8面に分類し、各面を単位として記載した。従って、ここでは土壙の形態や性格を基にした分類毎の記載を行なっていない。分類と計測値は巻末に一括して第3表土壙一覧表として掲載した。

樋ノ下遺跡では、縄文時代以外にも平安時代から中～近世の遺構が検出され、同期の土壙も存在したために、土壙番号には時期を問わずに通し番号を付した。従って本項で記載のない土壙は、平安時代から中世に帰属するものであり、第2冊分に掲載されている。なお、土壙分布図第1面は、寄居面ⅠからⅡにかけての緩斜面部に、第2面は、寄居面Ⅱの斜面部で検出された。第3面～8面に示した土壙は全て寄居面Ⅱに立地するものである。縄文時代の土壙全般に言えることであるが、住居跡と重複関係をもたないことも注意すべき点であろう。また寄居面Ⅰでは、攪乱が著しかったために、住居跡とともに多くの土壙が消滅した可能性があることも付記しておきたい。



第74図 土壌位置図（第1面）

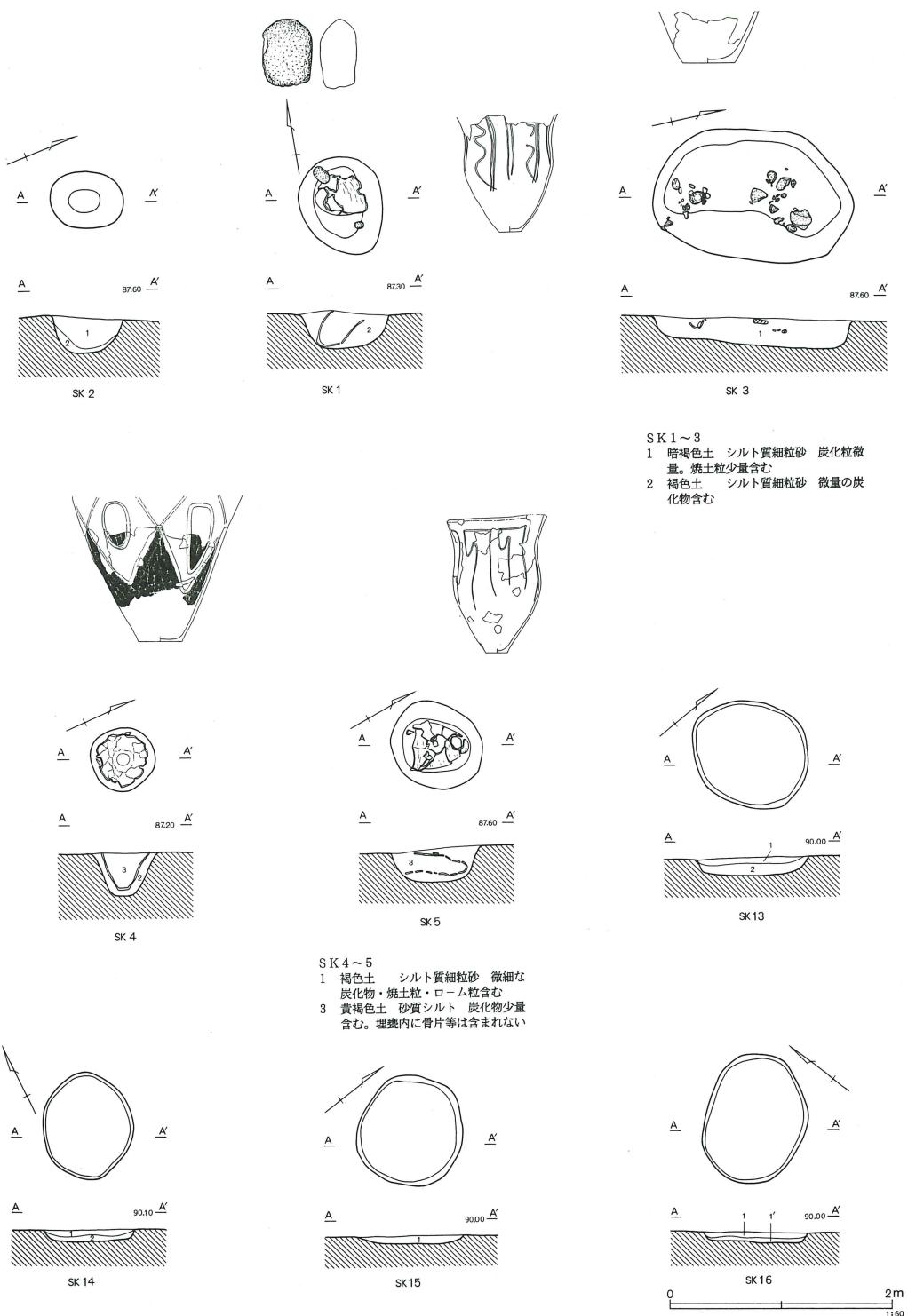
第1面（第74図）

この面は E～F-11～13グリッドに該当し、第1号～第5号土壌および第89号土壌が検出された。標高が87m から87.4m の範囲にあり、いずれも住居跡との重複関係はない。土壌は円形ないしは梢円形を呈する第1～2・第4～5号土壌と、隅丸長方形を呈する第3号土壌がある。第1・4～5号土壌は深鉢形土器が埋設されたいわゆる屋外単独埋設土器である。土器の埋設には、第4号土壌のように、通常土器の器形よりも一回り大きめで、土器の器形に則した掘り込み内に埋設されたものと、第5号土壌のように、土壌内に土器が横位に埋設されたものがある。

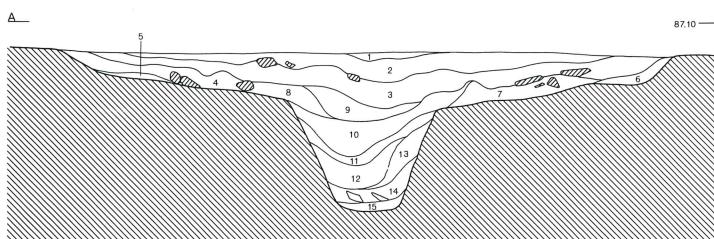
第3号土壌は長径90×短径54cm の隅丸長方形を呈し、確認面からの深さが17から25cm で、壌底がやや北東に傾斜している。土壌覆土上面からは、土器底部が壁際で出土した他、拳から人頭大の礫が南北両壁際で検出され、出土状況からは流れ込みか否か断定しかねる。平面形態は A 2 類で、後述する第8面の配石土壌群と石の出土状況などで共通した要素もある。おそらく墓壌であったと考えられる。

第89号土壌は E～F-11～12グリッドで検出された。北壁の一部が攪乱を受けているが、遺存状態は概ね良好といえる。遺構が位置していた面が窪地状を呈していたため、上面が黒色土で覆われていた。当初は包含層と考えられたが、黒色土を取り除いた段階で遺構が確認された。この時点では配石が検出されておらず、付近に近世の石垣状の遺構が存在したことから、同時期の井戸の可能性も考えられた。半截し土層を確認した時点で配石の一部が確認され、土器が多量に出土したことから、縄文時代の遺構と断定した。

遺構は大きく二段に掘り込まれていた。上面開口部の掘り込みは、東西の径が4.9m で、攪乱さ



第75図 土壌 (1)



SK 89

- 1 黄灰褐色土 シルト質細粒砂 ローム粒やや多く、粘土粒・砂粒多量に含む。
粘性・しまり強。繩文土器多量に出土。
2 黒灰褐色土 シルト質細粒砂 ロームブロック・砂粒少量、粘土粒多量に含む。
繩文土器多量に出土。
3 黒褐色土 シルト質細粒砂 ロームブロック微量、ローム・砂粒少量、粘
土粒多量に含む。繩文土器多量に出土。
4 暗褐色土 シルト質細粒砂 ローム粒少量、砂粒少量、粘土粒多く含む
5 黄褐色土 シルト質細粒砂 ローム粒少量、砂粒非常に多く、粘土粒少量含
む
6 黑褐色土 シルト質細粒砂 ローム粒微量、砂粒やや多く、粘土粒多く含む
7 黑灰褐色土 シルト質細粒砂 ローム粒少量、砂粒・粘土粒多く含む
8 黑褐色土 シルト質細粒砂 ロームブロック少量、砂粒・粘土粒多く含む

- 9 黑褐色土 シルト質細粒砂 ローム粒微量、砂粒少量、粘土粒やや多く含む
10 黑灰色土 シルト質細粒砂 ローム粒少量、砂粒やや多く、粘土粒多く含む
11 暗褐色土 砂質シルト ローム粒微量、砂粒多量、粘土粒やや多く含む
12 暗褐色土 砂質シルト ローム粒・粘土粒微量、砂粒非常に多く含む
13 暗褐色土 砂質シルト ローム粒やや多く、砂粒・粘土粒非常に多く含む
14 暗褐色土 細砂質シルト 小砾少量、ローム粒多く、砂粒・粘土粒非常に多
く含む。有機物を含む
15 黑褐色土 細砂質シルト 小砾少量、ローム粒少量、砂粒非常に多く、粘土
粒やや多く含む。有機物を多く含む

0 2m
1:60

第76図 土壌 (2)

れた南北もほぼ同様の大きさの楕円形と推定される。壁は、確認面から10~27cm程度の深さで、緩く傾斜して掘り込まれていた。外周する壁の内面には河原石が検出された。扁平な石が用いられ、下端部は埋設されていた。出土状態から、石は環状に配置されていたものと考えられる。配石面から内部では緩く傾斜し、遺構の中央部には、直径が0.8~0.9mの楕円形の掘り込みが検出された。確認面から底面までの深さは約1.5mである。底面直上の第15層は黒褐色の細砂質シルト層で、有機物が多く含まれていた。また底面からは板状と推定される炭化材が検出された。土壙に伴うものであるが、性格は不明である。

覆土は15層からなる。第11層以下は砂質シルトを基本とする自然堆積層であり、遺物は殆ど含まれていなかった。遺物は、主に第3層から第10層の間に含まれており、特に第9~10層に大型の土器片が集中して出土した。環状の配石に接した内面からは特に石器がまとまって出土した。出土土器には後期初頭から晩期までが含まれるが、曾谷式土器が最もまとまっており、復元された個体も多い。把起類が多く含まれていたことも特徴といえる。後期初頭以降曾谷式までが含まれるが、曾谷式の突起が多い点も土器の出土傾向と一致する。以上の調査結果から、第89号土壙は、加曾利B式から曾谷式にかけての祭祀関連の遺構と判断した。突起類を除き、後期初頭の土器群は、周囲に同時期の遺構も存在することから、恐らく流れ込んだものであろう。

第1面土壙出土遺物（第82図~第83図・第85図・第128図）

遺物は、第1・4~5号土壙から器形復元可能な深鉢形土器が各々1個体出土した。

第1号土壙からは、堀之内I式深鉢形土器（第82図1）が出土した。胴部上半が欠損している。文様は2~3条の沈線を1単位とする懸垂文間に1条の蛇行懸垂文が施文されている。地文を持たず沈線のみの文様構成である。底径7.8cm、現存高42.3cmで、推定器高が60cmの大型土器である。同土壙内からは磨石（第128図4）が1点出土している。

第3号土壙からは、底部付近の大型破片以外には、小破片が出土した程度で、まとまりに欠ける（第83図6）。6は底径9.2cm、現存高10cmで、器面の風化が著しい。胎土は称名寺式に近いようである。同図1~3が称名寺式、4が堀之内2式であろう。

第4号土壙から出土した土器（第83図7）は、胴上半部が欠損している。隆起線で4単位のX字状の区画が描かれ、区画の末端は互いに連結し閉塞している。X字状区画の中央部では、隆起線の接点に円形刺突が加えられている。区画内には隆起線によって楕円形のモチーフが描かれている。X状区画の外面と、楕円区画内面には縄文LRが充填施文され、施文分部以外は丁寧にナデ整形されている。底部上面では縄文が磨消されている。底径12.8cm・現存高34cmである。推定器高60cm前後と大型の土器である。

第5号土壙から出土した土器（第85図1）は、胴部が強く張り、直線的に開く深鉢形土器である。文様は単位文化したJ字文で、文様の末端は開放されている。器面に6単位が描かれ、地文を持たない点も特徴である。器面整形や沈線は第1号土壙出土土器に近く、既に称名寺式の単位から逸脱している。口径36.4cm、胴部最大径32cm、器高49cm、底径8cmである。

第89号土壙からは、多量の遺物が出土した。第91図~第105図・第124図~第127図が、同土壙か

ら出土した遺物である。出土土器には後期初頭から晩期前半までが含まれているが、量的には曾谷式が最もまとまっている。

第95図1はいわゆる関沢類型と呼称される土器であろう。隆起線と円形刺突列をもつ。同図2～10が称名寺式で、10は沈線間に列点が加えられる。同図11～26は堀之内I式である。沈線で文様描出される土器群と、縄文充填の土器群とに大別される。前者には多数条の密接沈線をもつ土器もあり時間幅を有するようである。同図27～28は堀之内II式の磨消縄文の土器群である。平行沈線文を基本モチーフとし、沈線に接して小突起が付されている。

第91図1～2、第95図28～34、第96図1～17・19～28には、加曾利B式土器を一括した。型式学的にはB2からB3式が含まれる。第91図1は内湾気味に開く小形土器である。文様は平行沈線間に対向する弧線が互い違いに区画された土器である。B2式に見られる多段枠状構成の横帯文の要素が変形したものであろうか。器面の一部に赤色塗彩が残る。灰白色を呈し、器面の風化が著しい。口径13.8cm、現存高6.7cmである。同図2は口唇上に小突起をもつ。平行沈線文を持つが詳細不明。口径13cm、現存高7.8cmである。

第95図28～34は鉢形土器と思われ、「く」の字状に屈曲した口唇上に小突起をもつものがある。平行沈線文で、沈線間に縄文や刻みが加えられる。34は波状口縁で、平行沈線間に斜行沈線が加えられる。

第96図1～3は浅鉢形土器であろう。無文口縁下で屈曲し、段をもつ。2～3には内面に断面三角形の隆帯をもつ。同図4～7は口縁が直立ないしは内湾気味で胴部で張るいわゆる瓠形の深鉢形土器であろう。口唇に刻みをもち、口唇下に2条の沈線がめぐる。4、5～7は同一個体であろう。原体Lの地文のみで、現存部分に文様は見られない。

同図10～12は肩部で強く屈曲し、算盤玉状を呈する独特な器形である。図示した資料は同一個体で、屈曲部の沈線が器面を全周する。肩部の縦沈線で器面を区画し、区画内に弧状の沈線が施される。弧線文外の縄文が磨消された磨消弧線文である。同様の土器には、第91図3があるが、屈曲部の沈線や縄文の有無など、細部に相違が見られる。

第96図23～28には紐線文土器を一括した。紐線には1条のものと2条が密接し平行するもの、条間が離れて文様帯を構成するもの等があり、紐線上にはいずれも押圧が加えられる。口唇内面には沈線がめぐる。

第91図3～7、第92～第93図1～4、第96図29～37、第97図、第98図1～20には、曾谷式に含められる土器群を示した。図示した資料からもわかるように、広義には加曾利B3式の系統上にあるものと、いわゆる高井東様式と呼称される波状口縁で雷状の沈線文を持つ土器群とで構成されている。

第91図3は無文地上に沈線による弧線文が施文される。弧線の接点には沈線が垂下し、基本構成はB3式とした第96図10と同様である。肩部の屈曲が強く、胴下半には若干の丸みをもっている。現存部位から推定すると口縁は外反するようである。屈曲部から下半には斜行沈線文が施文されている。この種の器形には斜行沈線以外の文様が施される土器は見当たらない。風化が進行していたため、器面整形の詳細が観察できる個体が限られたが、器面に丁寧なミガキが施された後に沈線文が

描かれており、この手法は高井東式の整形法とも共通している。現存部最大径25.2cm、現存高14.8cmである。同図4も同様の器形を呈するが、屈曲部上半に文様は見られない。3に比較しやや長胴である。底径7.7cm、最大径27.2cm、現存高24.3cmである。

第92図7は口縁が直線的に開き、胴部が緩やかにすぼまる深鉢形土器である。口縁には格子目状の沈線文が施文される。内面には浅い凹線状の沈線がめぐる。胴部以下の文様が定かでないが、沈線を境に斜行ないしは格子目状の沈線文が施文される土器であろう。口径25.3cm、現存高7.6cmである。器形からは第92図4も同様の土器と考えられる。現存高14.8cm、現存部最大径16.2cmである。破片では第97図29～30、第98図1～16も同様の土器群と考えられる。この類の土器群は、胎土に砂粒が多いものの、良好で器面整形も極めて丁寧である。色調も暗灰褐色を呈している点も共通性がある。

第91図6は鉢形土器である。器面に扇状の4単位の突起をもち、中央部にくぼみを持つ。屈曲した口縁部には原体Lの地縄文上に、断面角形の沈線が2条めぐっている。胴部にはヘラ状工具による細い沈線で格子目文が施文されている。口径38.8cm、最大径40.2cm、突起を含めた現存高16cmである。

第92図2～5、第96図32～37、第98図1～6は、いわゆる高井東式土器である。第96図32を除き4単位の大波状口縁を特徴とし、頸部には雷状の沈線文が施文される。比較的幅広い沈線が施文された口縁部文様帶は、頸部からやや突出気味で、段をもっている。波頂部と波底部には突起を持つ。

突起には、第92図8や第97図2～9のように円形板状のものや、第92図3のような「ノ」の字に近いもの、第92図10・第97図1のような中央部に沈線をもつ蒲鉾状のもの、或いは第96図32・36のように上下2個一対となるものなど、バラエティーに富んでいる。同類土器群は総じて胎土が良好で、黒褐色を呈するものが多い。第98図17～18は同類の胴部破片であろうか。第92図8～16は口径が各々25cm、37.2cm、42cmである。

第92図11は4単位の波状口縁で、波頂部が肥厚し扇状となる。頂部には3条の押圧が加えられる。

波頂部直下の棒状浮文を境に、口縁部には3条の沈線がめぐっている。3条の沈線で区画された頸部と胴部文様帶には、頸部に格子目文が、胴部には斜行沈線文が施文されている。器形・把手・文様帶構成等が安行I式と酷似し、同式と平行することは間違いない。口径20.5cm、現存高11.4cmである。

第93図1～2は口縁部に断面角形の凹線がめぐる鉢形土器である。器形は第91図6に共通し、同土器の突起と胴部の沈線文を省略した粗製的土器といえよう。小波状口縁を呈する。1は口径37.6cm、最大径39.3cm、2は口径38cm、最大径41cmである。第97図22～24も同様の土器群と考えられる。

同図3～4も鉢形を呈するが口縁が直立する。3は口縁に凹線がめぐる。口径15.5cm、現存高3.6cmである。第97図13～16も同様の土器群と考えられる。4は素文で、口径32cm、現存高5cmである。

第93図5は無文浅鉢、同図6～8、第94図は無文の深鉢形土器である。第93図8にはヘラ状工具

の丁寧な整形痕が観察される。いずれの土器も有文の文様を省略した土器群と考えられる。第94図5には輪積痕が明瞭に残されている。口径は第93図5・6・8が25・30・34cm、第94図1が37.8cmである。第99図～第101図1～8には無文土器破片を一括した。形態から安行I式以降の土器群も含まれている。

第92図11～12、第98図21～24は安行I式である。第92図11は平縁深鉢で、帯状部には「ノ」の字状の貼付文をもち、頸部には磨消弧線文をもつ。口径21.5cm、現存高7.8cmである。第98図21～23も同様の土器群である。第19図13は浅鉢形土器で、2条の磨消口径7.7cm、現存高6.8cmである。第98図24は粗製紐線文土器である。

第98図25～26は、新地系の注口土器である。同一個体で、胴下半は無文である。灰白色を帶び、胎土も細かく、他とは明瞭に区分される。同図28～30は安行3a式に、31～35は安行3b式である。27は大洞C1式に、31はC2式に比定されよう。

第101図15～19、第102図には底部を一括した。網代圧痕をもつ例が多い。

第104図～第105図には、遺構内から出土した突起類を一括した。後期初頭から後半までの資料が含まれ、特に加曾利B式から曾谷式にまとまりがある。第104図1～4が称名寺式に、同図5～8が堀之内I式に比定される。同図9～13が加曾利B2式に、同図14～第105図1～5が曾谷式の把手である。同図6は釣手土器であろう。

土壙からは石器も多量に出土した。第121図～第123図は打製石斧である。形態は分銅形が主体で、短冊形がこれに続く。第121図～第123図1～3に分銅形を示した。長さが平均15cmのやや大型のものと、10cm程度の小形のものとがある。第122図4～第123図1～3は刃部がL字状を呈し、片縁に抉入部を持つ石器で、他には見られない。第123図2・5は短冊形石斧である。片岩製で片縁が湾曲する。同図17は磨製石斧であろう。剥離後に敲打された状態で使用され、磨きは施されない。

第124図3・6は石剣である。3は片面の一部が剥落しているがほぼ完形で、全長が31.2cmである。剥離後に敲打によって形態を整えている。同図2・5は打製石斧であるが、剥離後に敲打を施すなど、磨製石斧に近い製作技法が窺える。2・4は剥離のみの製品である。

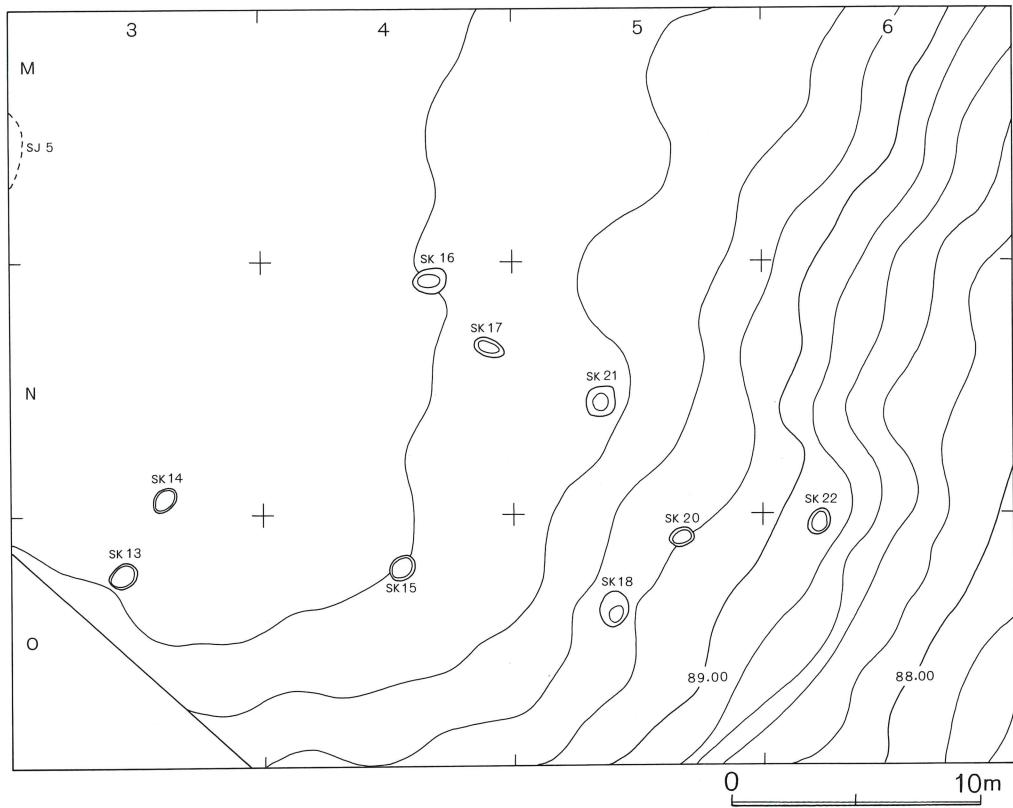
第124図1・4・7～8は磨製石斧である。8を除き敲打で終了し、研磨が施されない。

第125図1・3～4は礫器である。同図2は剥片の片縁に粗い剥離を加えて、刃部を作出したもので、削器と考えられる。同様に第127図5も削器と考えられるが、頁岩製は本例のみである。7は石匙である。5は石錘に、6は小形の砥石と考えられる。

第126図には石皿を図示した。3は片岩で中央部に使用によるくぼみが顕著である。1は或いは転石によるものか。石族は4点出土した。2をのぞき欠損品である。いずれも黒曜石製である。

第2面 (第77図)

N～O-3～6グリッドで検出された土壙を第2面とした。調査区の西端に位置し、標高90mから88.8mの寄居面IIからIにかけての斜面部で検出された。比較的集中傾向が強く、この範囲内では第13～18・20～22号土壙が検出された。周辺は大規模な攪乱を受けていたことから、この他にも土壙が存在した可能性は高い。この範囲で検出された土壙群は、径が45～60cm前後の円形ないし



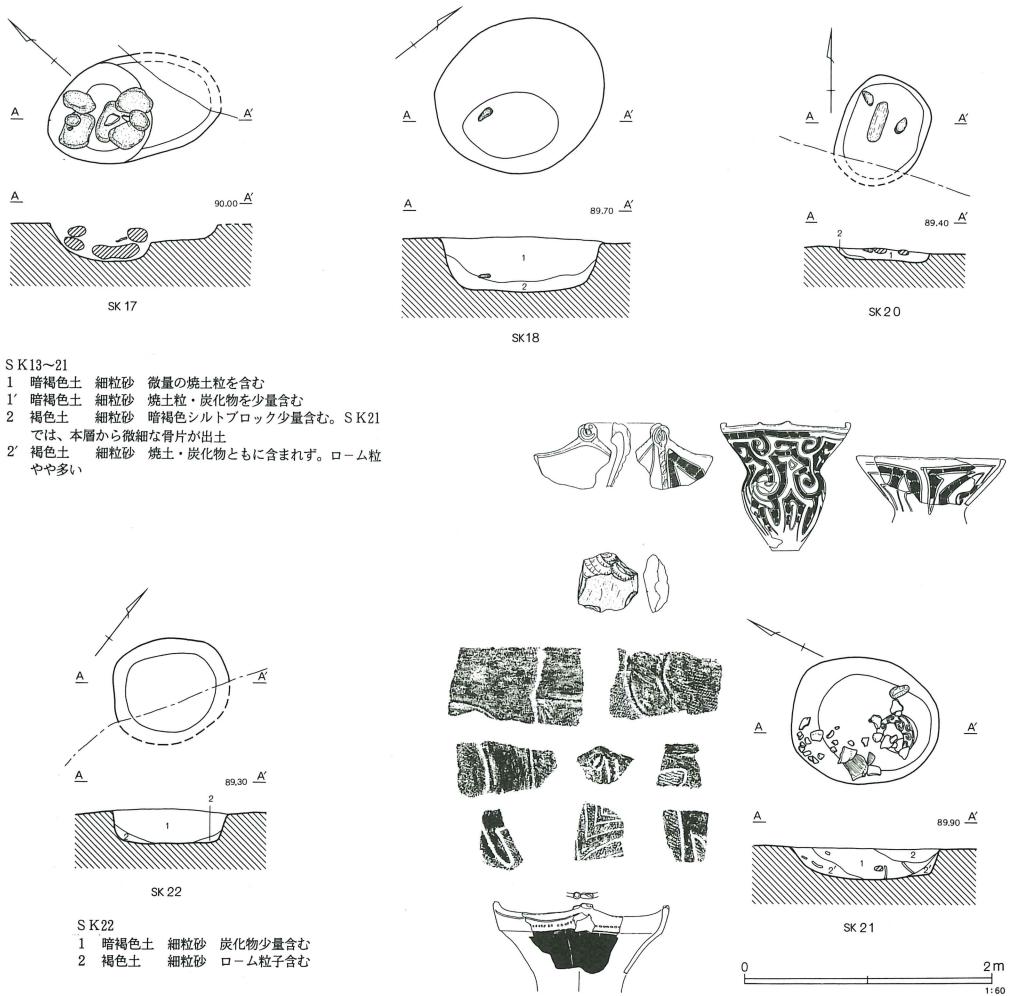
第77図 土壌位置図（第2面）

は橢円形を呈するものが主体で、13～16号土壌は、確認面から最深部でも10cmと極めて浅い。第17号土壌は西端部に一段深い掘り込みがあり、この部分から人頭大の河原石が集中して検出されたが、2基の重複であった可能性が高い。第20号土壌は確認面から底面までが10cm前後と深い土壌であるが、覆土上面から棒状の礫が検出された。一部が攪乱によって失われていたが、或いは配石土壌とも考えられる。21号土壌を除き、遺物は殆ど出土しなかった。第14号土壌からは諸磯c式土器の小破片が覆土上層から2点出土した。断片で文様の全体が明確ではないが、渦巻き状の結節浮線文をもつ土器であろうか。平坦面にある第5号住居跡出土土器とは、若干の時間差があるようにも思われる。検出された土壌の形態分類は第17、20号土壌を除きA1類に分類される。

第21号土壌は径が1.2m×1mの橢円形で、確認面からの深さは0.25mである。底面は平坦で台形に近い断面形を呈していた。土壌からは石器を含め多量の遺物が出土した。遺物は底面に密着し、中央部から西壁際にまとまっており、一括遺物と認定するに足る出土状況であった。A1類である。

第2面土壌出土遺物（第78図・第88～第90図・第128図3）

第21号土壌からは、器形復元可能な深鉢形土器3個体を含め、樋ノ下遺跡の土壌のなかでも、最もまとった遺物が出土した（第78図・第88図～第90図・第128図3）。土器には称名寺式と、加曾

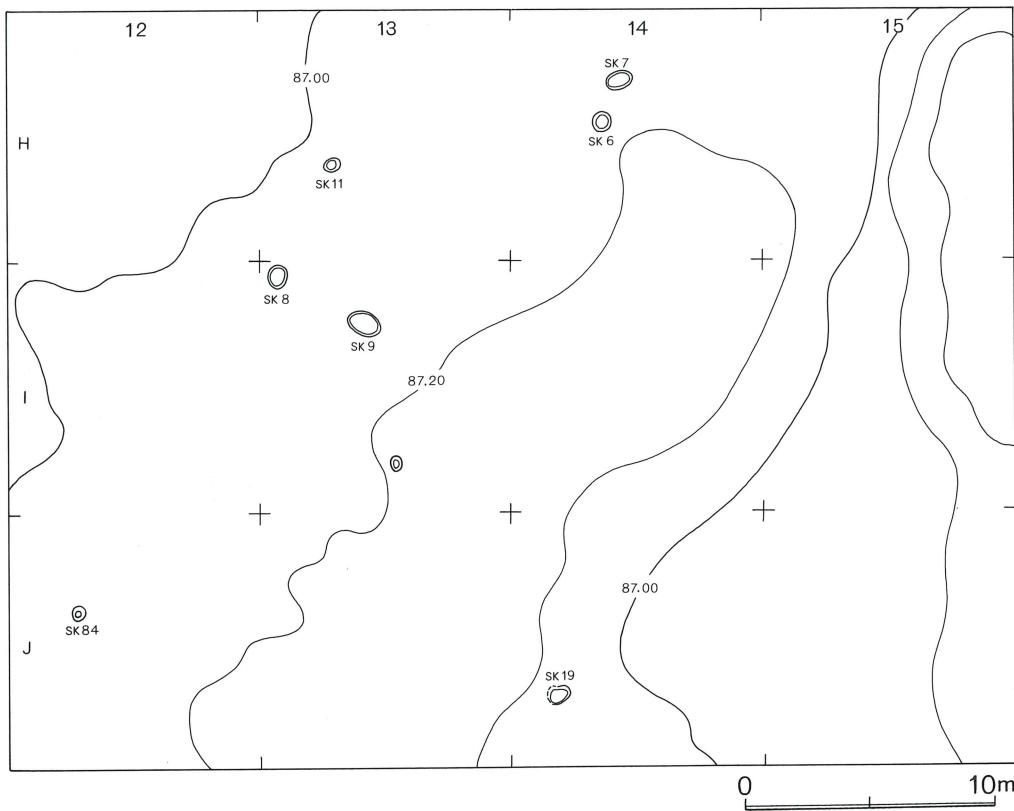


第78図 土壌 (3)

利E式系統に属するものなど、系統を異にする個体が含まれており、出土状況からも共伴関係が確実である。

第88図1 第89図は称名寺式の深鉢形土器である。口唇上に4単位の突起をもち、うち1単位は2個一対の突起となる。胴上半で強くくびれ、口縁が直線的に開く深鉢形土器である。胴部文様は、口唇下にめぐる縄文帯から渦巻きの度合いを強めたJ字文が5単位に配置される。通常4単位を逸脱した単位の設定は、口唇上の2個一対の突起を2単位に認識した結果であろう。J字文間には連鎖したJ字を基本とするモチーフが配され、全体にすき間のない構成となっている。連鎖したJ字文は同一モチーフが2単位と3単位に描かれたため、最終的に生じたネガ・ポジ関係の狂いを、新たに沈線を付け加えて一見矛盾のないように解消している。器面が風化していたため、充填縄文の詳細が不明である。口径30cm・器高29.4cm・底径6cmである。

第90図1は称名寺式の平縁深鉢形土器である。基本文様構成はJ字とスペード文の組み合わせで、第88図1と同じであろう。4単位に文様構成されている。口径24.8cm・現存高7.6cmである。同図2は波頂部破片で、口唇上の突起から垂下する隆帯で器面が区画される。



第79図 土壌位置図（第3面）

第90図2は4単位の波状口縁で、波頂部には8字状の小突起をもつ。口縁部には沈線と刺突が組み合う部分と、刺突のみがめぐる部分があるが、波頂部の貼付文から隆帯が垂下するものと思われる。胴部は縦位に密接条線が施文されている。推定口径40cm・現存高16cmである。

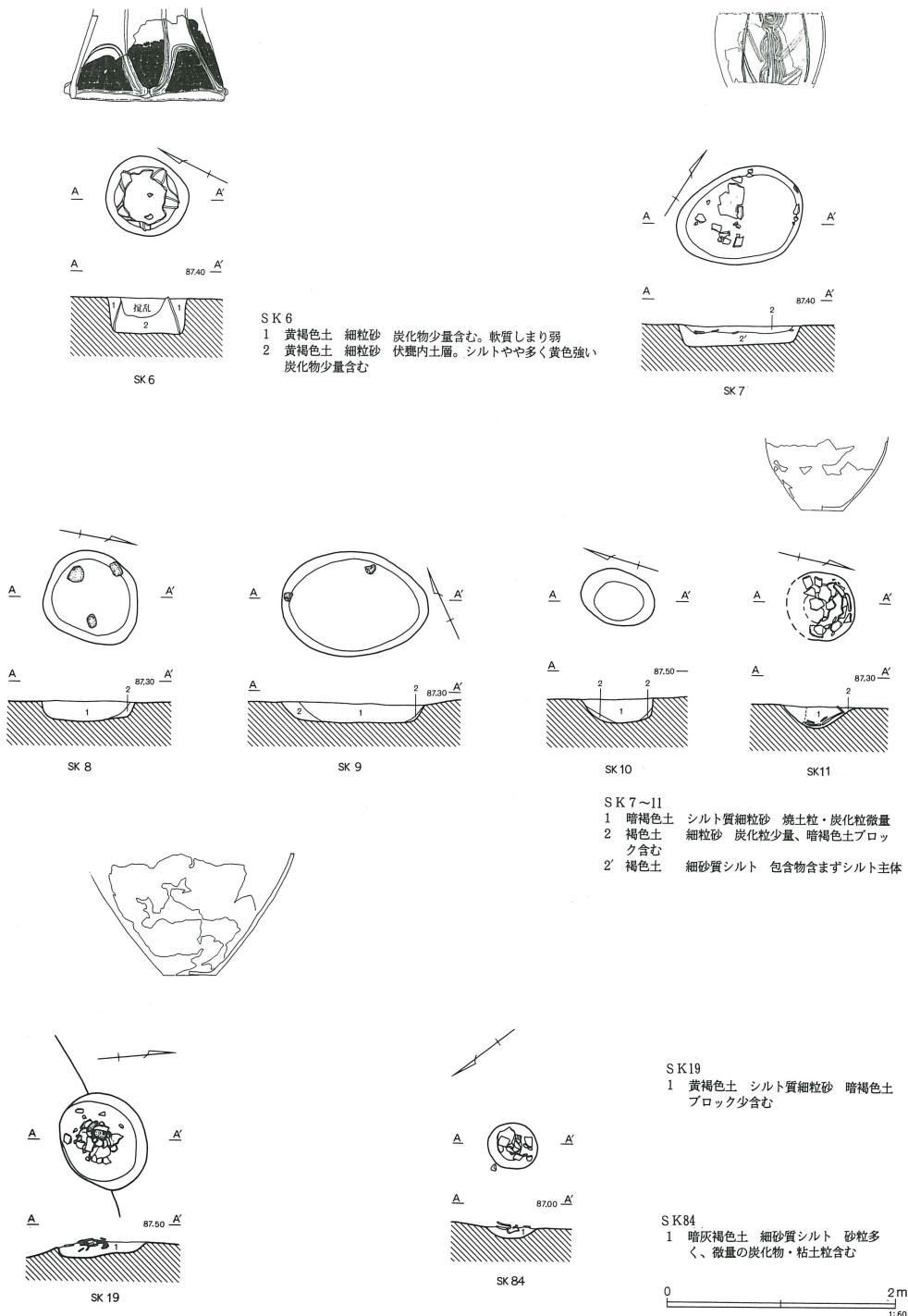
第90図3～11は破片類を一括した。3～6は同一個体で、長胴の深鉢形土器であろう。隆起線文の土器で隆起線間は丁寧にナデられている。文様構成は第53号土壌出土土器（第116図）と近似し、おそらく4単位のJ字文を基本とするモチーフ構成と考えられる。7～11は称名寺式の土器群で、復元資料を含め同一時期と考えられる。

石器は1点出土した（第128図3）。両面からの粗い剝離によって刃部を作出した、いわゆる礫器である。

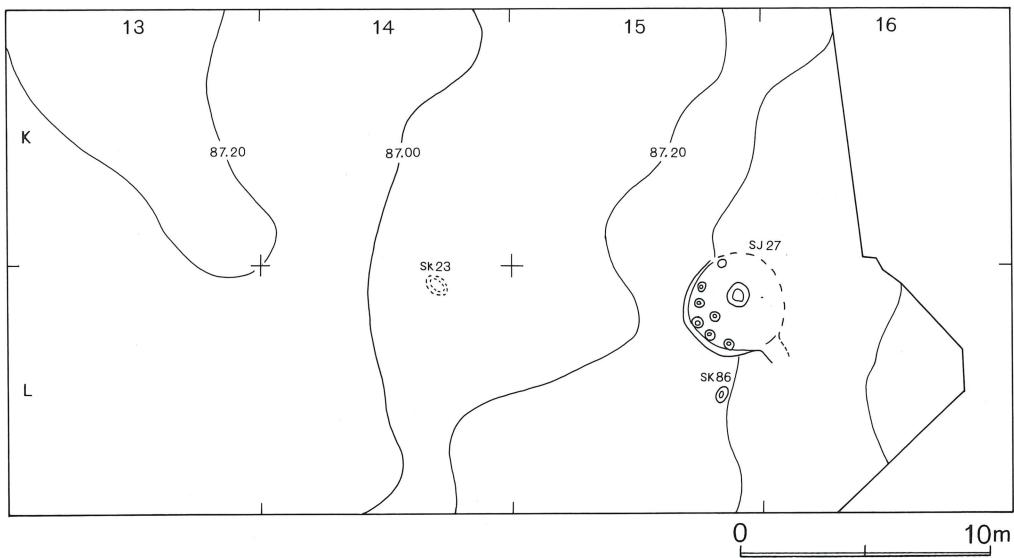
第3面（第79図）

H～J-12～14グリッドで検出された土壌を第3面として示した。この面で検出された土壌は、第6～11号および第19・84号土壌である。土壌は、いわゆる寄居面Ⅱに位置しているが、微視的には、寄居面Ⅱと寄居面Ⅰの間に形成された窪地状の緩斜面部に集中している。住居跡は窪地状の地形から南側寄りの緩斜面部に位置しており、丁度自然堤防のような地形に占地していると言えようか。従って住居跡と土壌とは若干占地が異なるようである。土壌はこの地形の北側に沿って構築されており、後述する第4～6面の土壌群もこのような地形から検出された。

検出された土壌は、いわゆる屋外単独埋甕（D類）と、橢円形の土壌（A1類）からなる。前者



第80図 土壌 (4)



第81図 土壌位置図(第4面)

には、第6・11・19・18号土壌が、後者には第7～10号土壌が該当する。

第6号土壌は、径が約70cmの円形で、深さは確認面から約30cmである。土壌には、胴中位以下が欠損した大型深鉢形土器が伏せた状態で埋設されていた。第11号土壌は攪乱を受け、土器（第82図2）も半周が失われていた。径が約60cm程度の円形で、確認面からの深さが18cmである。

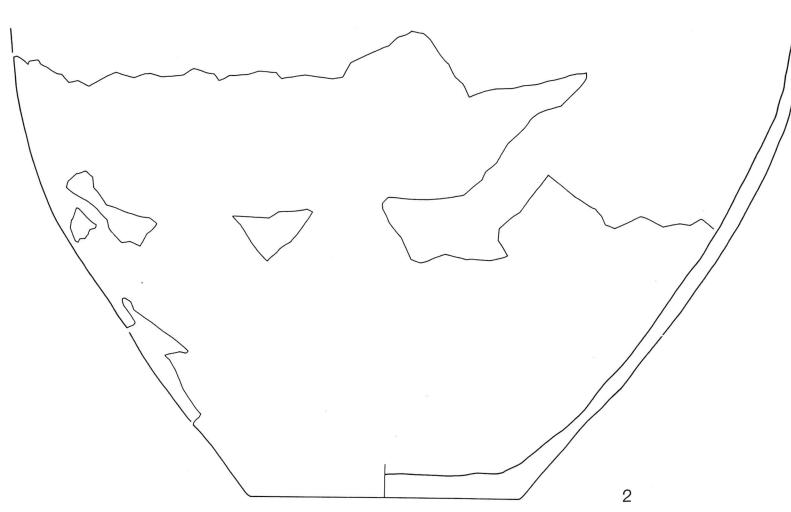
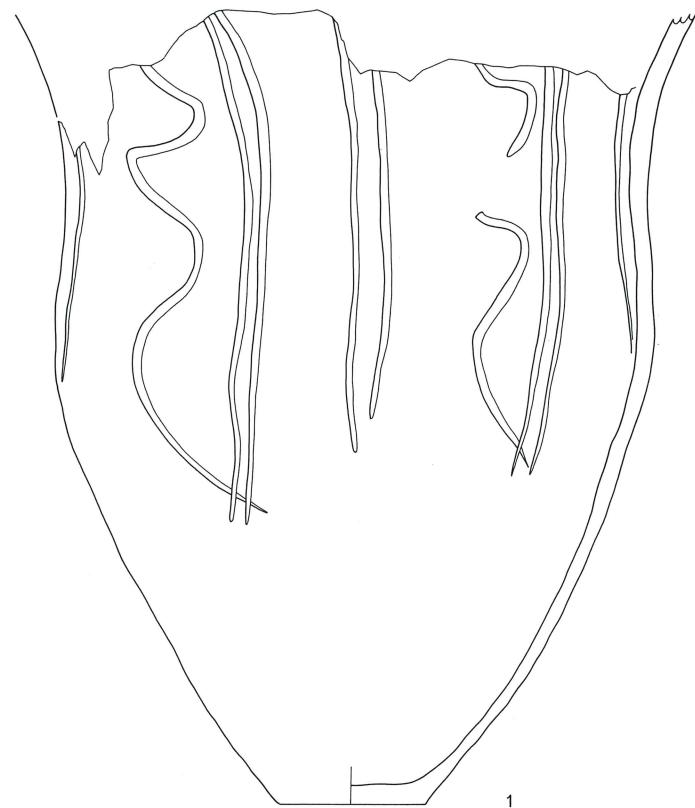
第19号土壌は、第6号墳の周溝と重複していた。径が80cm程度の円形を呈していたものと考えられる。土壌内からは堀之内1式の大型破片（第87図2～4）が出土した。

第84号土壌は、緩斜面部の堆積土を除去した際に確認された。確認面が砂質シルトだったため、崩落が進行していた。土壌は径が約70cmの円形と推定される。確認面からの深さは13cmである。土壌内には称名寺式土器が潰れた状態で検出された。

A1類に分類された土壌は、径も一様でなく第7号土壌を除いて遺物が出土しなかった。

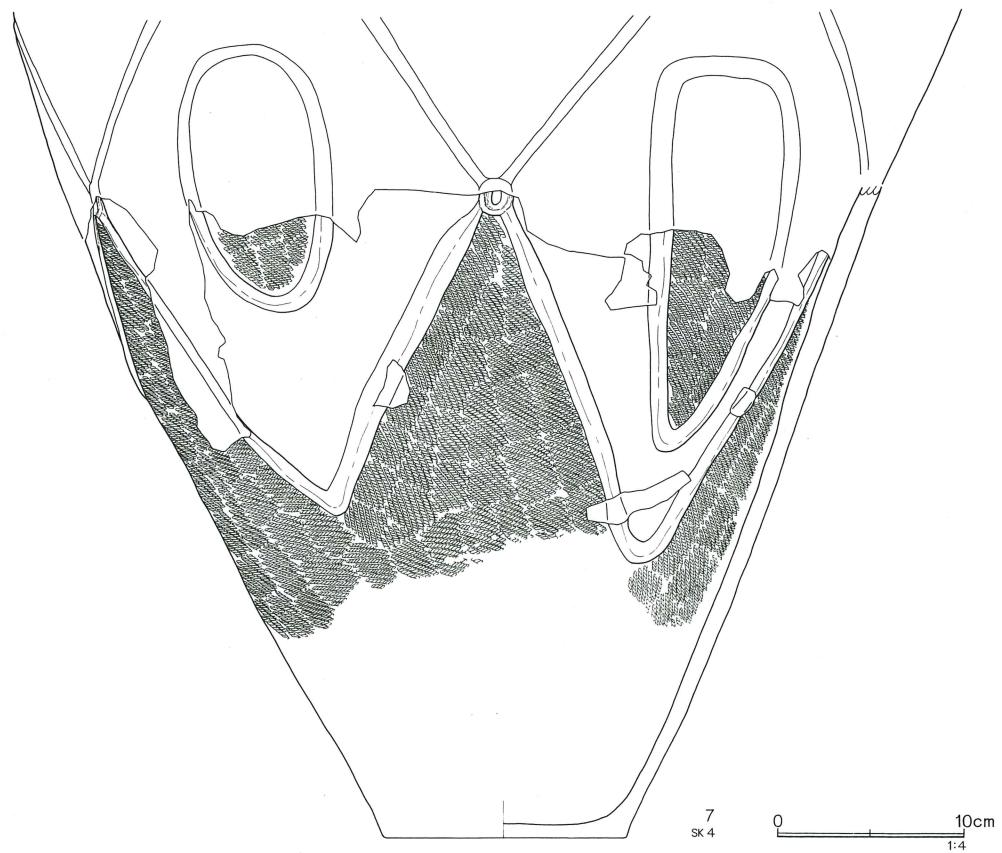
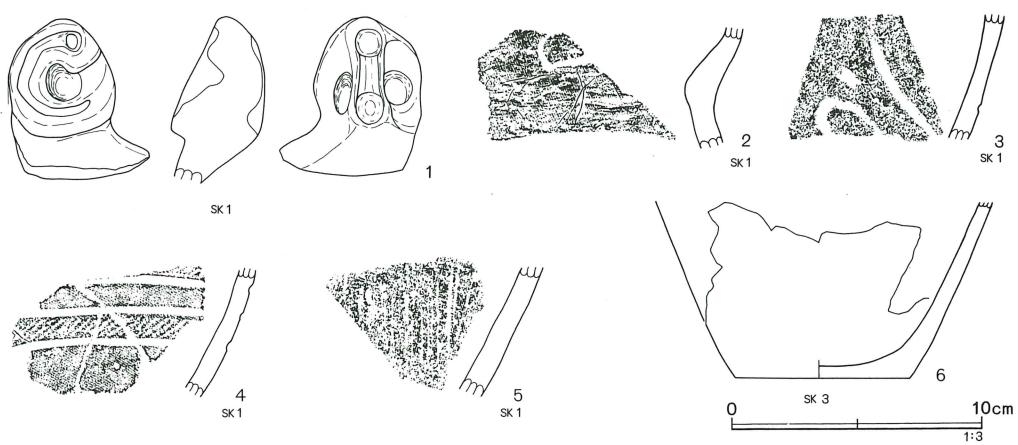
第3面土壌出土遺物（第84図～第85図・第87図1・第119図1）

第84図は第6号土壌出土土器である。胴中位で弱くくびれる深鉢形土器であろう。文様は隆起線によって描かれ、無文部に接して逆U字状とU字状の文様が交互に配置される。文様接点が双環状に隆起した4単位の突起を構成している。繩文施工後に隆帶両側にナゾリが加えられている。口径52cm・現存高29cmの大型深鉢形土器である。第87図1は第19号土壌から出土した。無文で、底部から湾曲気味に開く鉢形器形が想起される。現存部最大径40cm・底径12.8cm・現存高29cmである。第119図1が、第84号土壌出土土器である。胴部に断面蒲鉾形の比較的幅広い沈線で4単位のJ字文が描かれる。器形は胴部で弱くくびれる深鉢形土器で、くびれ部を境に2段の文様構成をもつ土器であろう。モチーフ間には繩文LRが充填されている。樋ノ下遺跡から出土した称名寺式では、第35号住居跡出土土器と共に、最も古い様相を持っている。口径49.2cm、現存高25.5cmである。

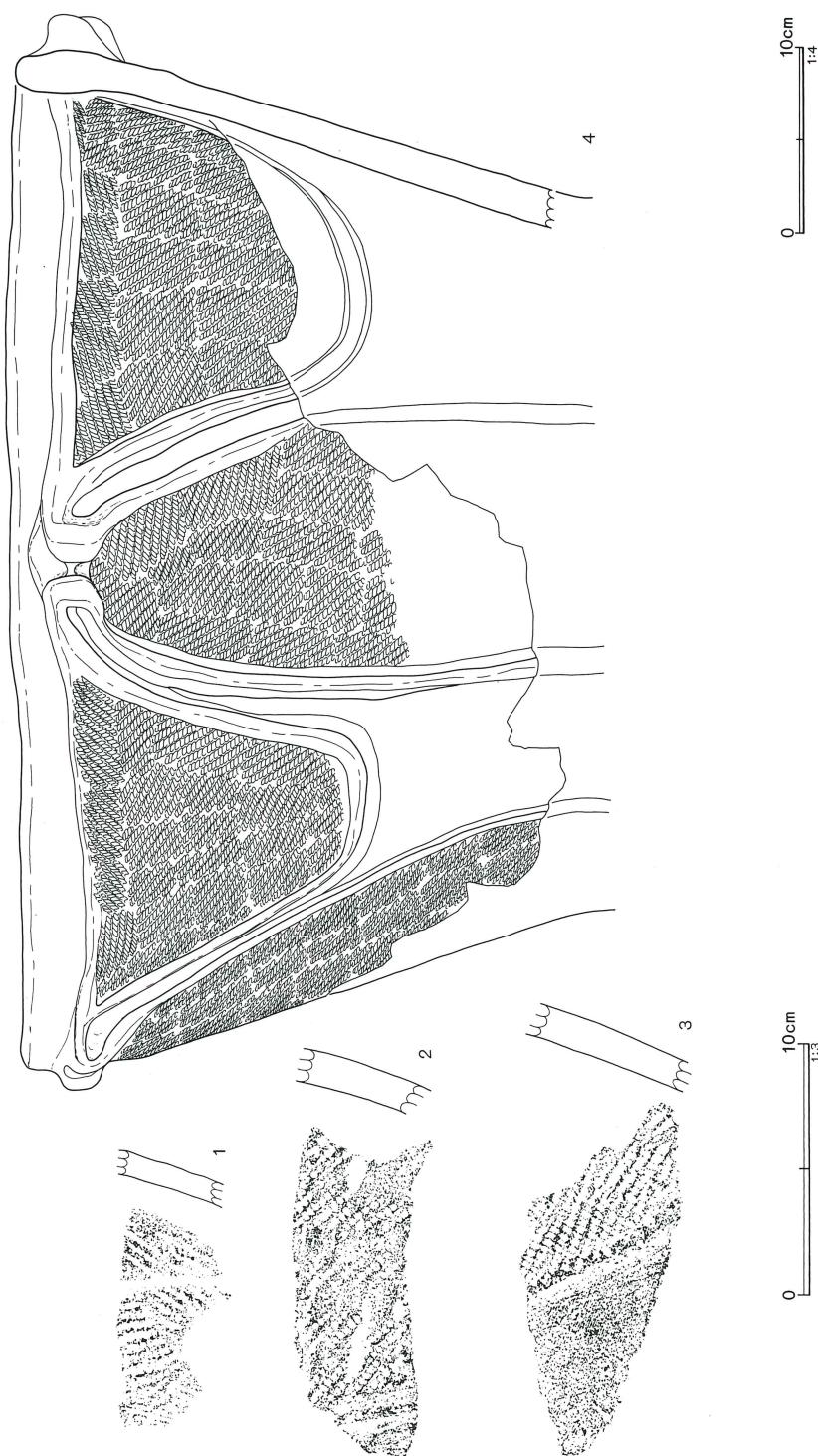


0 10cm
1:4

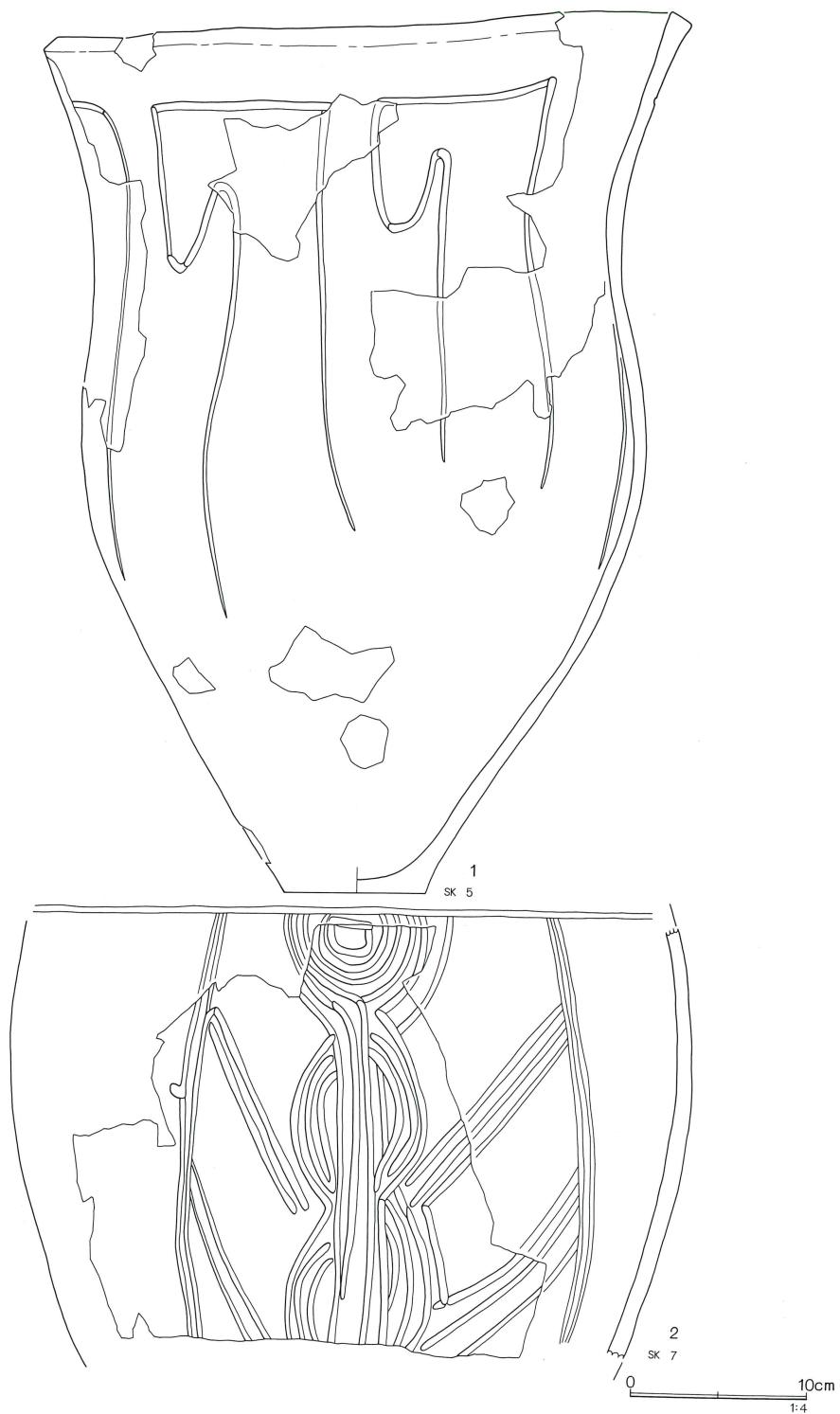
第82図 土壙出土土器 (1)



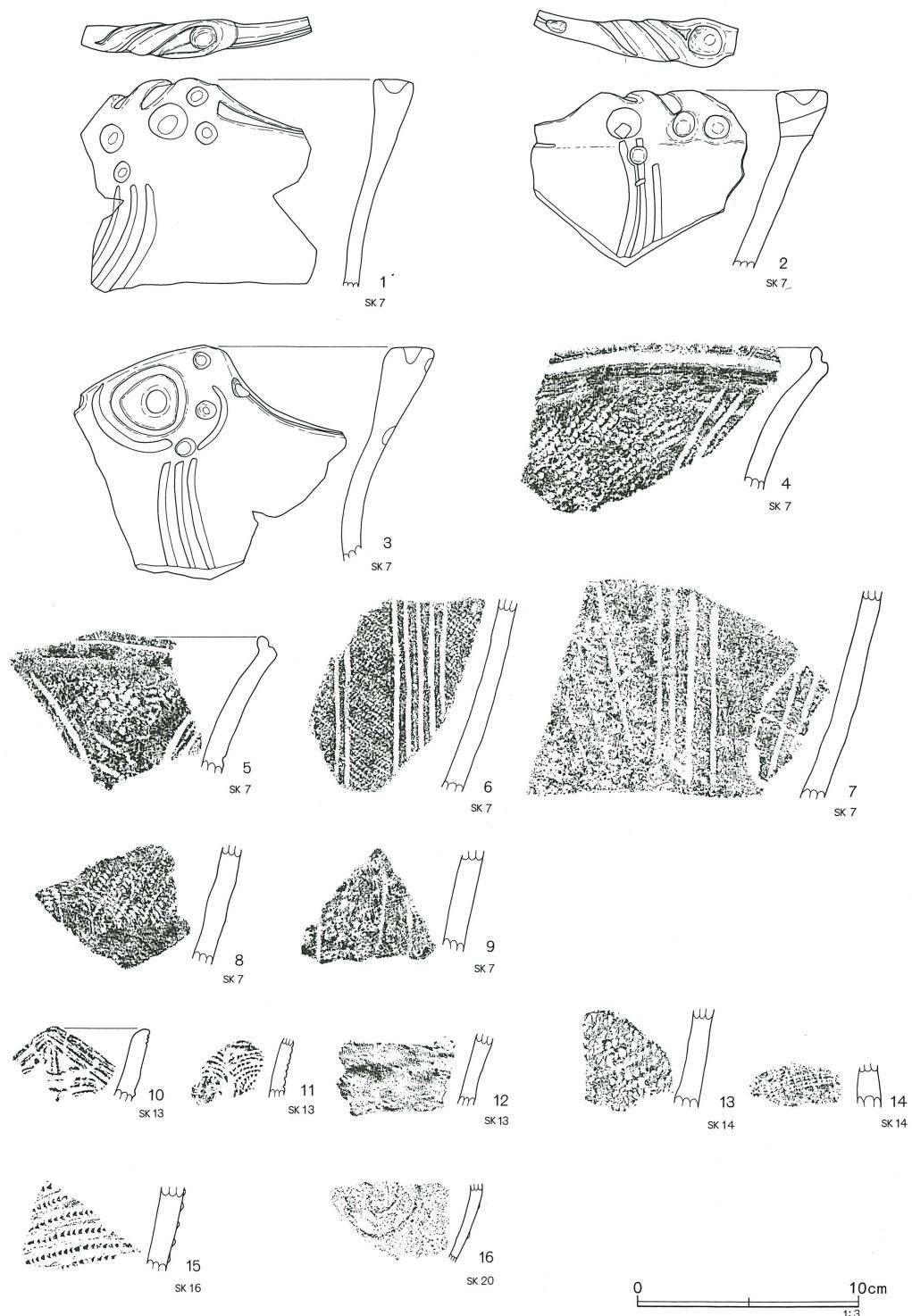
第83図 土壙出土土器 (2)



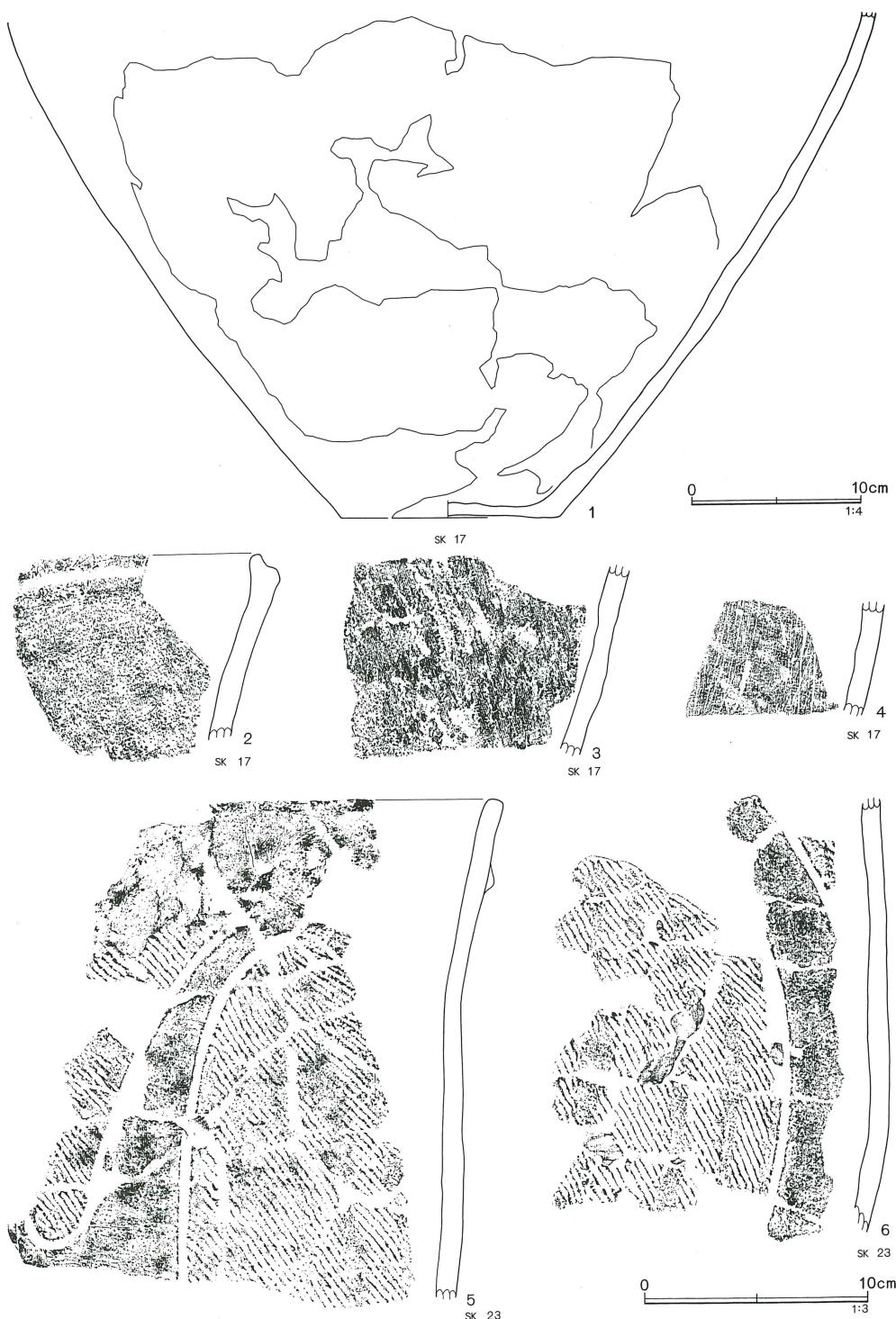
第84図 土壙出土土器（3）



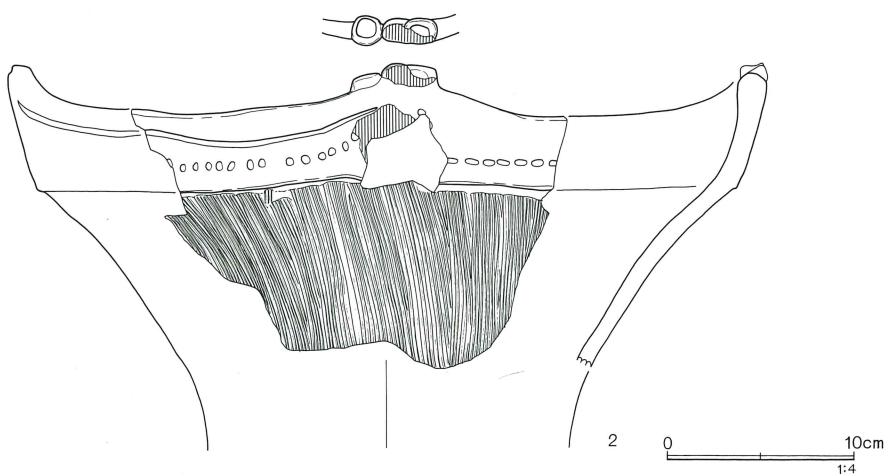
第85図 土壙出土土器 (4)



第86図 土壤出土土器 (5)



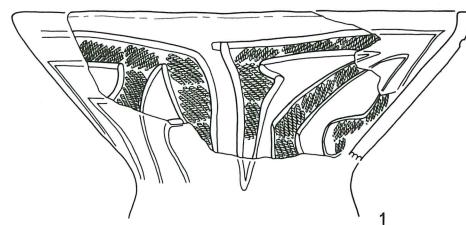
第87図 土壌出土土器（6）



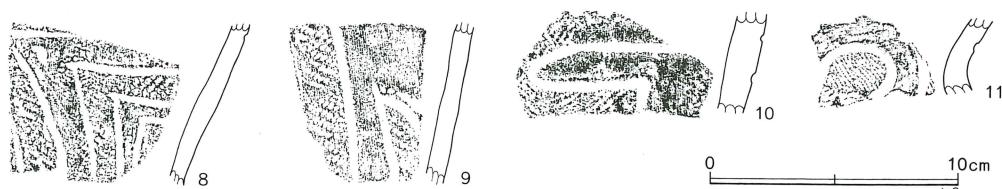
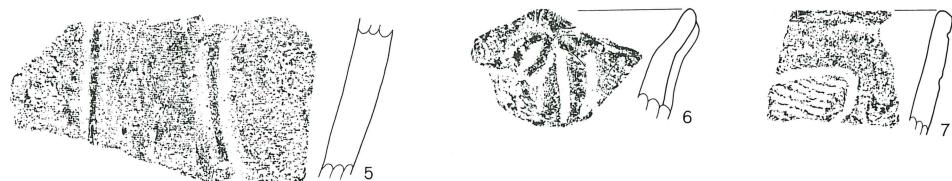
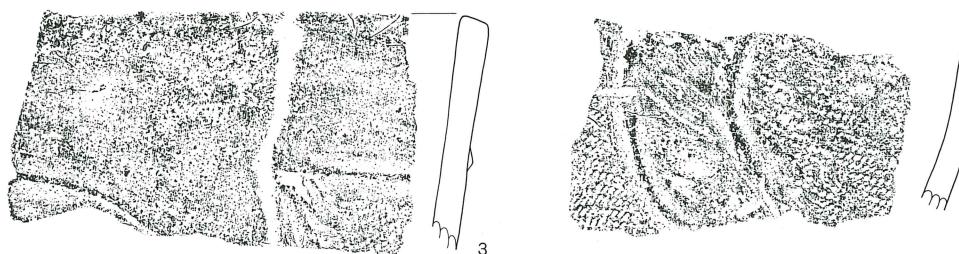
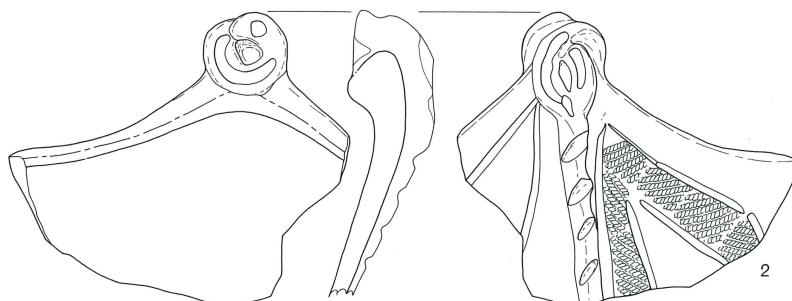
第88図 土壙出土土器 (7)



第89図 土壙出土土器（8）

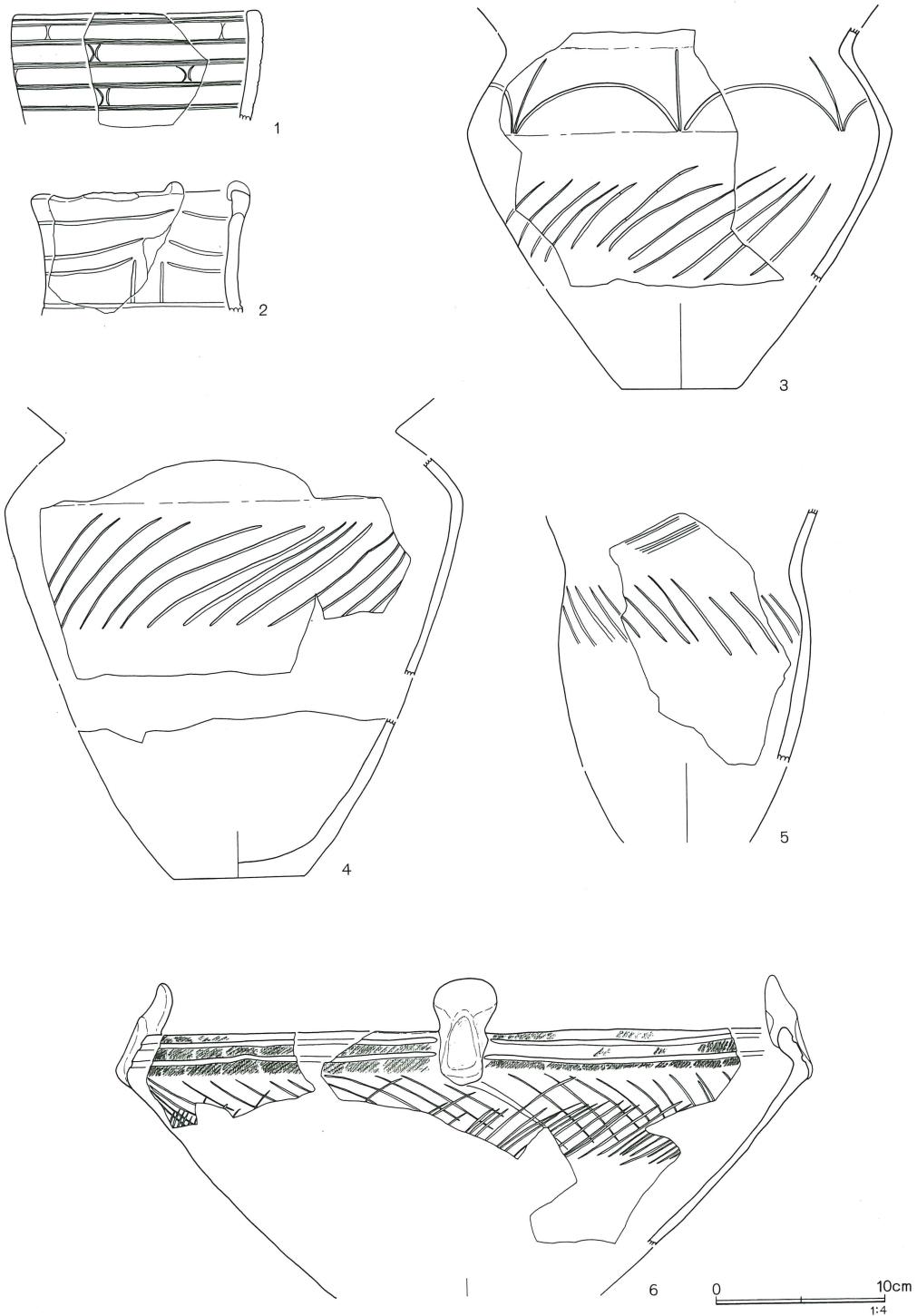


0 10cm
1:4

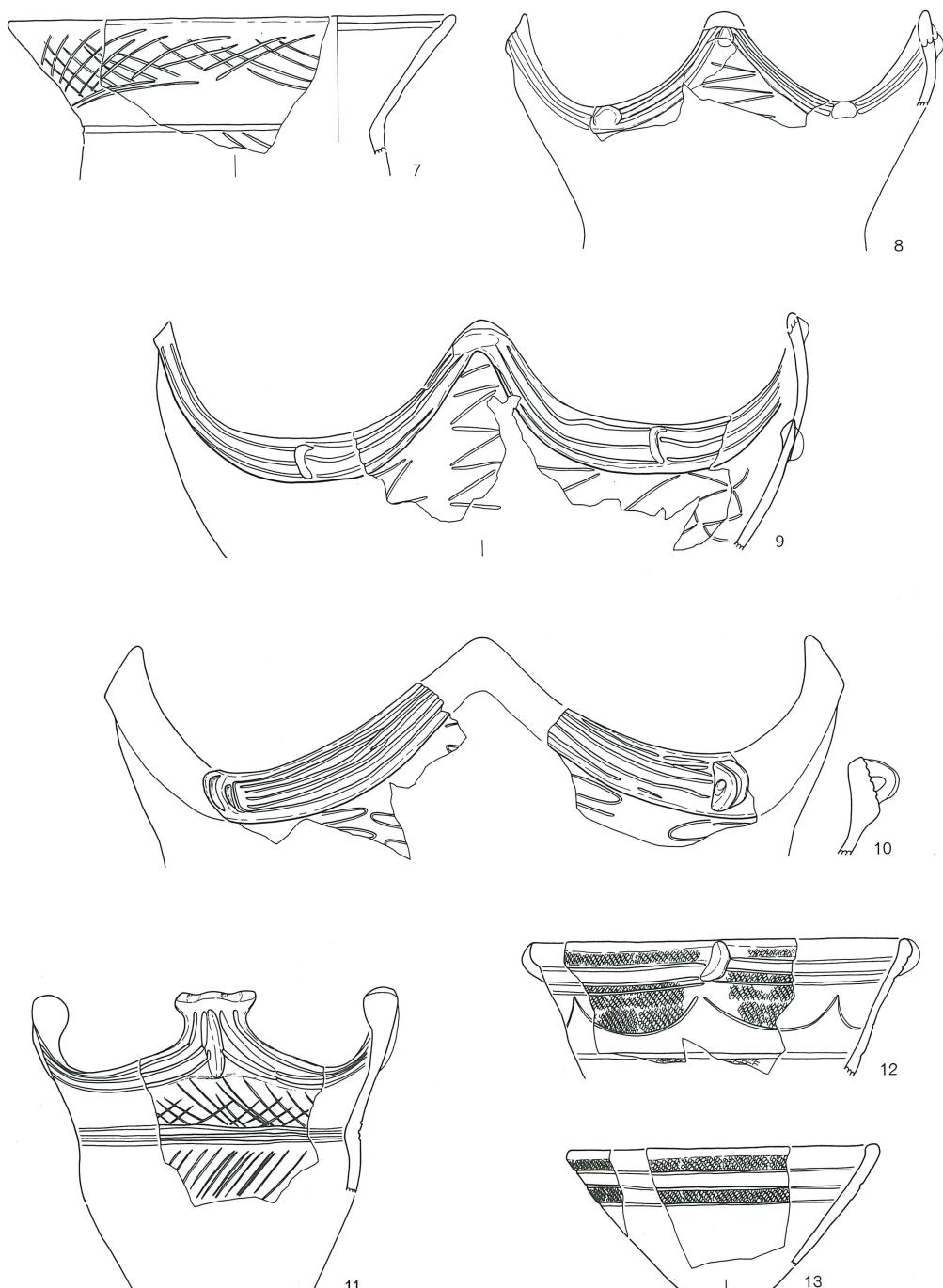


0 10cm
1:3

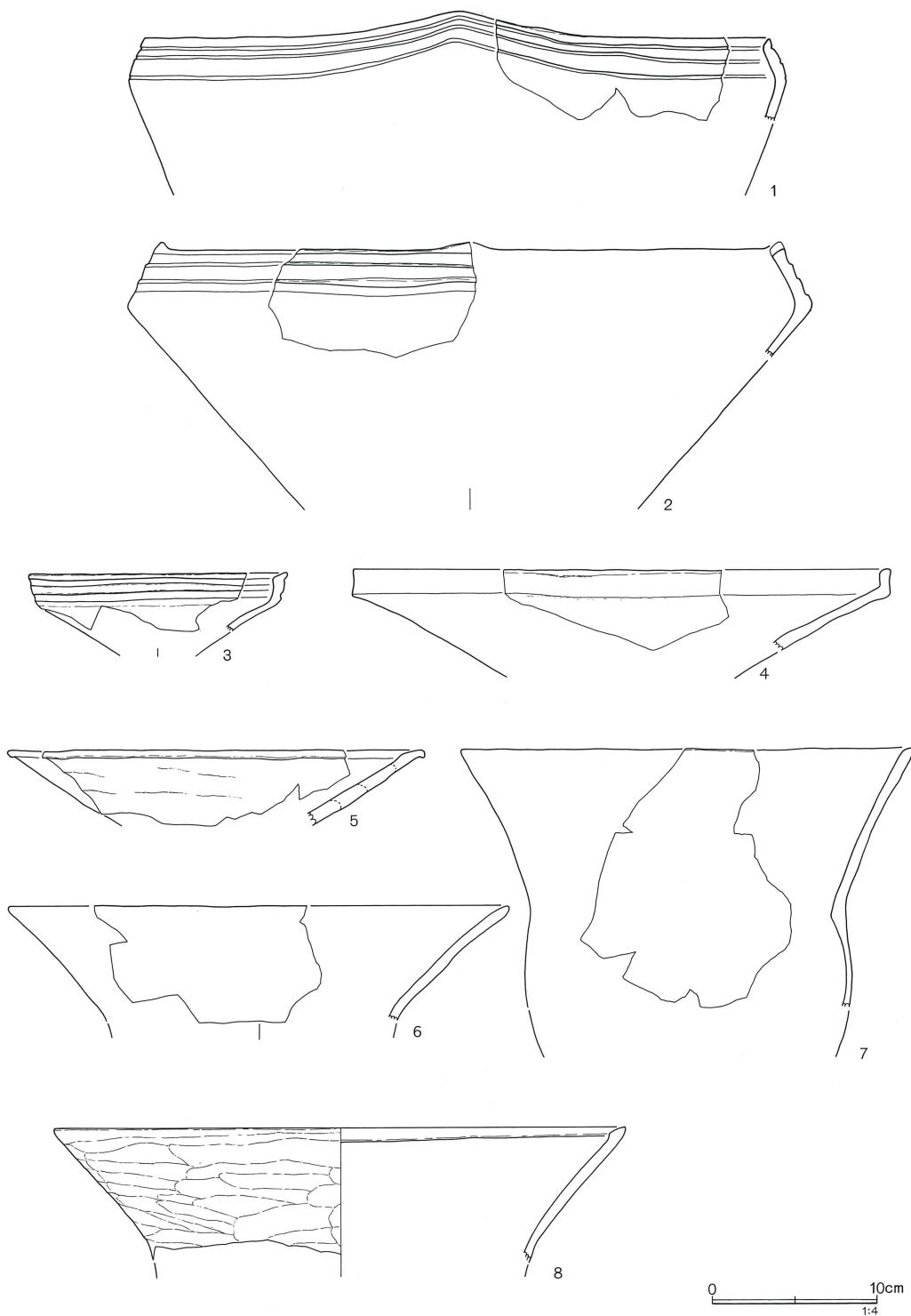
第90図 土壙出土土器 (9)



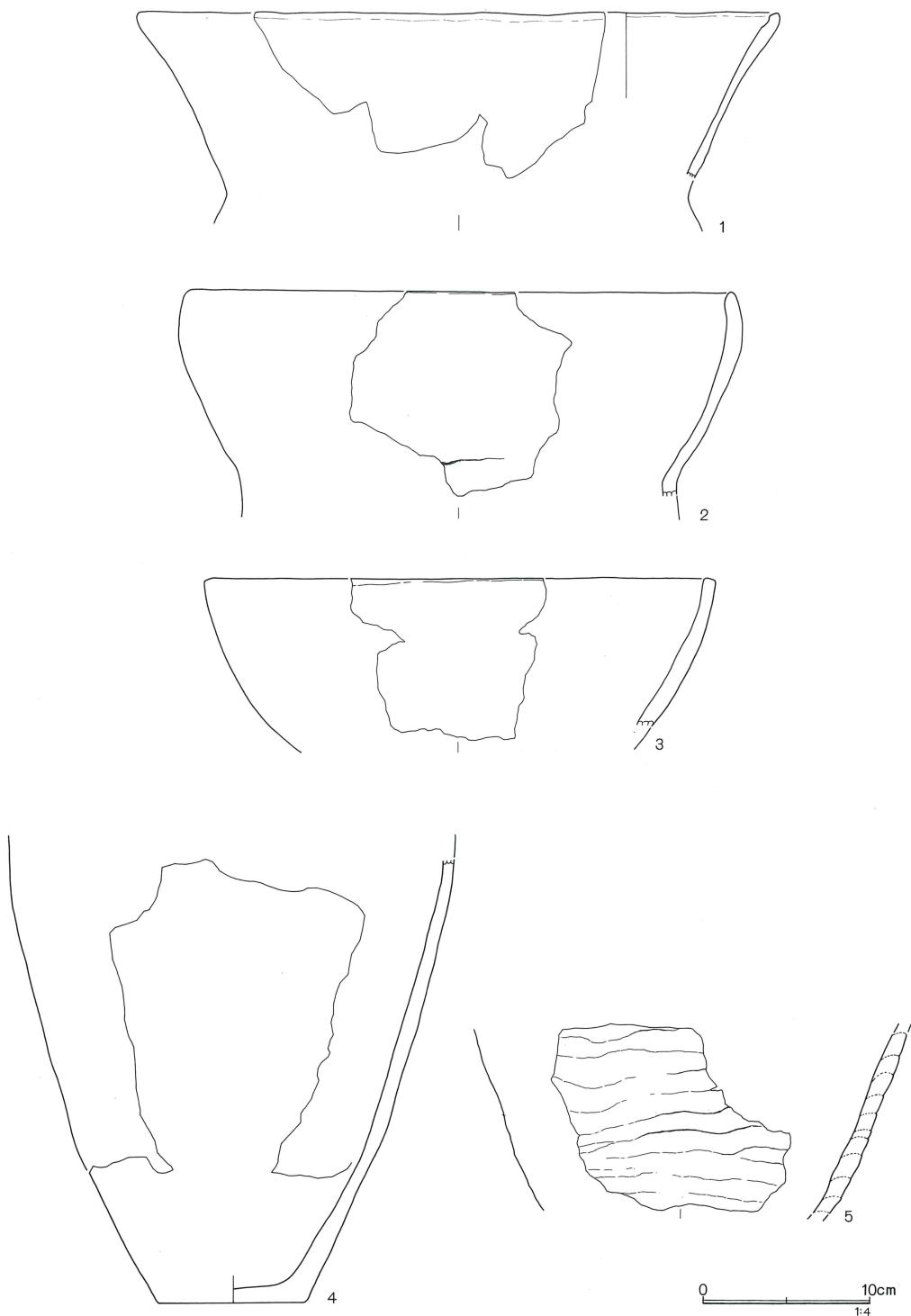
第91図 土壙出土土器 (10)



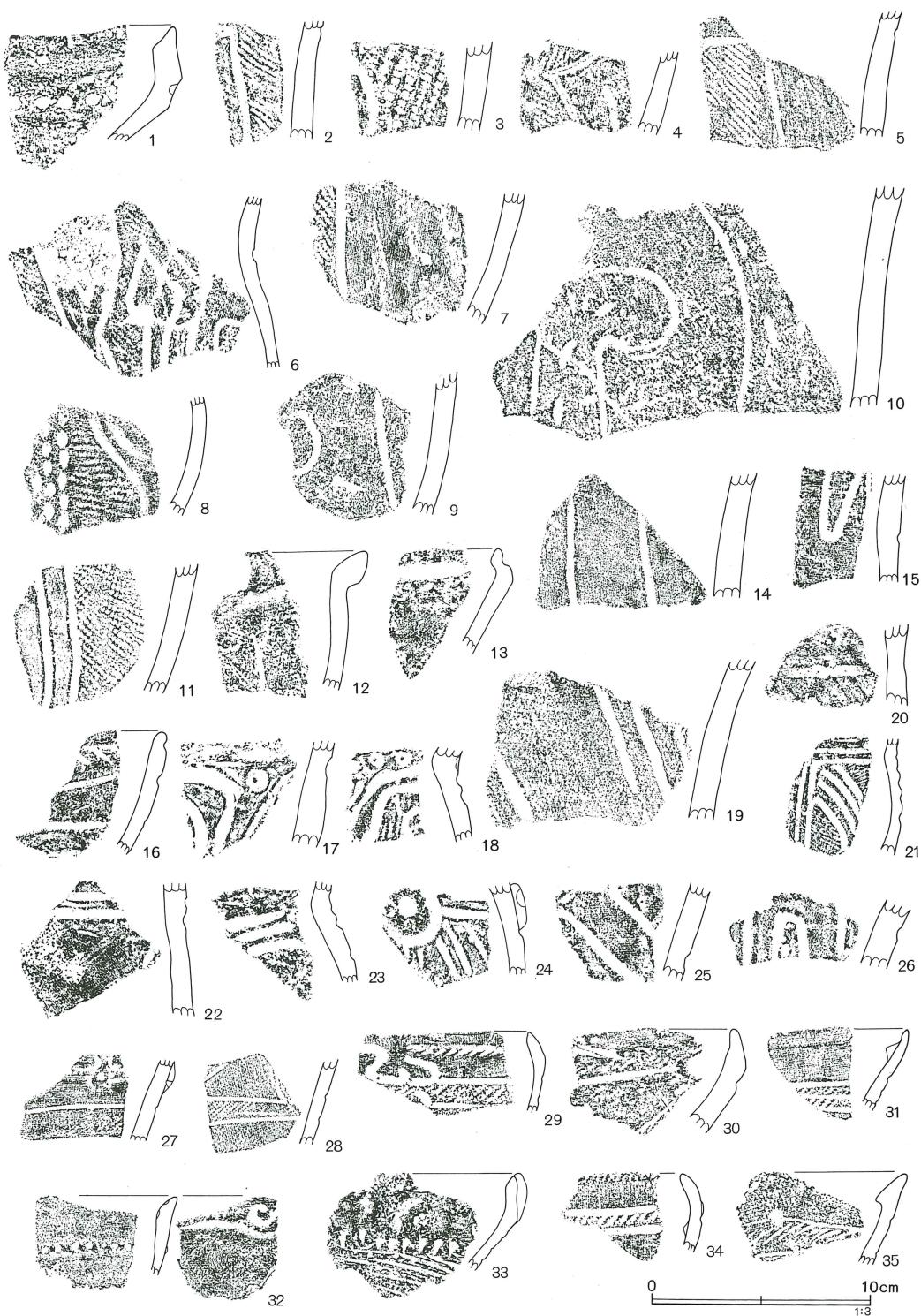
第92図 土壙出土土器 (11)



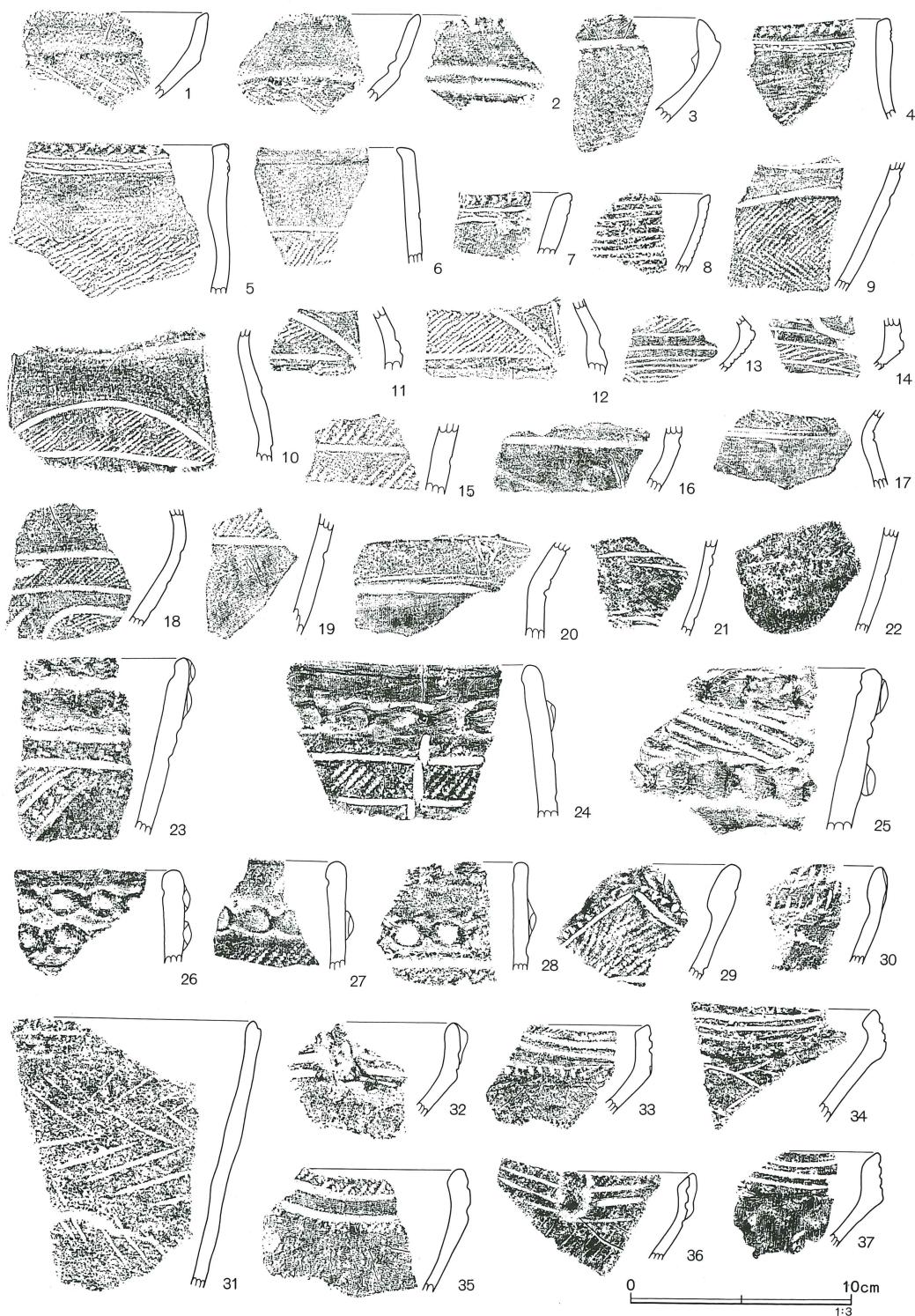
第93図 土壙出土土器 (12)



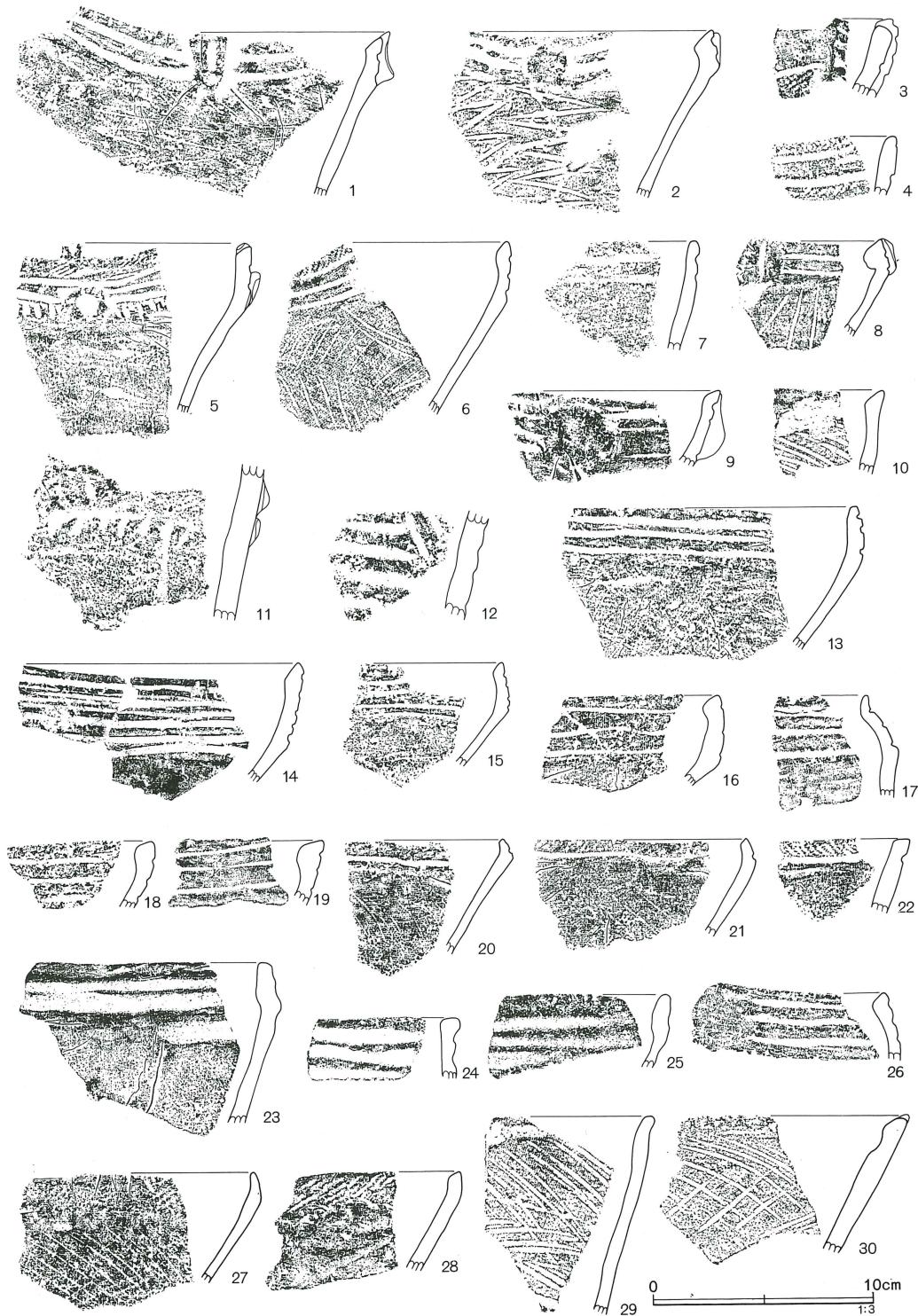
第94図 土壙出土土器 (13)



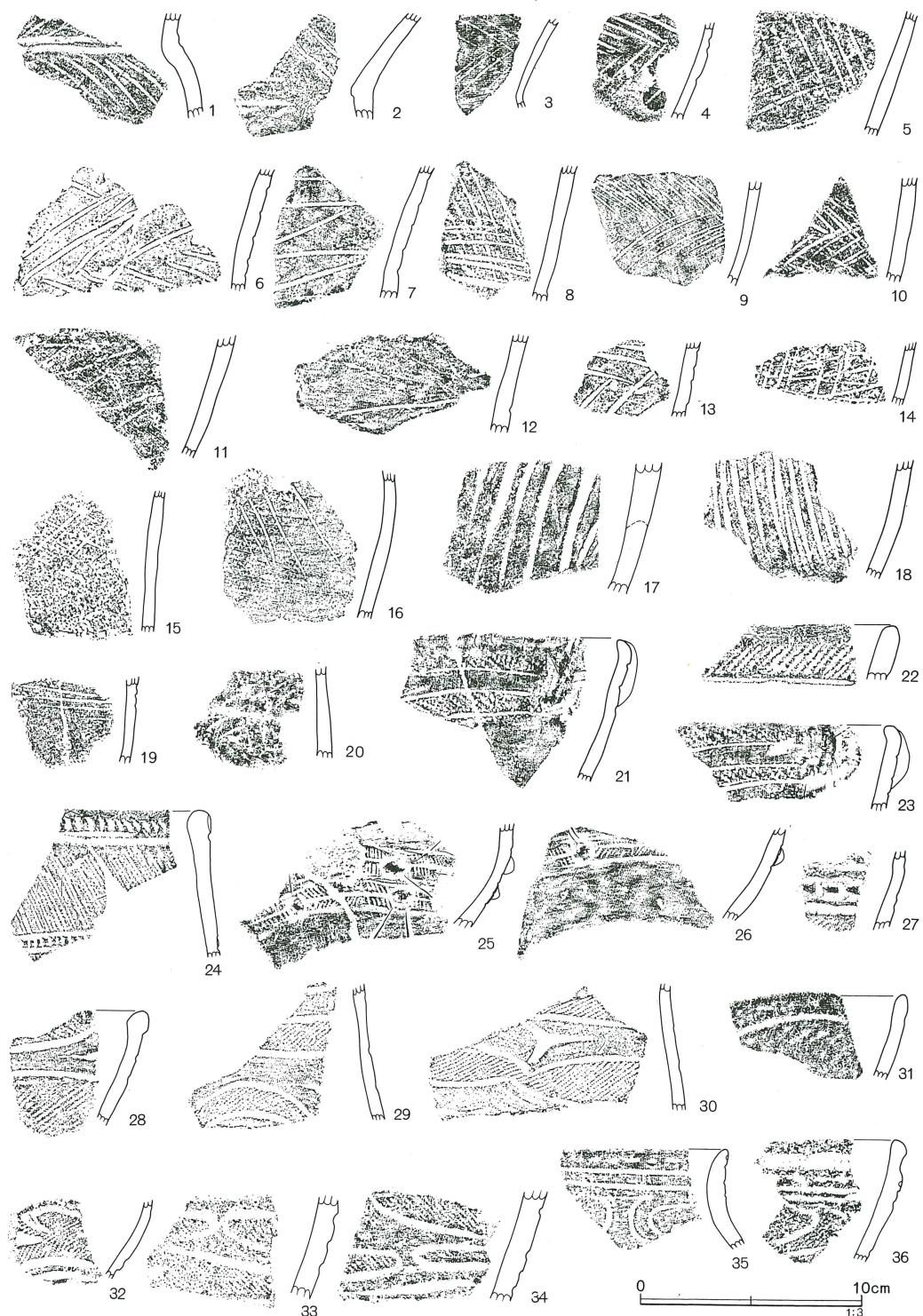
第95図 土壌出土土器 (14)



第96図 土壌出土土器 (15)



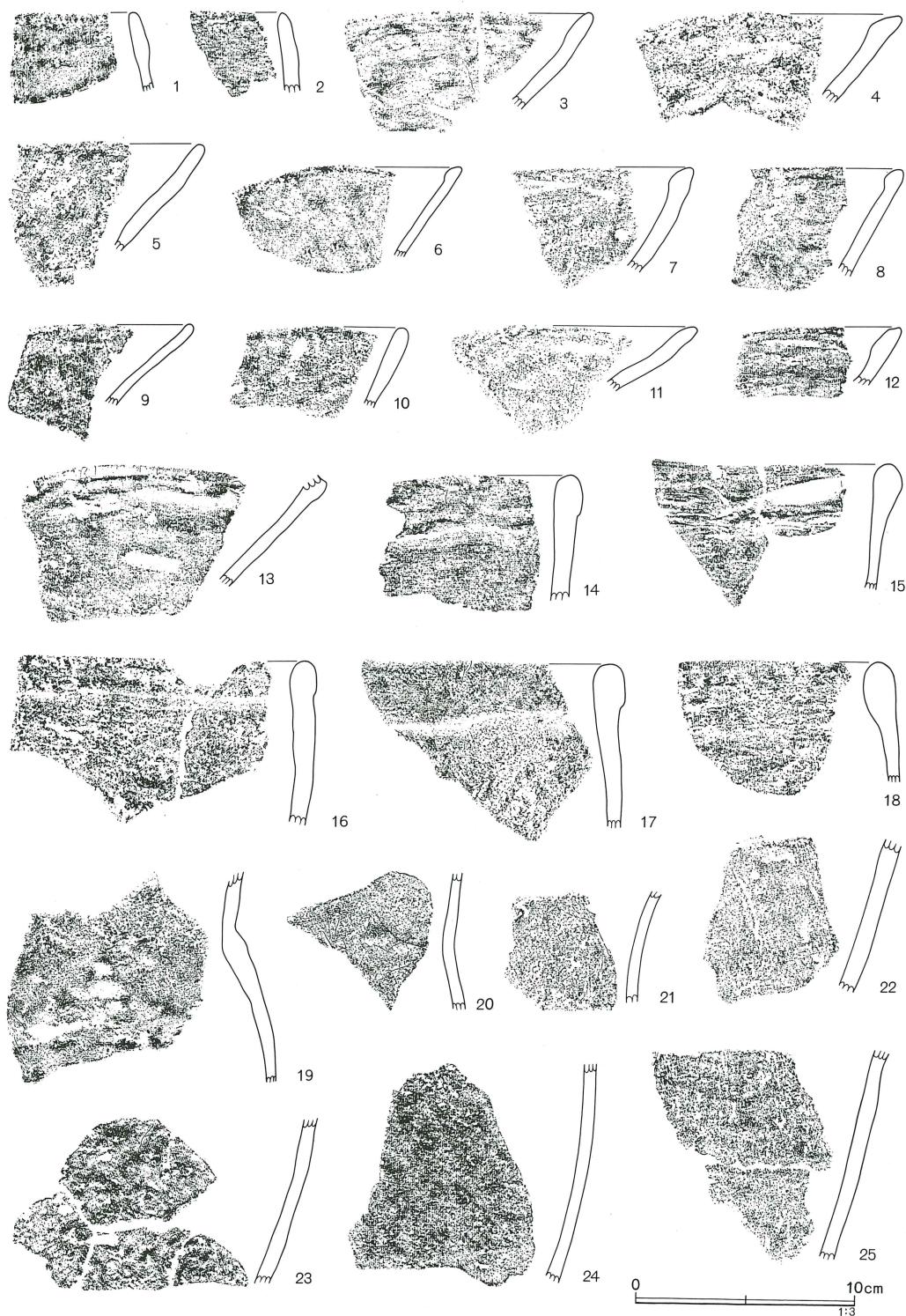
第97図 土壙出土土器 (16)



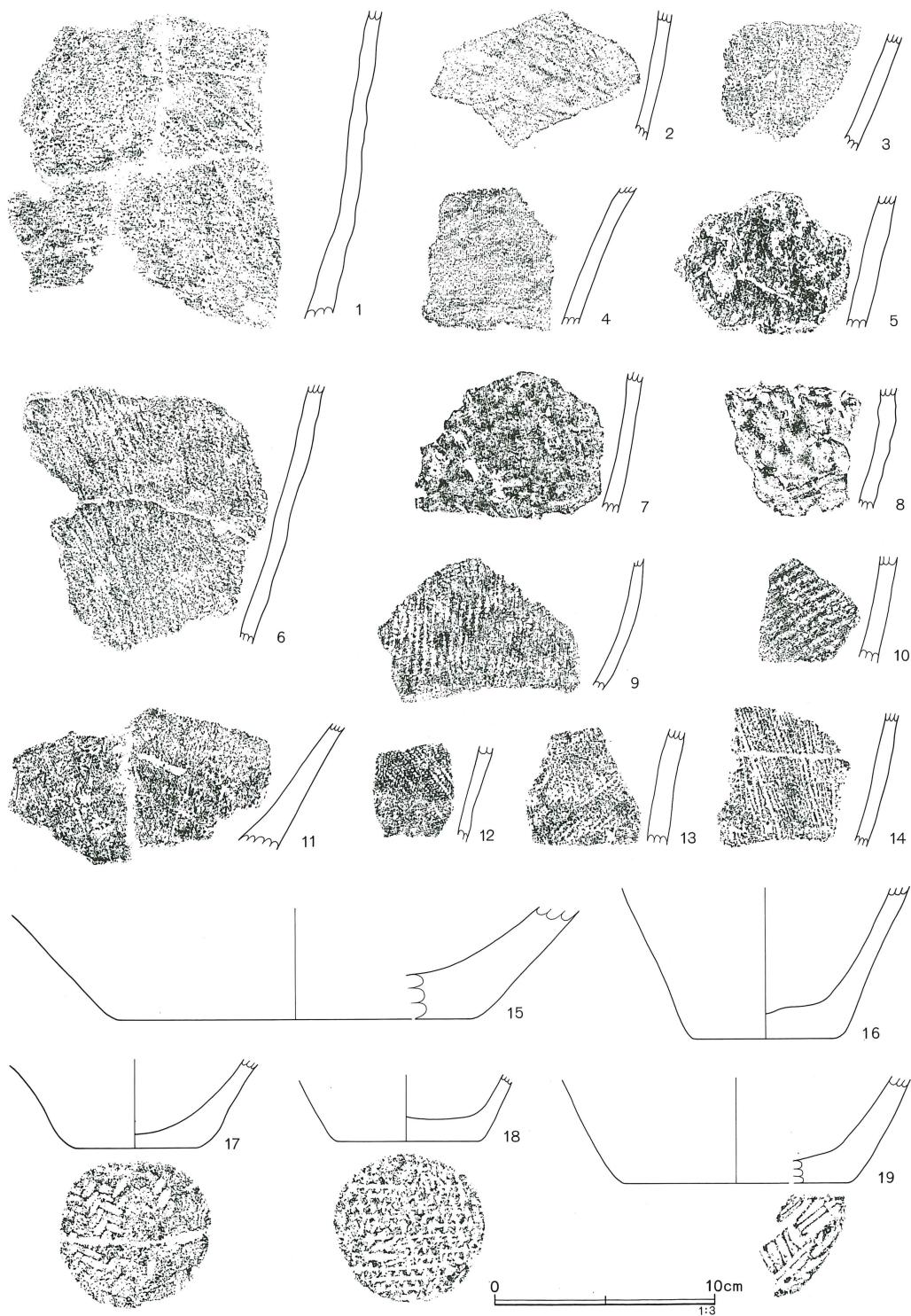
第98図 土壌出土土器 (17)



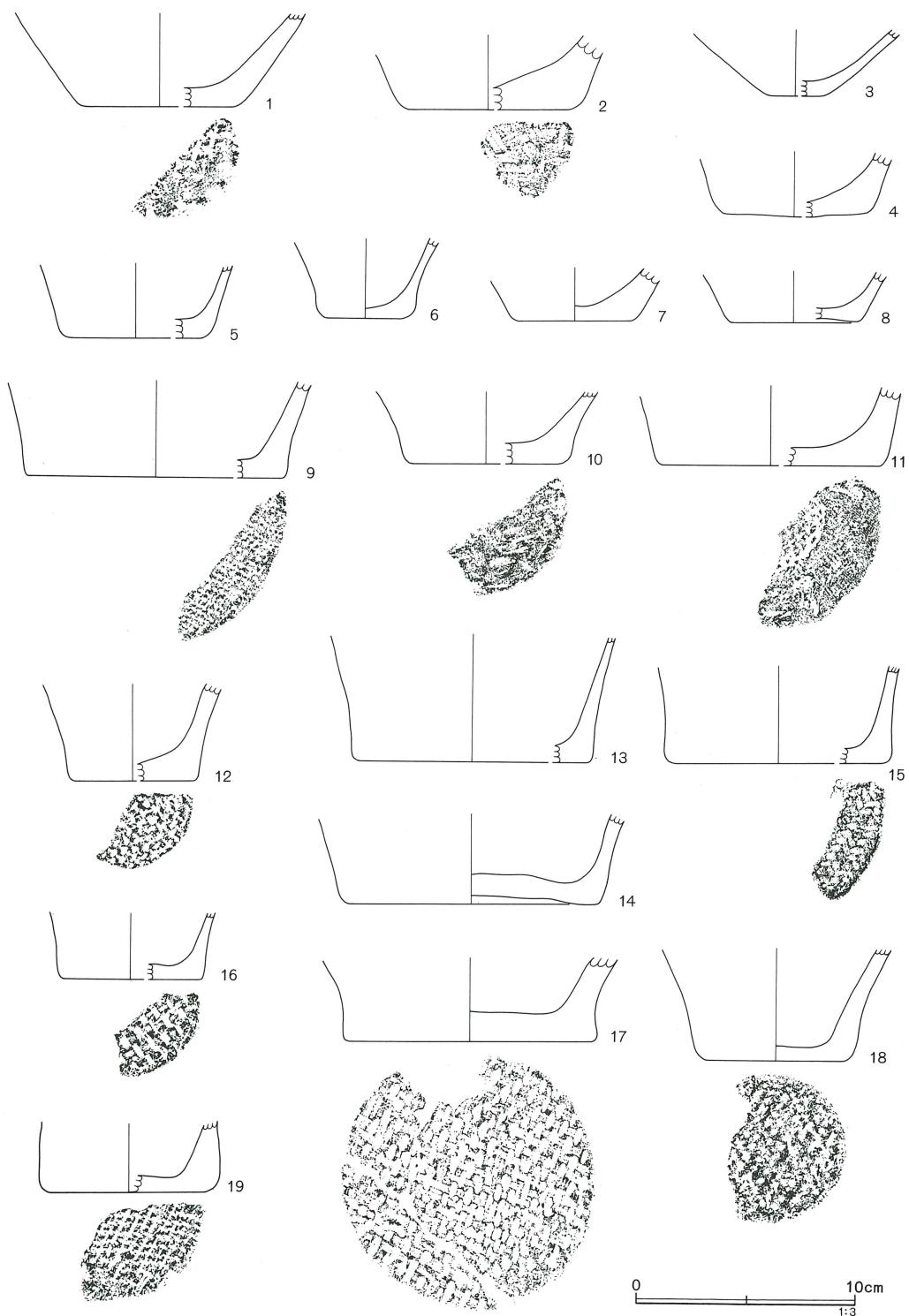
第99図 土壙出土土器 (18)



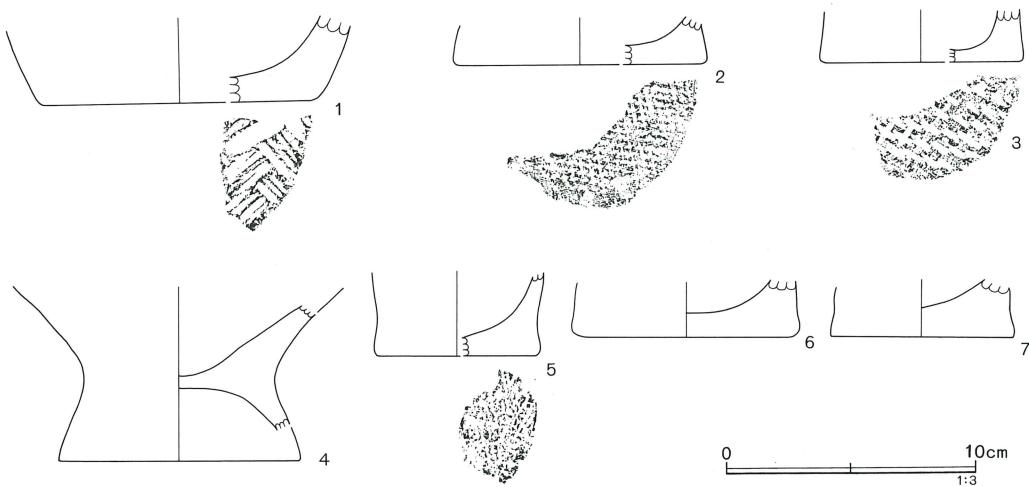
第100図 土壌出土土器 (19)



第101図 土壌出土土器 (20)



第102図 土壙出土土器 (21)



第103図 土壙出土土器 (22)

第85図2が第7号土壙出土土器である。胴部破片で、渦巻き状の密接沈線文から垂下する三状の沈線で、器面が区画され、区画間には渦巻き状沈線文から延びる対弧状や斜行沈線が描かれる。

第4面 (第81図)

先の第3面の南側、L-14~15グリッドに位置する土壙で、標高が87から87.2mの緩斜面部から平坦部に構築された土壙である。第3面や、後述する第5面と同様の地形に占地している。第23号および第86号土壙が該当し、ともに屋外単独埋設土器である。第86号土壙は、埋設土器の周辺から礫が検出された。礫は砂岩の河原石やホルンフェルス等で、周辺に散在しており、まとまりは認められなかった。礫には剥離された痕跡も認められたが、周辺からは製品は出土しなかった。土壙は第7号墳の周溝際に位置しており、同古墳の築造によって破壊されていることを考慮に入れると、周辺部から検出された復元不能な礫の出土も、或いは同土壙に伴う何らかの配石とみることもできよう。

第23号土壙は、大半が攪乱を受けており、わずかに壙底から壁の立ち上がりの一部が検出されたにすぎない。わずかに攪乱の及ばなかった土壙の覆土内からは、大型土器片が出土した。

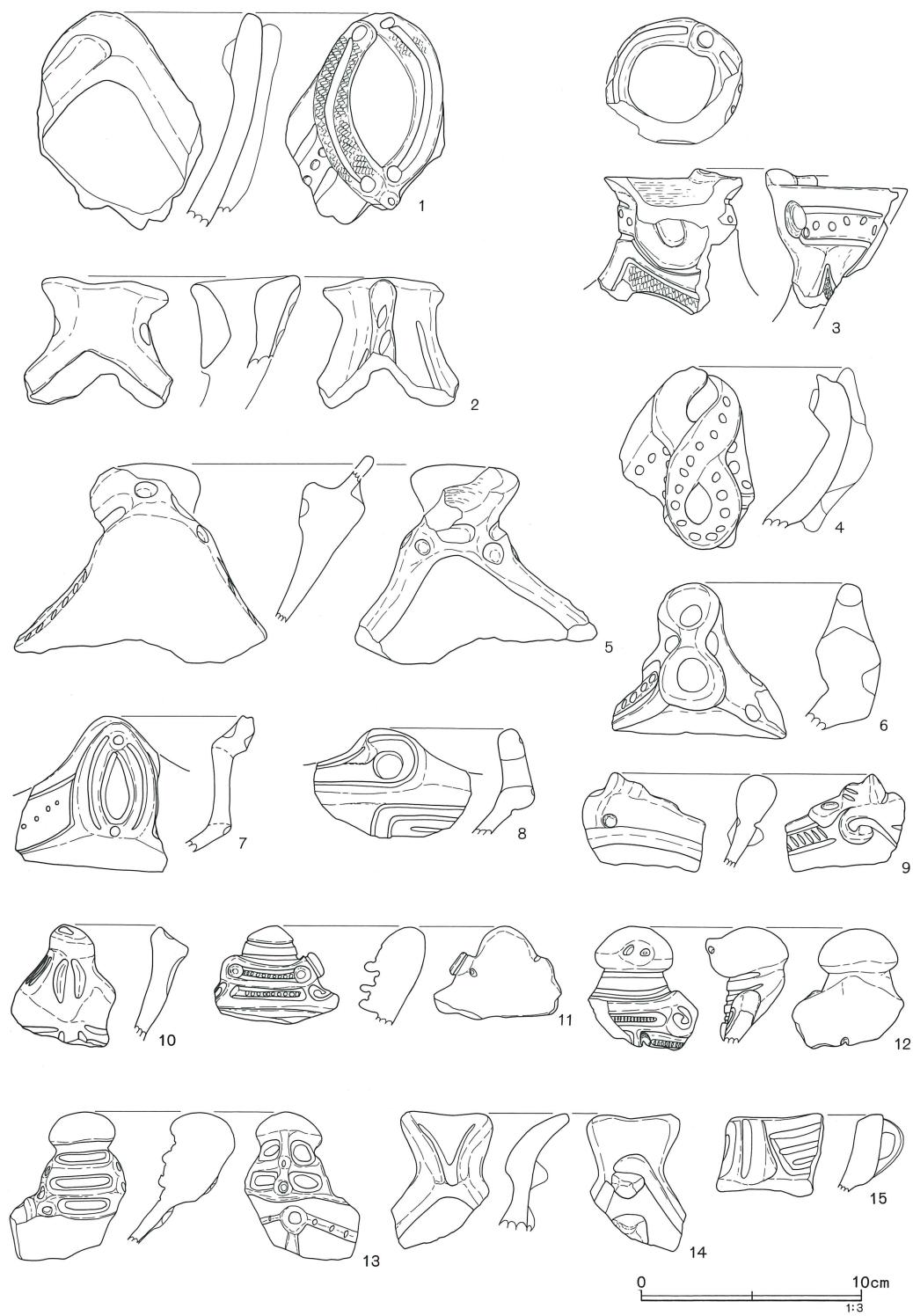
第4面土壙出土遺物 (第87図5~6・第119図2)

第87図5~6が第23号土壙出土土器である。同一個体で、沈線によりU字・逆U字状のモチーフが描かれ、モチーフの接点に突起をもつ。文様間には縄文LRが充填される。

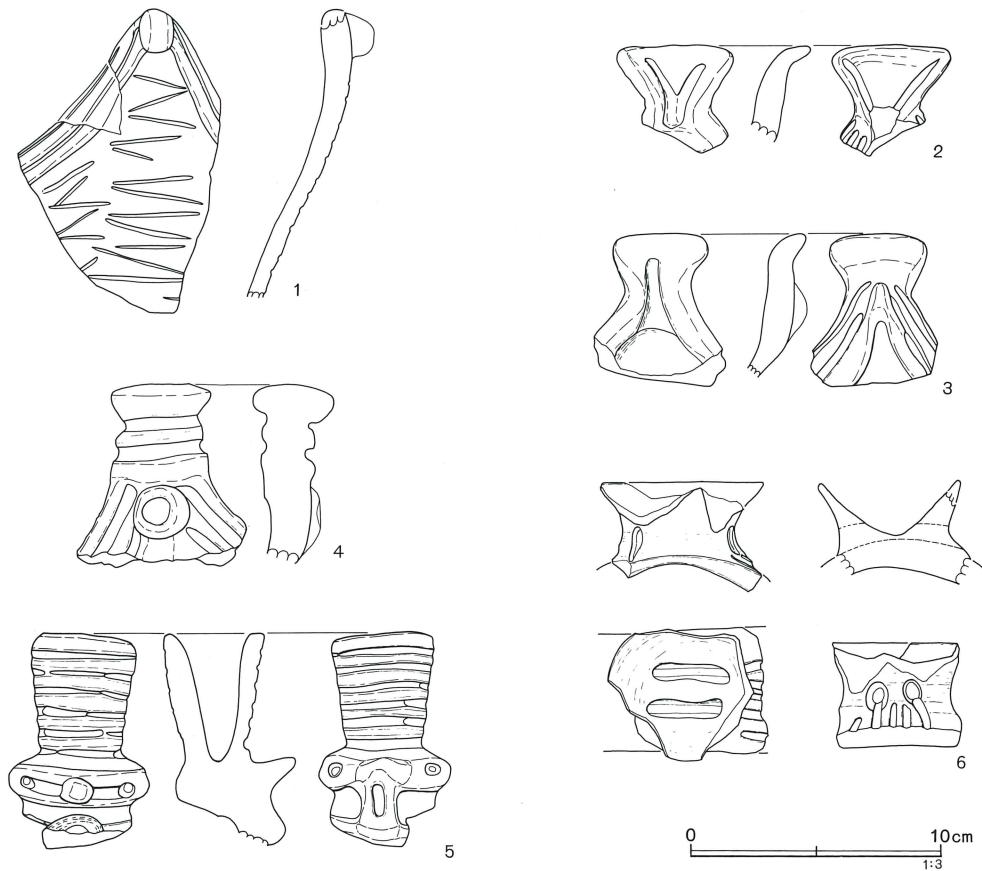
第119図2は、第86号土壙出土土器である。底部からやや内湾気味に立ち上がる深鉢形土器で、口唇直下と胴中位に2個一対の突起が4単位貼付されている。突起は沈線で連結され、沈線間及び突起上には刺突が加えられている。器面には整形の際の粗い擦痕が残され、無文である。曾谷式から安行I式に比定されよう。口径28cm・器高31.6cm・底径7.6cmである。

第5面 (第106図)

L~O-9~12グリッドで検出された土壙を示した。微地形的には、寄居面IIから寄居面Iの間



第104図 土壌出土土器 (23)



第105図 土壌出土土器 (24)

に形成された、標高87.2m から86.4m 窪地状の地形があり、平坦部から緩斜面部に構築されている。

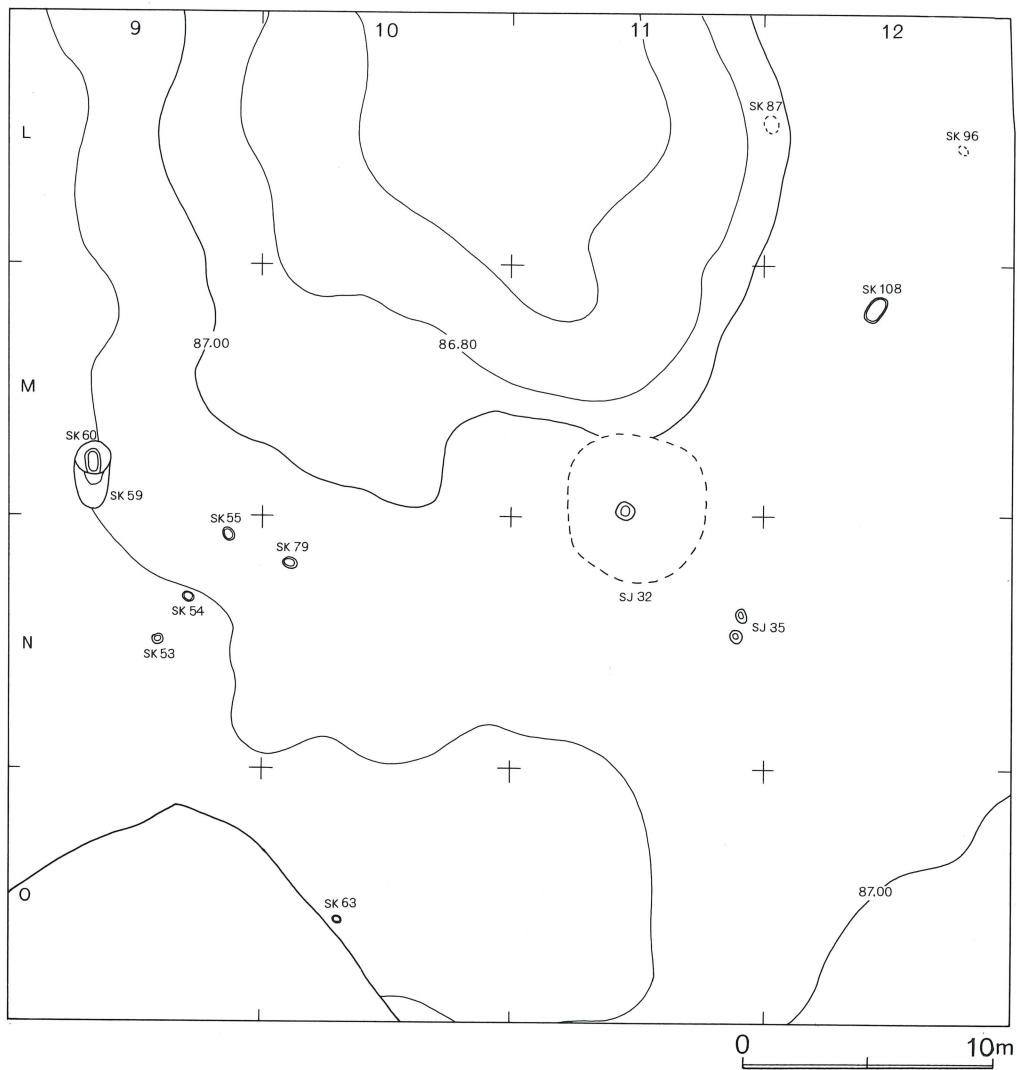
土壌は第59・60号および第108号を除く7基がいわゆるD類の屋外単独埋設土器であり、特に第53号から55号土壌は、ほぼ1m 間隔で直線的に構築されていた。

第59・60号土壌は2基の重複であり、土層観察では60号土壌の埋没後に59号土壌が構築されたことが明らかである。60号土壌は形態から陥穴と考えられよう。両土壌とも遺物が出土しなかつたため、時期決定ができなかったが、形状や周辺土壌の覆土との比較から縄文時代の所産と考えた。

第108号土壌は径が90×72cm の楕円形で、確認面からの深さは24cm である。覆土上面から礫が検出されたが、加熱・使用などの痕跡は窺えなかった。

第53～55・63・79・87・96号土壌が、いわゆる屋外単独埋設土器である。土器の埋設に際して掘られた穴は、土器の直径からそれよりも一回り大きいものが通常である。第54号土壌では、土器の周囲に3層・黒褐色土がめぐっており、或いは有機物に被覆されて埋設された可能性も示唆される。

第87・96号土壌は、地山が砂層であったためか掘り込みが検出できなかった。土器の出土状態から屋外単独埋設土器と判断した。

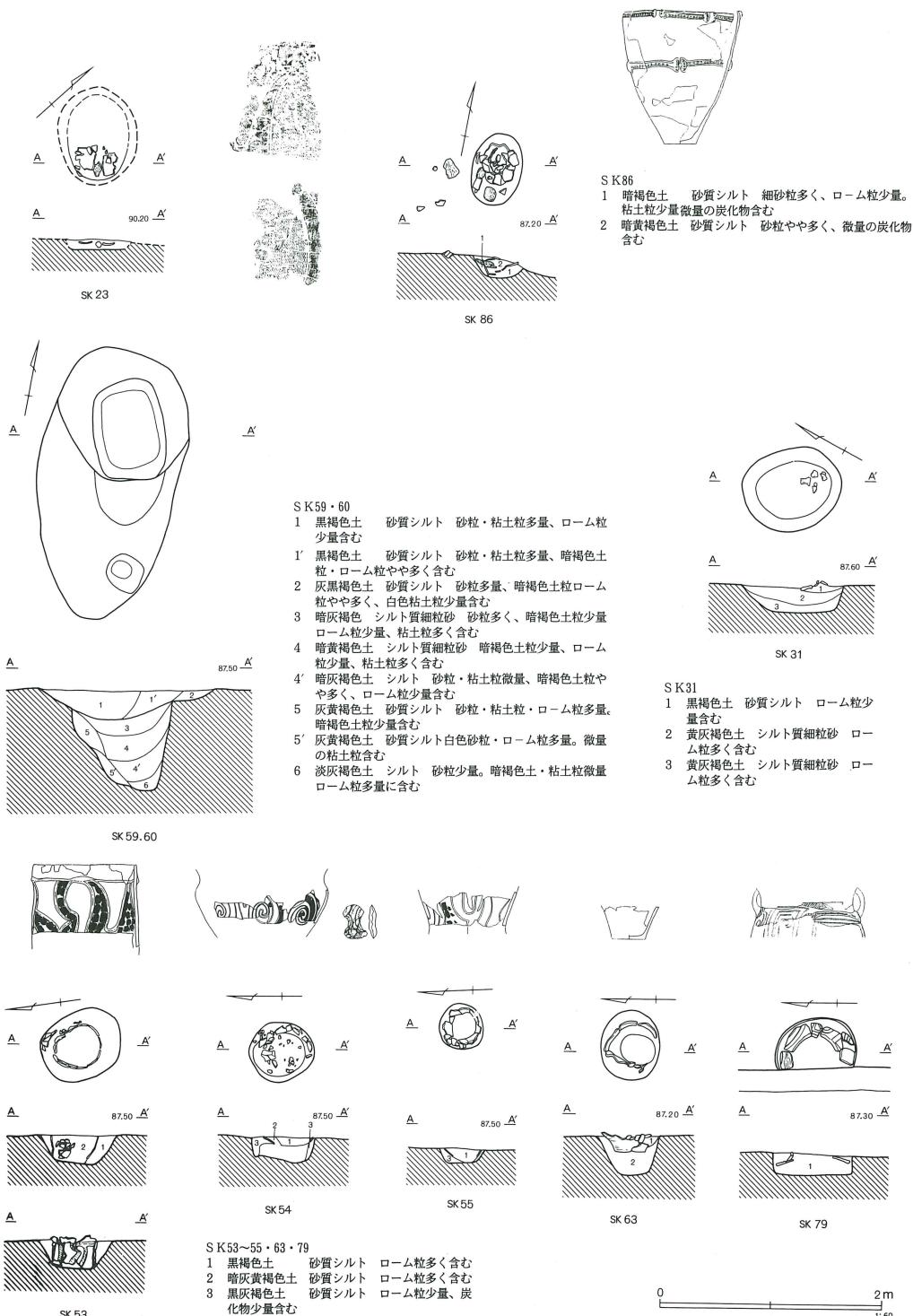


第106図 土壙位置図（第5面）

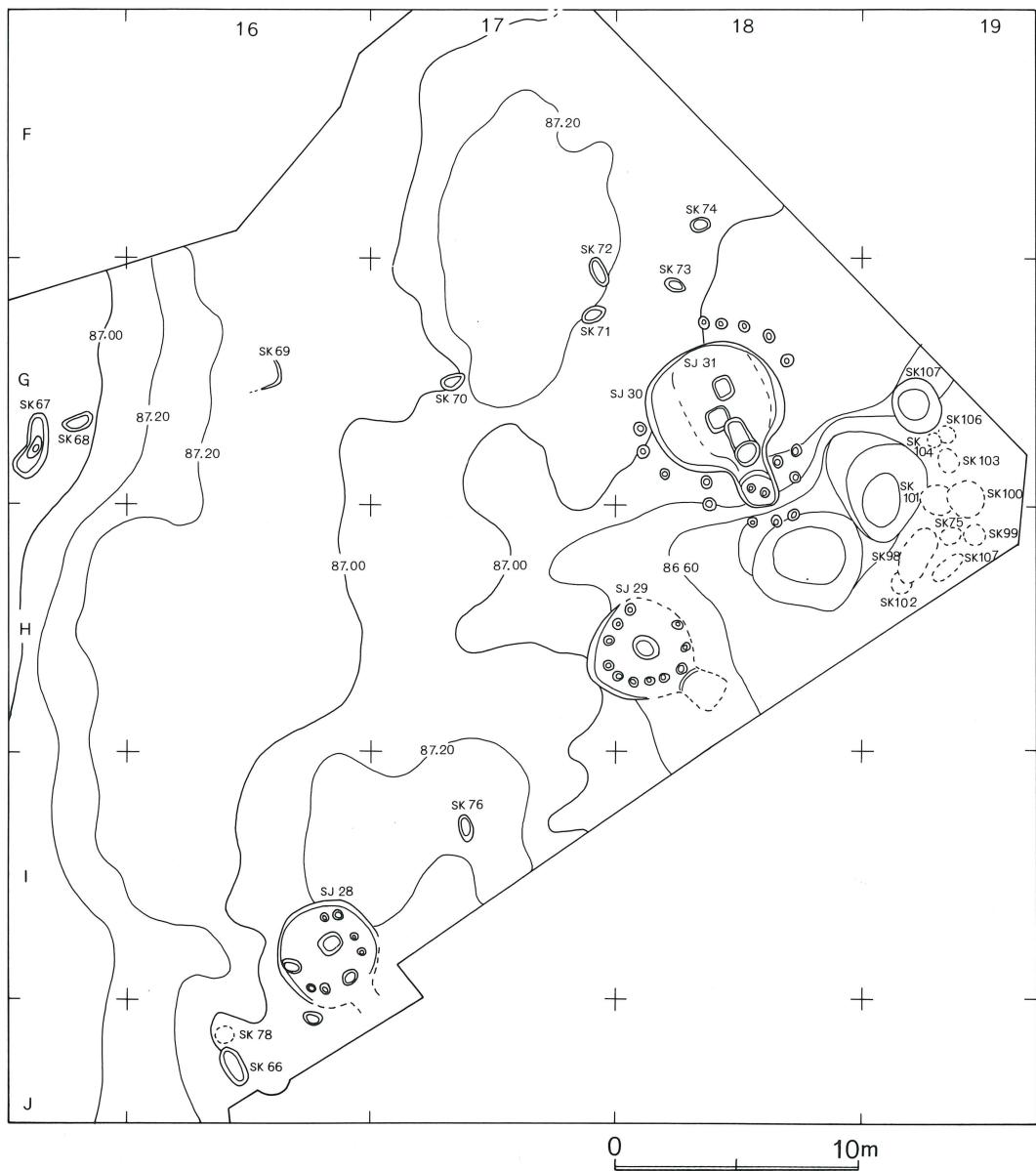
第5面土壙出土遺物（第116図～第117図・第120図）

第116図が第53号土壙出土土器である。胴中位に最大径をもち、緩やかにすぼまる深鉢形土器である。文様は隆起線で描かれ、基本となる3単位のJ字文が接する部分が鍔状に突出する。J字文間にU字状のモチーフが配されている。構成の全容が窺えないが、欠損部分に横走する隆起線が観察されることから、胴中位で文様が閉塞されるようである。J字文が2条の隆起線で描かれ、下部で屈曲するモチーフ構成は、称名寺式に酷似している。また、単位文的に配置されるU字状モチーフは加曾利E4式的様相を備えているといえよう。文様間には縄文LRが充填されている。風化が著しいが、縄文施文部以外は丁寧にナデ整形されているようである。口径37cm・胴部最大径38cm・現存高30cmである。

第117図1は第54号土壙出土土器である。胴中位のみ残存しており、渦巻き状のモチーフで構成され、縄文LRが充填されている。



第107図 土壌 (5)

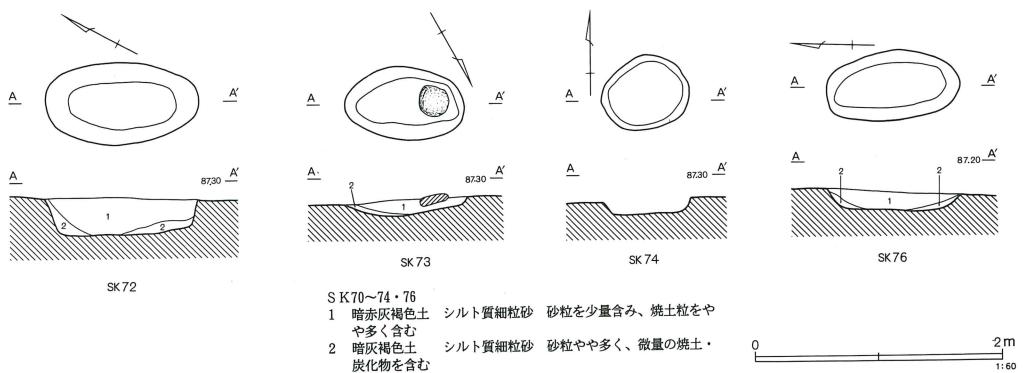
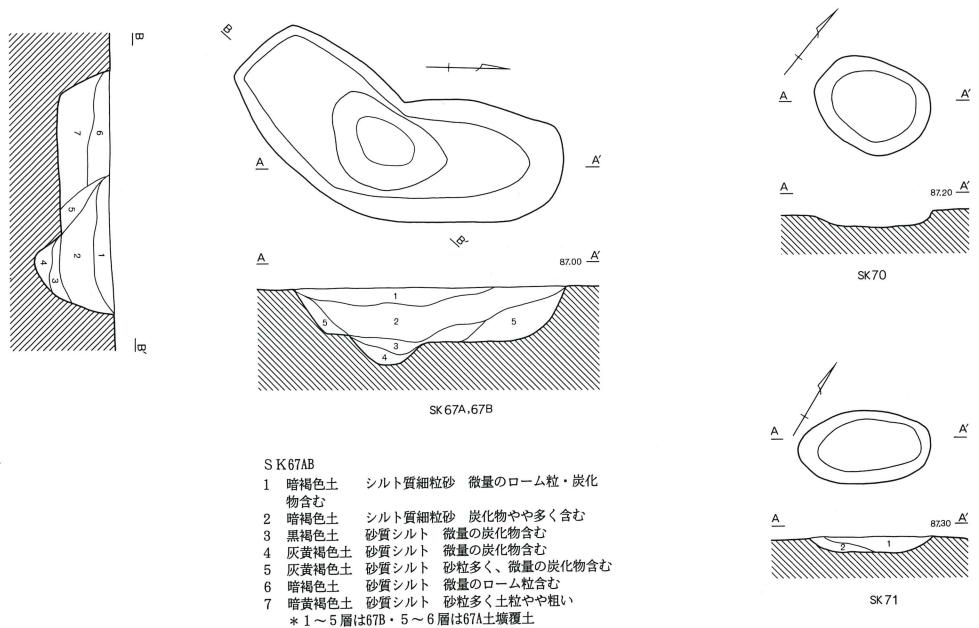
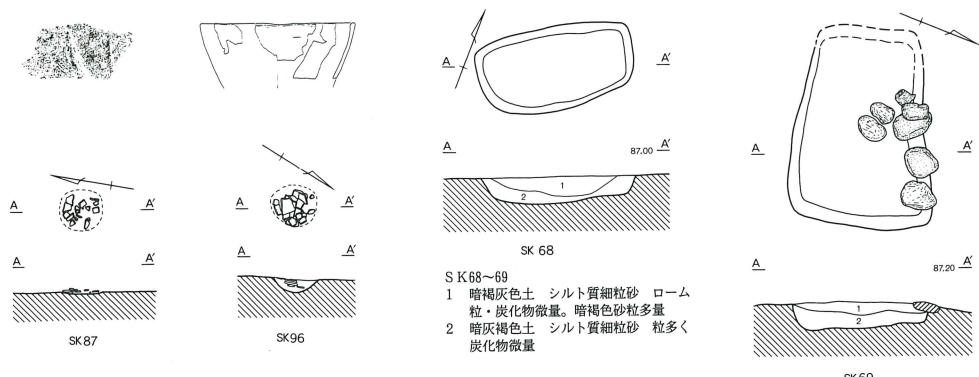


第108図 土壌位置図（第6面）

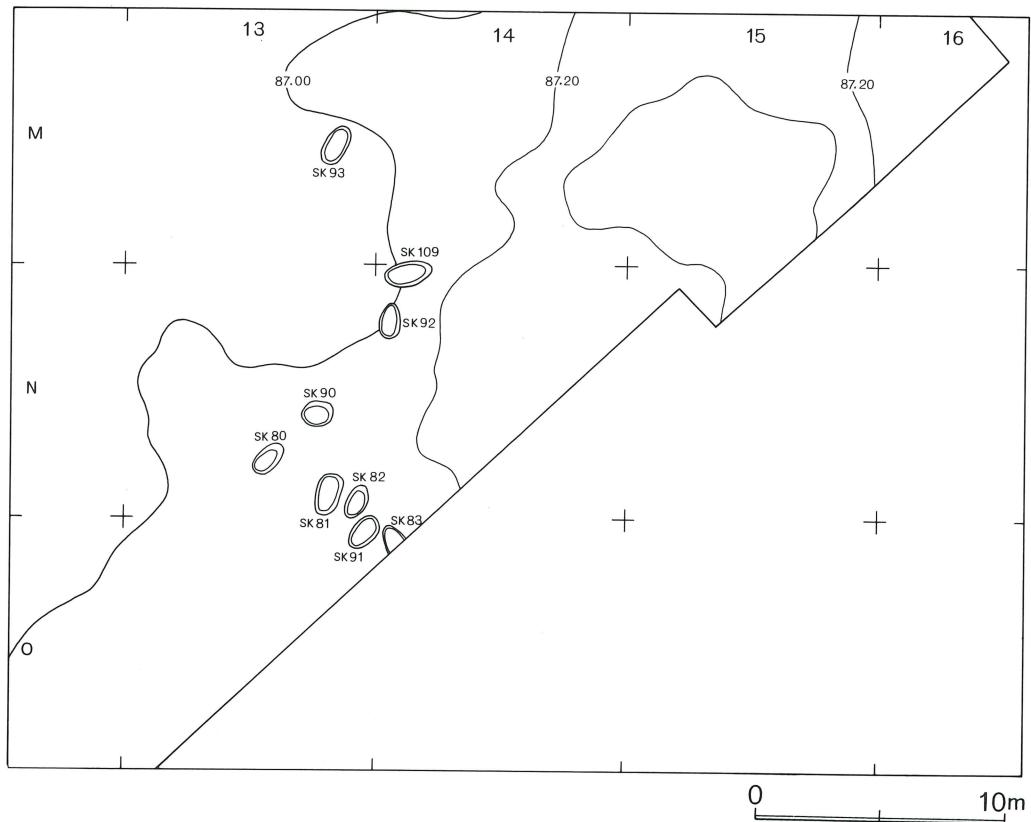
第117図2は55号土壌出土土器である。胴屈曲部から上半のみ残存しており、4単位のJ字状文様構成が窺える。器面の風化が進行しているが、縄文LRが充填されている。

第117図3は第63号土壌出土土器である。底部のみ残存し、無文である。器面の風化が著しい。

第120図1は第79号土壌出土土器である。残存部位が少なく、剥落も顕著なため構成が明確ではないが、壺形に近い形状が想定される。器面には断面三角の隆帯が上下2段に交互に貼付され、隆帯間に沈線文が描かれる。文様には称名寺式との共通性が窺える。剥落部分から環状突起の存在が推定される。この類の構成を持つ土器は、本例のみである。



第109図 土壌 (6)



第110図 土壌位置図（第7面）

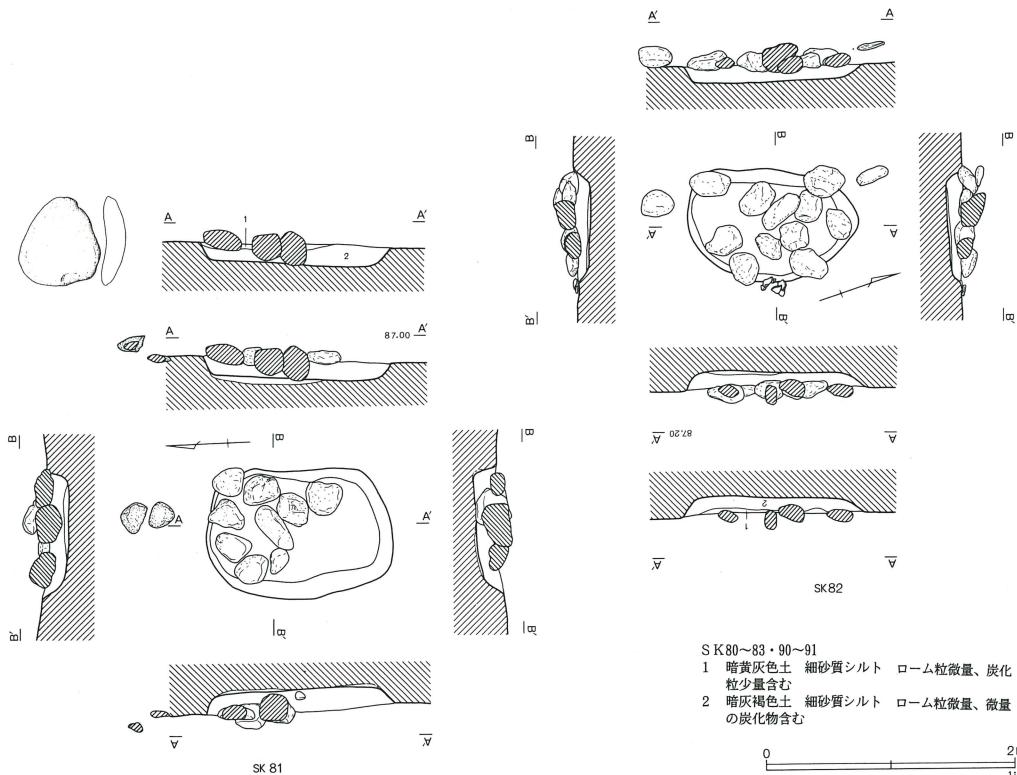
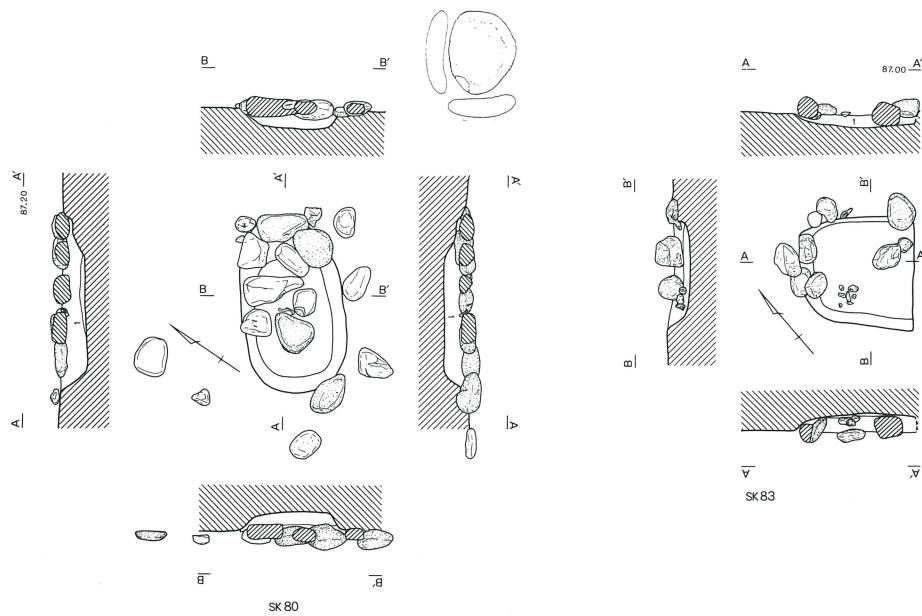
第120図5は第87号土壌出土土器である。平行する2状の隆起線で文様描出された胴部破片で、縄文LRが充填されている。土壌からは同一個体と思われる破片がまとまっていたが、接合できなかつたため、遺存状態の良好な破片を示した。

第120図2が第96号土壌出土土器である。大型破片であるが、接合できなかつた。深鉢形土器の上半部と思われる。無文で、粗い整形痕が観察される。

第6面（第108図）

調査区の東端にあたるF～J-15～19グリッドで検出された土壌を示した。土壌が検出された地形は、標高87mを境に南北両方向に緩い傾斜を示している。土壌には住居との重複はない。第67号土壌は2基の重複で、67A号には端部に不整形の掘り込みが検出された。検出された土壌の平面形態には、厳密な形の異同を抜きにしてみると、概ね長方形ないしは長楕円形を基調としたA2類に該当する土壌が多いようである。この区域には、後述する第7面の土壌群のように、配石を伴うものはわずかに69・73号土壌の2基のみである。

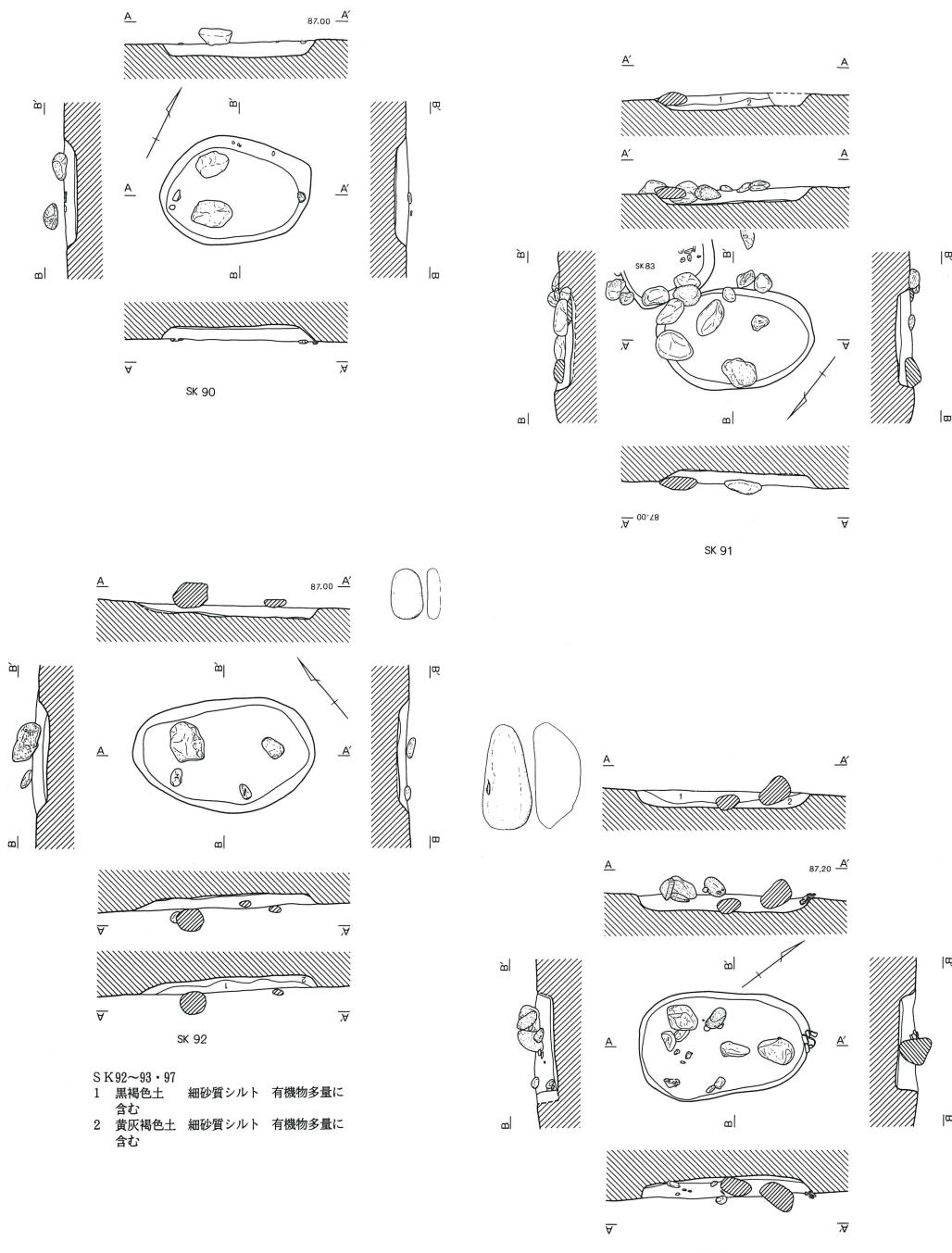
第70号～76号土壌では、壁際から壙底部にかけて堆積した第2層には、炭化物や焼土粒が微量ながら含まれていたことも他の土壌には見られない特徴である。第86・96号を除く他の土壌からは遺物が出土しなかつたために時期決定を下し難いが、住居と全く重複せず、住居の占地と競合してい



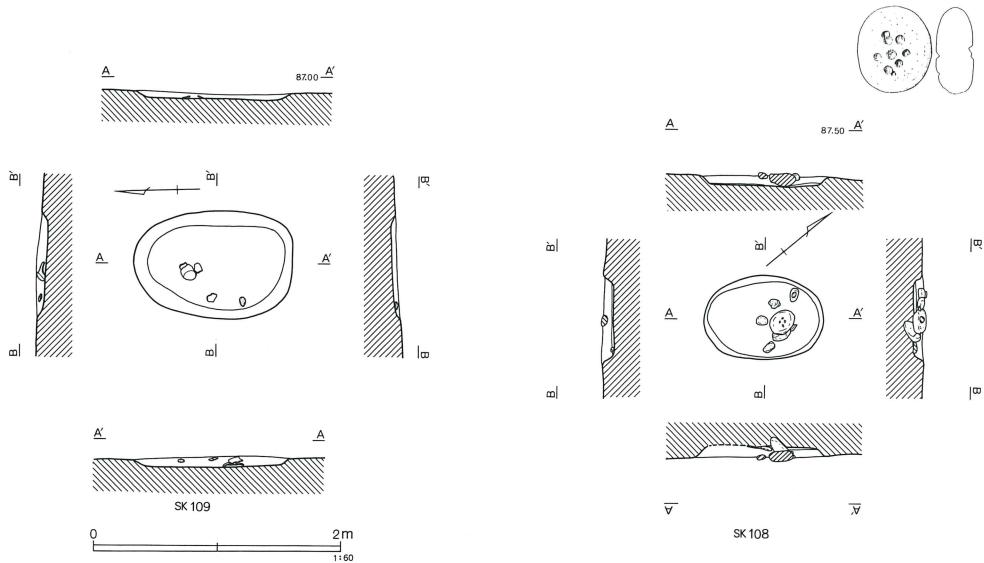
SK 80~83・90~91
 1 暗黄灰色土 細砂質シルト ローム粒微量、炭化
 粒少量含む
 2 暗灰褐色土 細砂質シルト ローム粒微量、微量
 の炭化物含む

0 2m
 1:60

第111図 土壌 (7)



第112図 土壌 (8)



第113図 土壙 (9)

ないことを考慮するならば、ほぼ住居と近い縄文後期初頭とするのが妥当であろう。

第7面 (第110図)

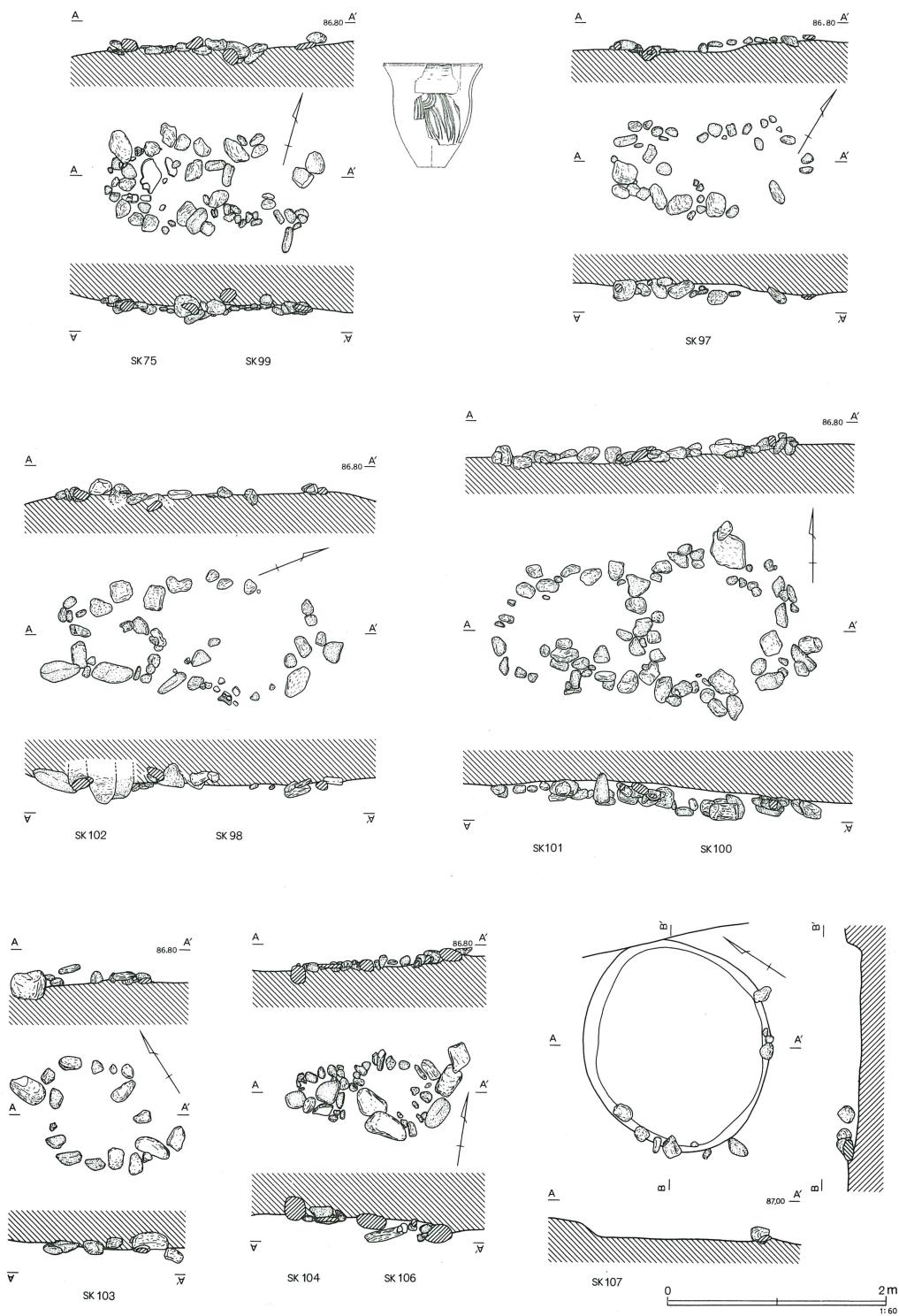
M~O-13~14グリッドで検出された土壙を第7面として示した。B類のいわゆる配石土壙で第80~83・90~93・109号の9基の土壙が集中して検出された。第80~83号、90~91号土壙は直線状に並んでいた。第83号土壙をのぞき、等高線と平行する主軸方位をもっている。土壙は、標高が87mのラインを境に荒川寄りに傾斜する緩斜面に集中して構築されていた。土壙は、平面形態が隅丸長方形から橢円形を呈している。長径が1.5m・短径が0.9mを前後しており、ほぼ同じような大きさであるといえる。確認面からの掘り込みは一様に15~25cm程度で、全体に極めて浅い。土壙には、河原石を伴うものが普通で、他の面で検出された土壙とは趣を異にしている。河原石は掘り込みの内面から検出されており、出土状態は土壙上面から不規則に検出されたもので、周囲に転石した状況も確認された。従って、検出状況からは規則性をもった配石がほどこされていたとは考え難い。むしろ土壙構築に伴って、盛土上に配置された河原石が落ち込んだ結果と考えるほうが自然であろう。樋ノ下遺跡でも特異な土壙であり、おそらく墓として利用された遺構であろう。土壙からは土器を含め遺物が出土することは殆どなく、用いられた石のなかに、わずかに磨石や石皿・凹石などが転用されていたに過ぎない。

第7面土壙出土遺物 (第128図8~第130図)

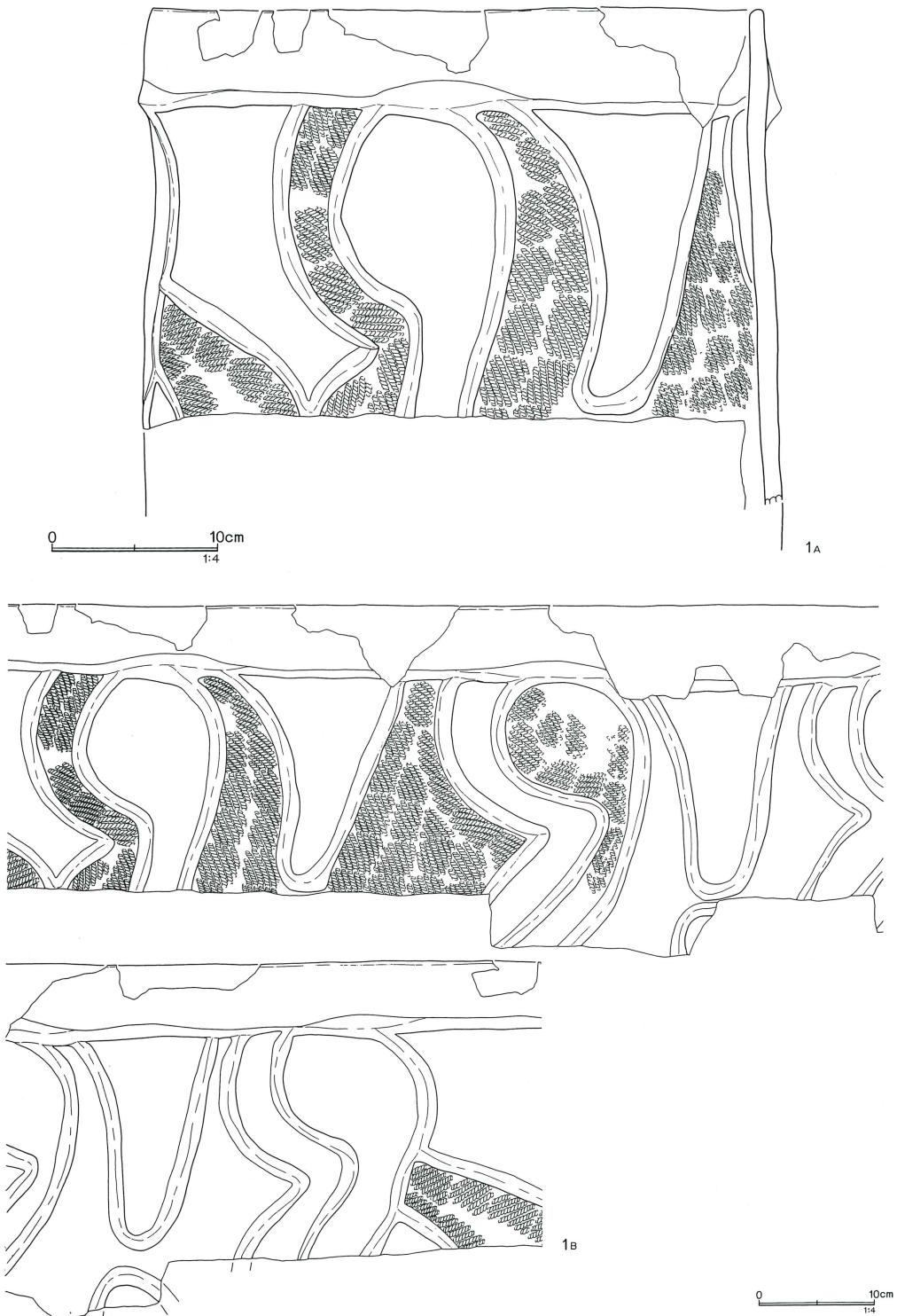
第128図8~第130図は、土壙の配石に転用されていた石器である。第128図8は磨石で、第92号土壙に、第129図1・2・第130図2は石皿で、それぞれ第80・82・93号土壙に用いられていた。第130図1は凹石で、磨耗痕は観察されない。第109号土壙から出土した。



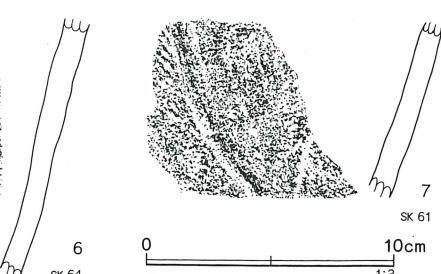
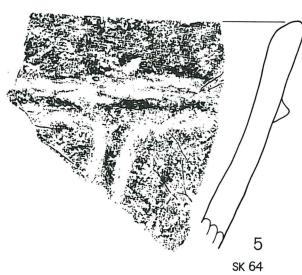
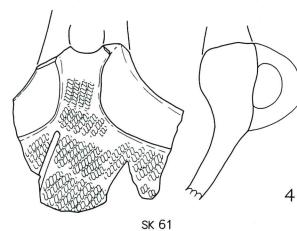
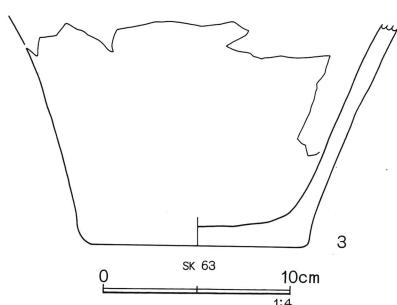
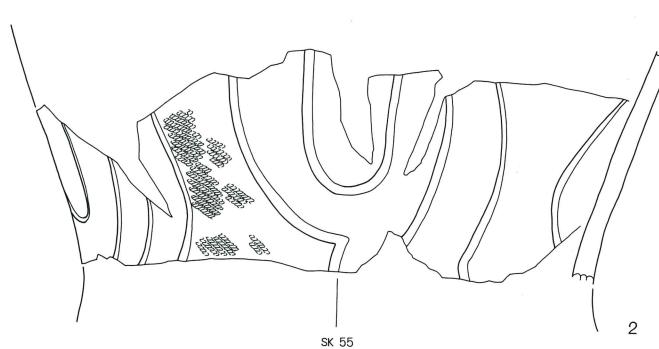
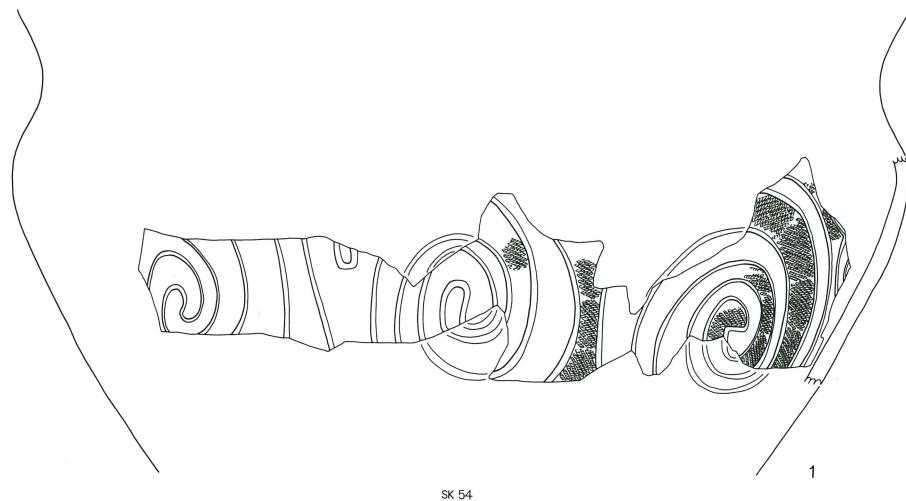
第114図 土壌位置図（第8面）



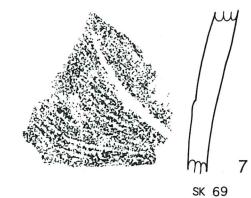
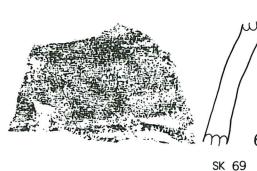
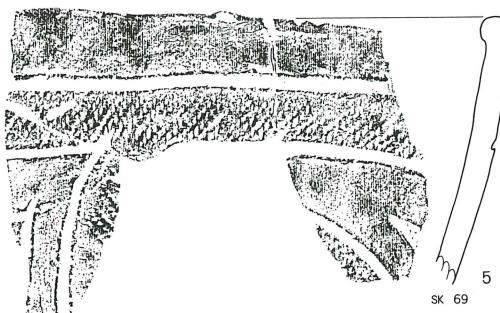
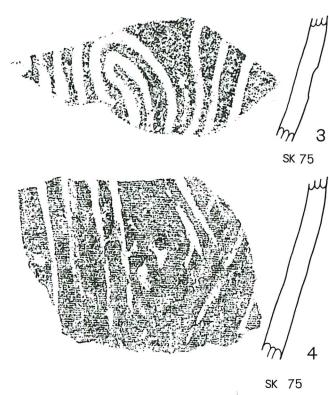
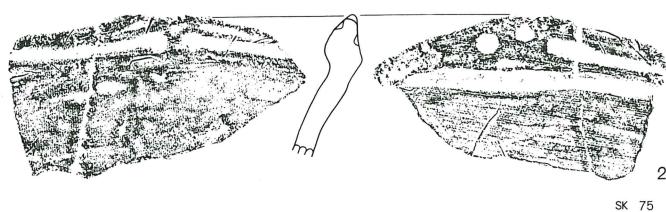
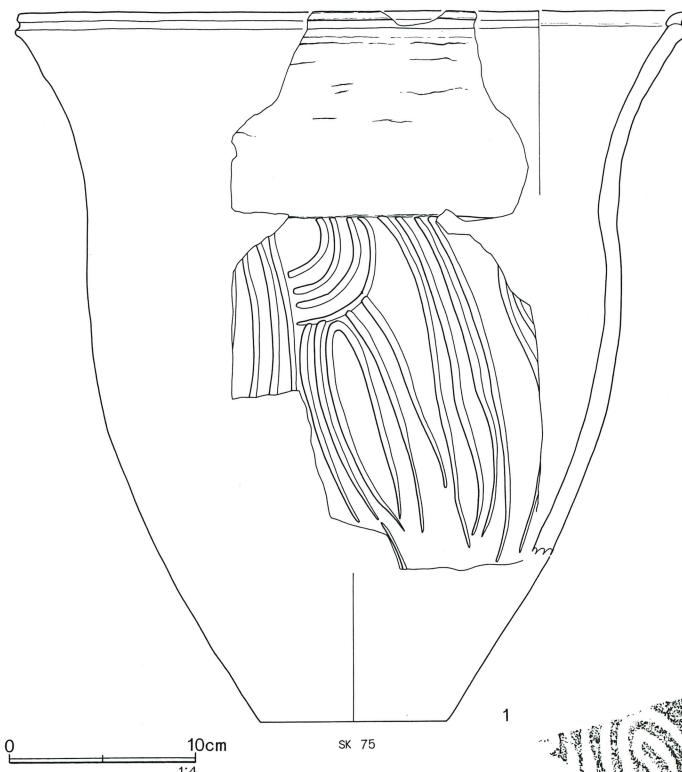
第115図 土壌 (10)



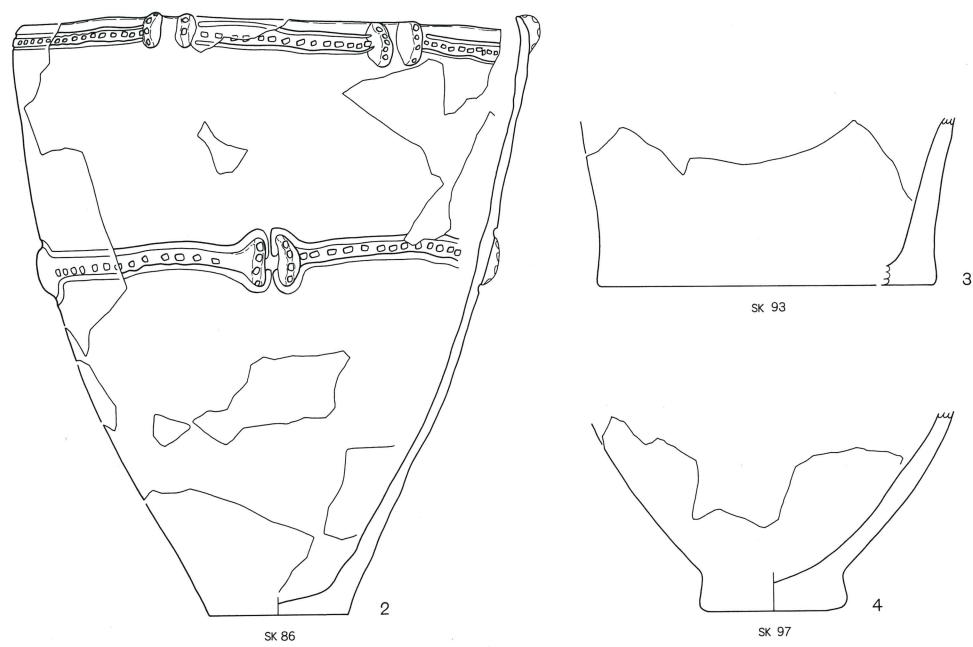
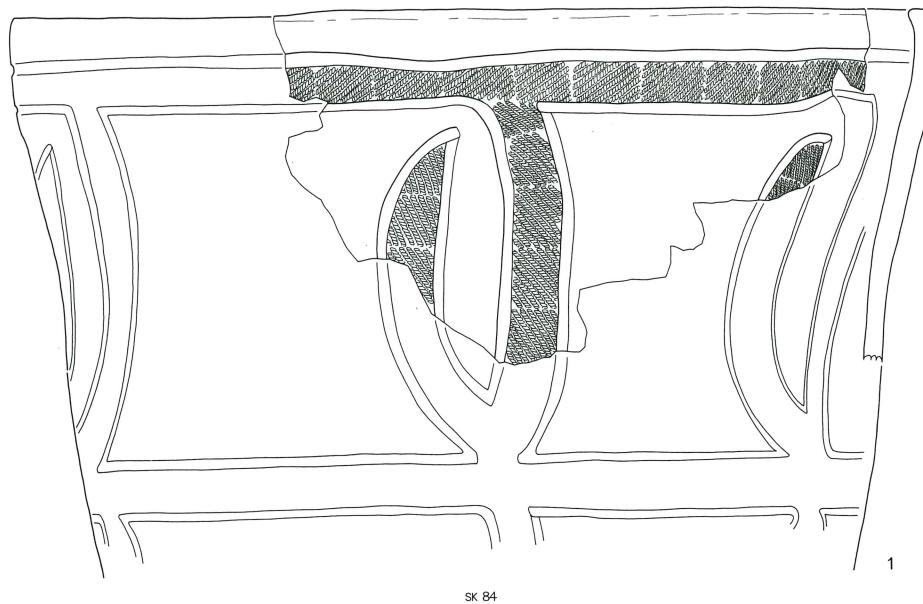
第116図 土壙出土土器 (25)



第117図 土壙出土土器 (26)

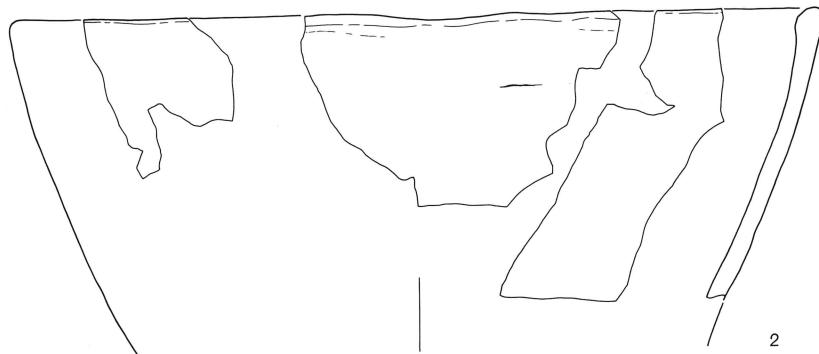
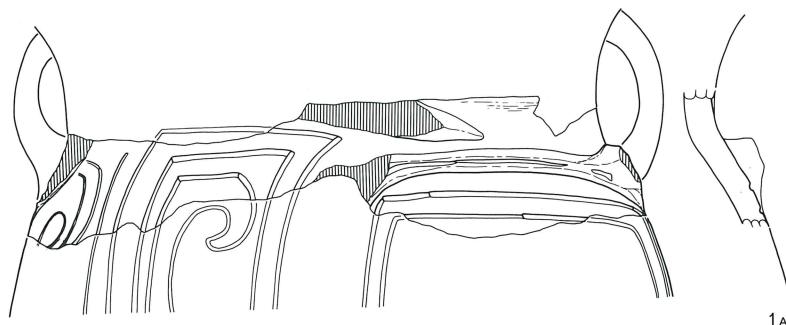
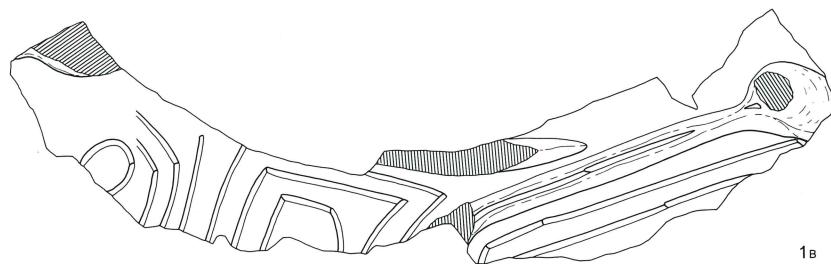


第118図 土壌出土土器 (27)

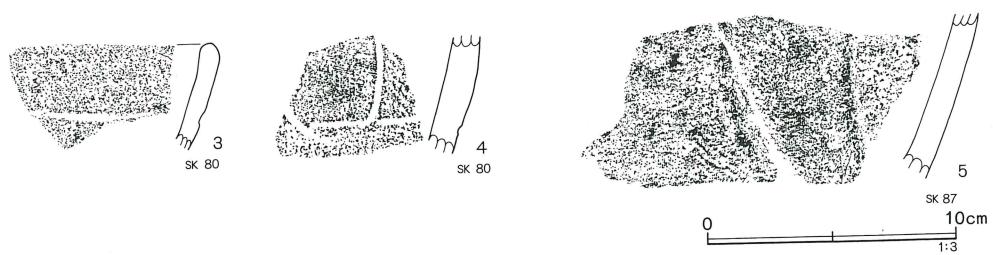


0 10cm
1:4

第119図 土壙出土土器 (28)

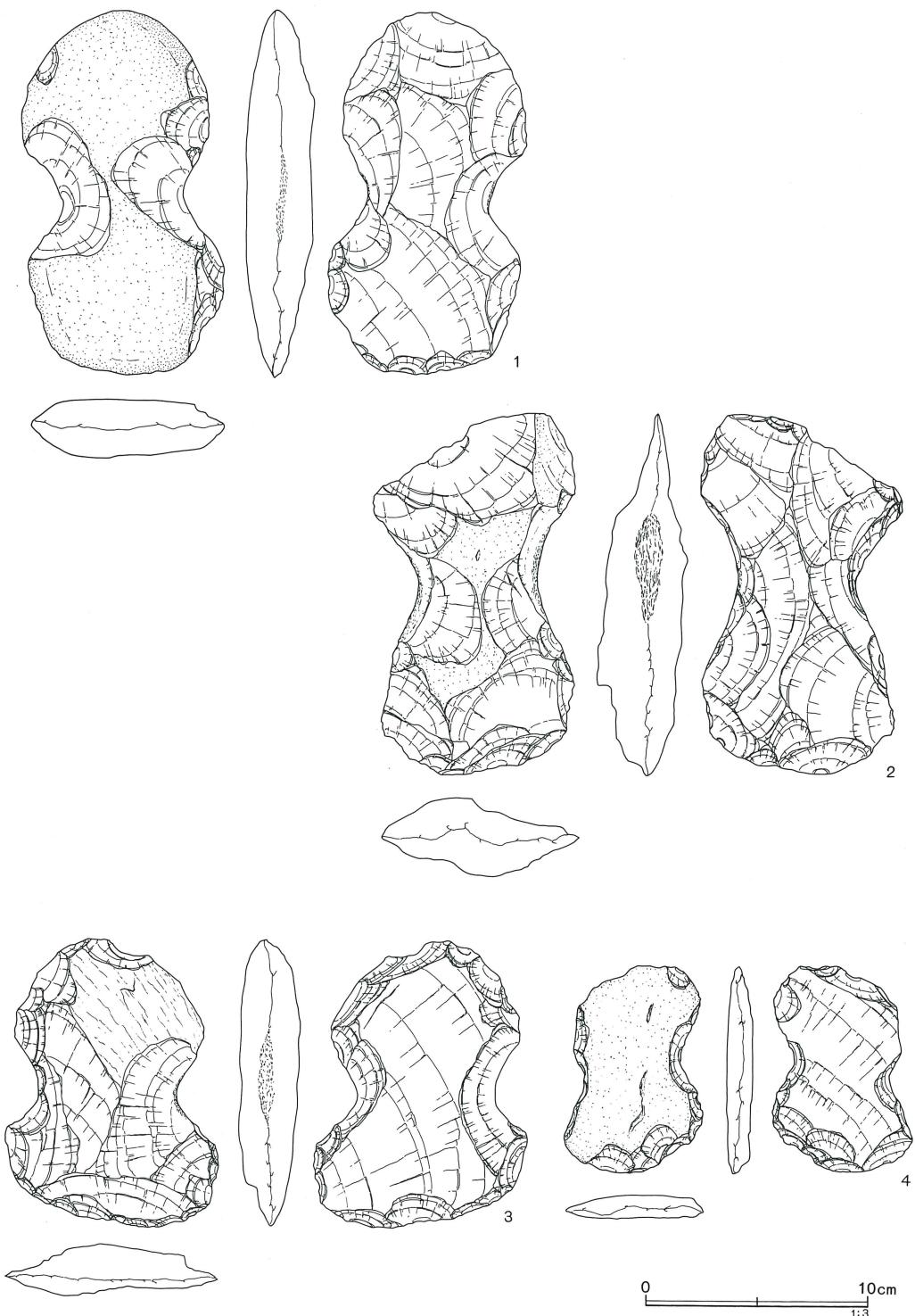


SK 96 0 10cm
1:4

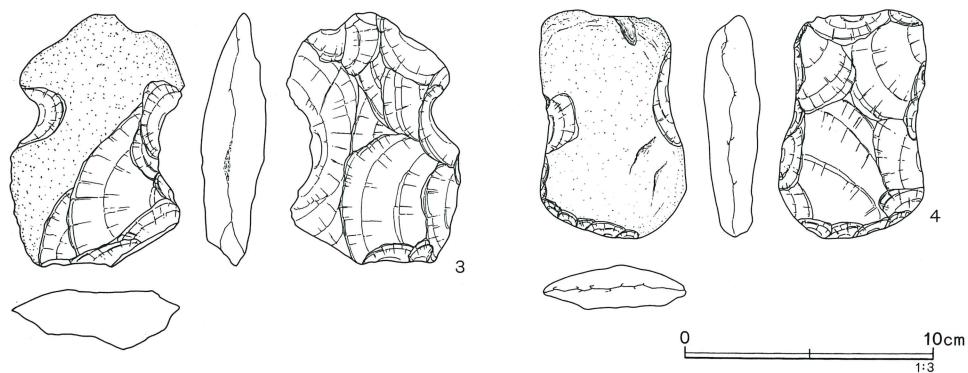
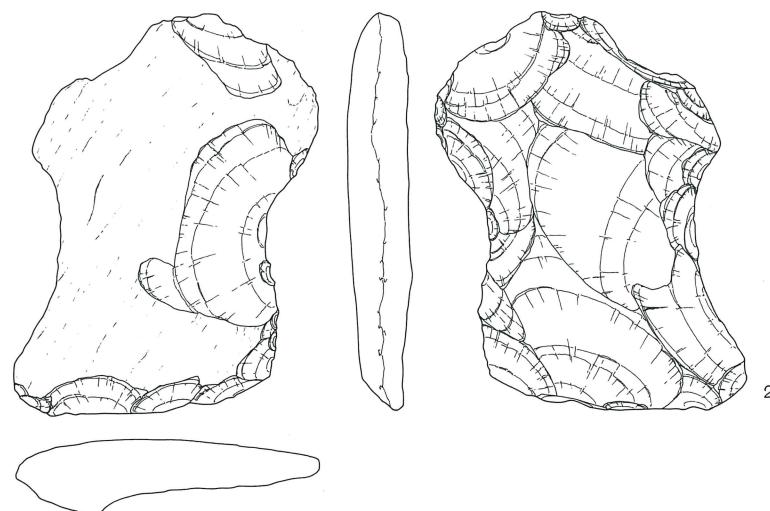
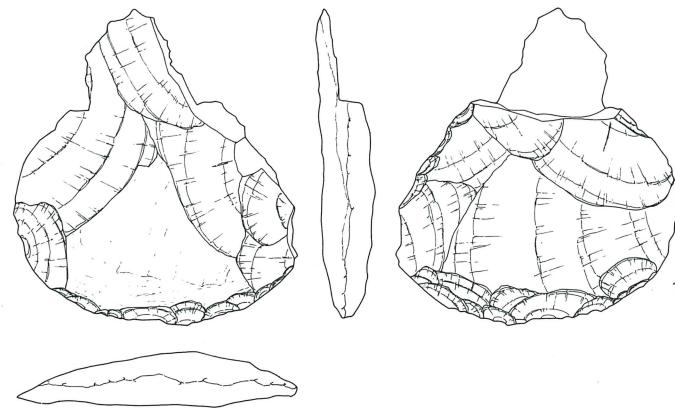


0 10cm
1:3

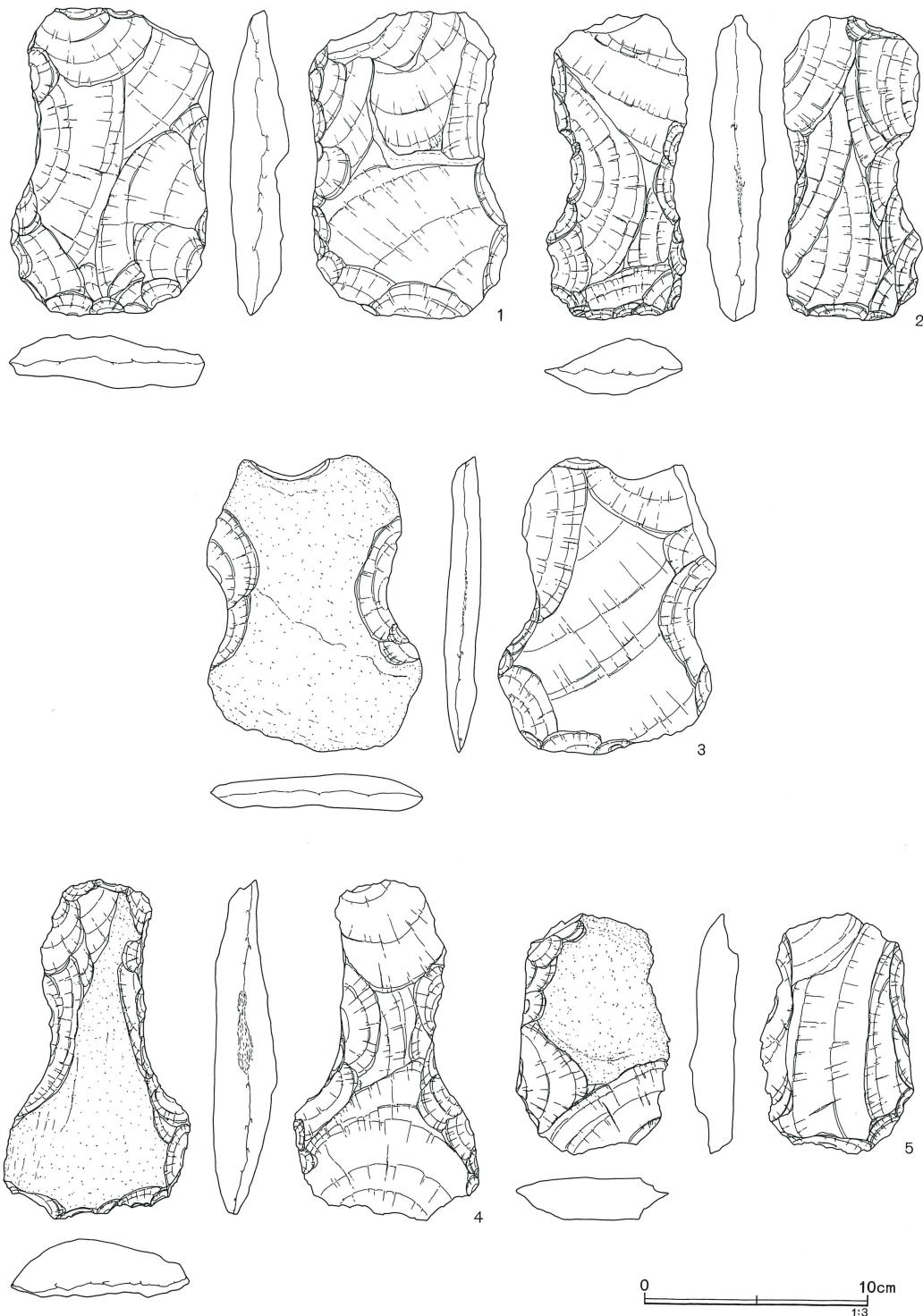
第120図 土壙出土土器 (29)



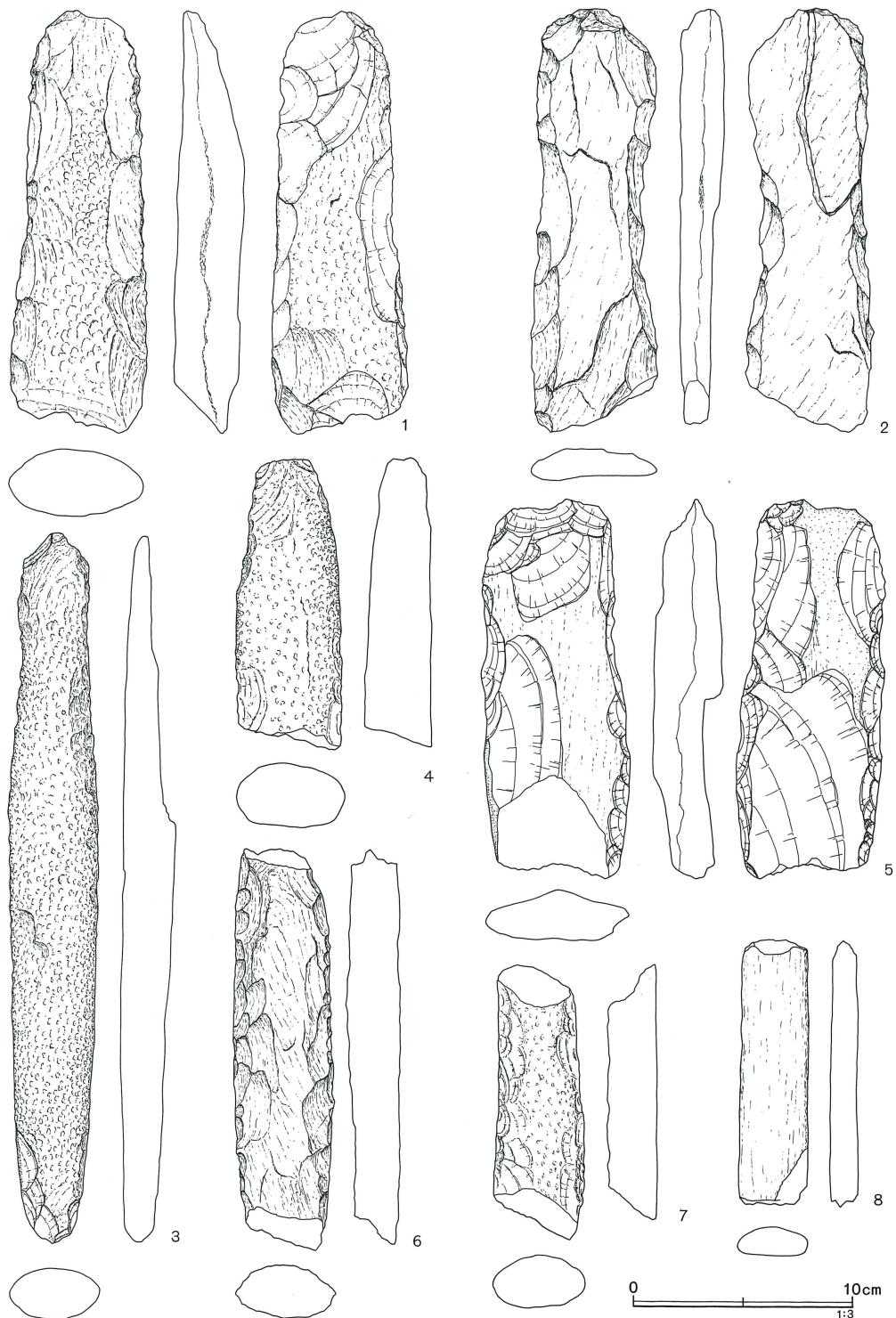
第121図 土壙出土石器 (1)



第122図 土壌出土石器 (2)



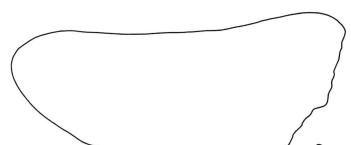
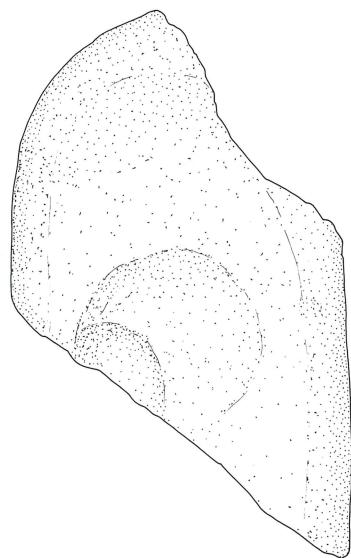
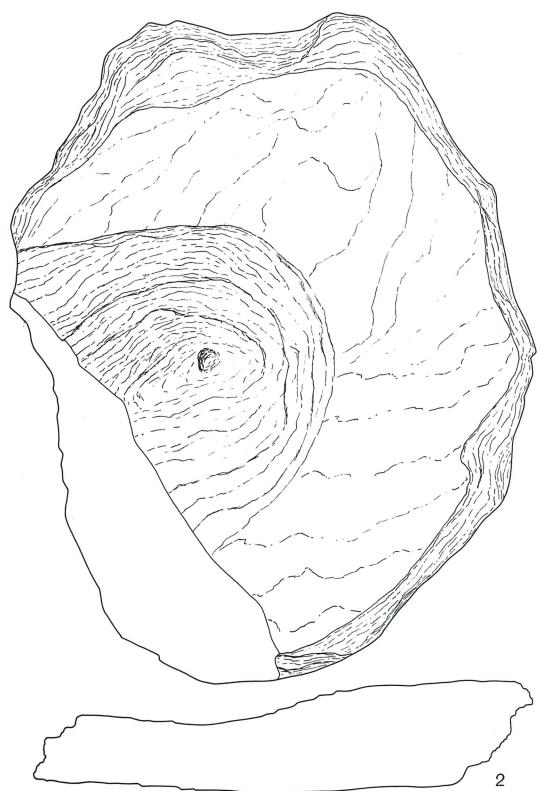
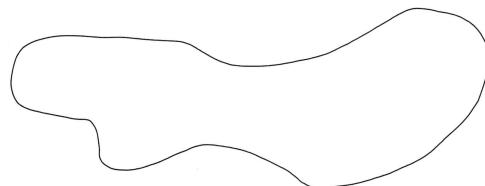
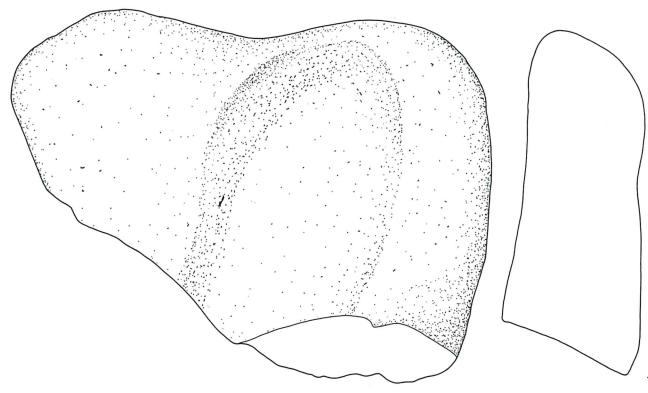
第123図 土壌出土石器 (3)



第124図 土壌出土石器 (4)

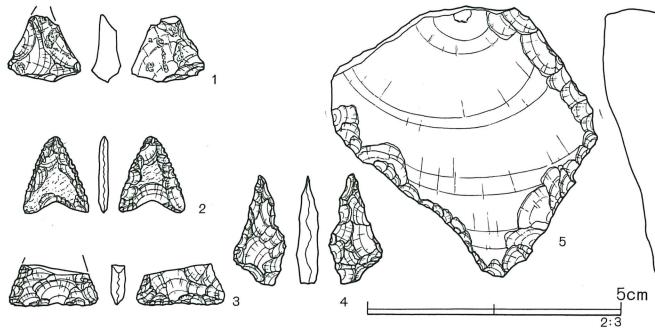


第125図 土壌出土石器 (5)



0 10cm
1:3

第126図 土壌出土石器 (6)



第127図 土壙出土石器（7）

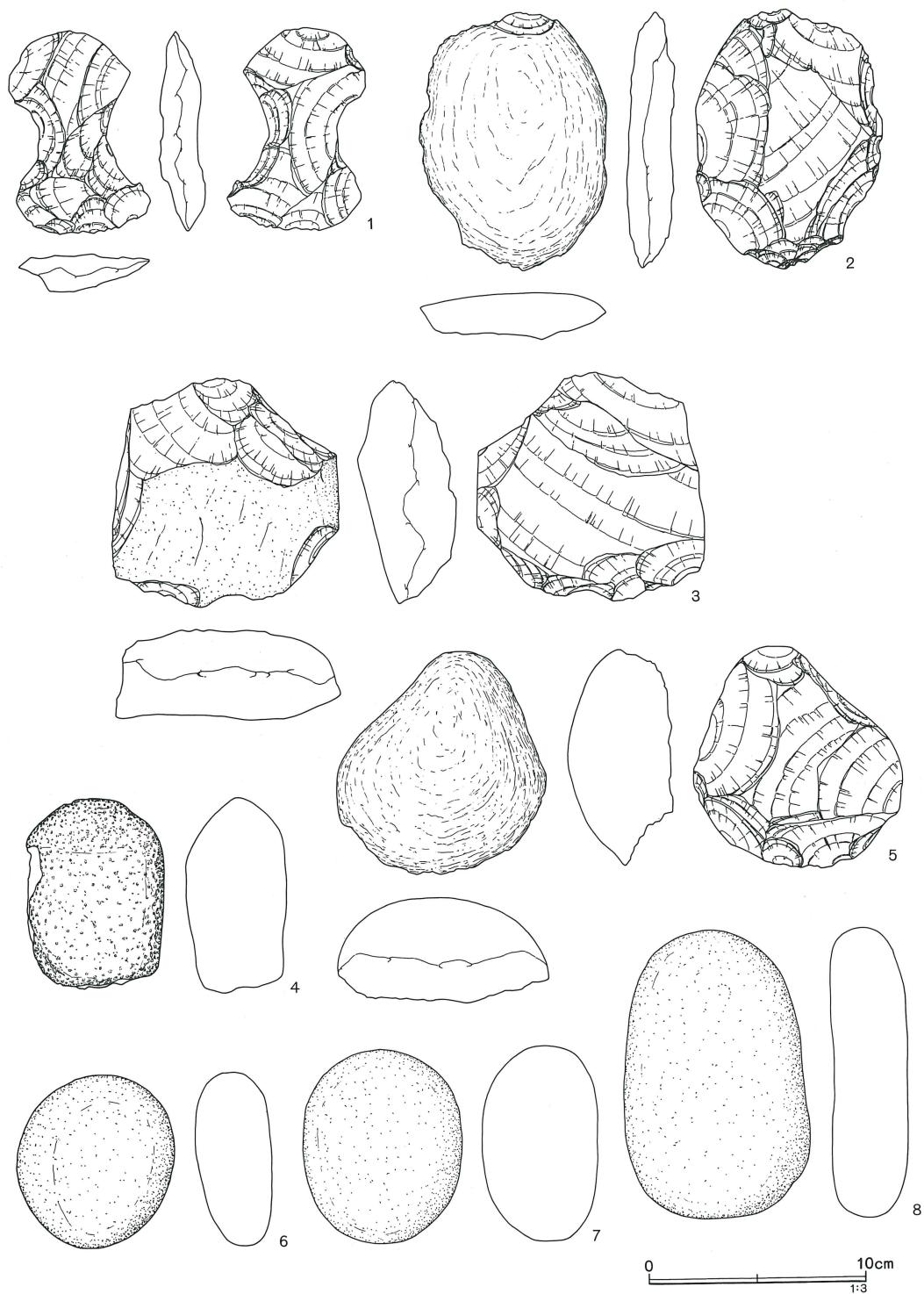
第8面（第114図）

調査区の東端部、G～H-19グリッドでは、地形が一段落ち込んで、段丘状を呈している部分がある。この部分では標高が平坦部で86.4mであり、第30・31号住居跡の位置する部分とは、60cm程度の比高差がある。古墳の調査段階では、この部分に黒色土が堆積しており、周溝が堆積土を削って構築されていたことから、既に埋没していたことが明らかである。この部分は大小様々な礫がおよそ西から東方向に傾斜していた。F-17、I-17、J-15グリッドを無作為に深掘りした結果、およそ標高86.4m前後で礫層が検出された。このことから、土壙群が検出された礫層が旧川床面に相当することが明らかである。

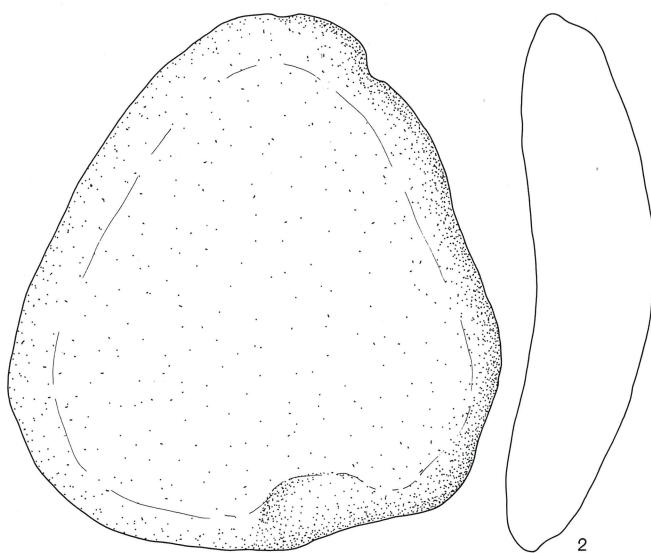
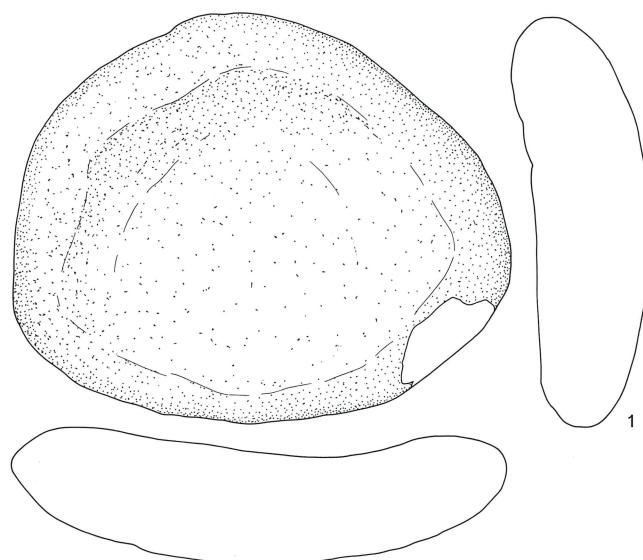
この部分からは、概ね大小2基を1単位とする配石遺構が検出された。おそらく、浸食によって現れた礫を環状に配石し、中央部分の石を取除いて遺構を構築したと推定される。検出された遺構を、形態から双環状配石土壙と仮称した。検出された土壙は第75・98～106号の総計9基である。このうち2基を1対とする土壙が4基検出された。第115図が検出された土壙の平面図である。2基1対の土壙は、第100・101号を最大とする。同土壙の計測値は100号が1.5m、101号が1.2mの円形で、2基の全長は約3mとなる。全長が1.8～2.4mで、環の径が0.9～1.2mを前後している。1基のみの土壙も径はほぼ同じである。

第8面土壙出土遺物（第118図1～4）

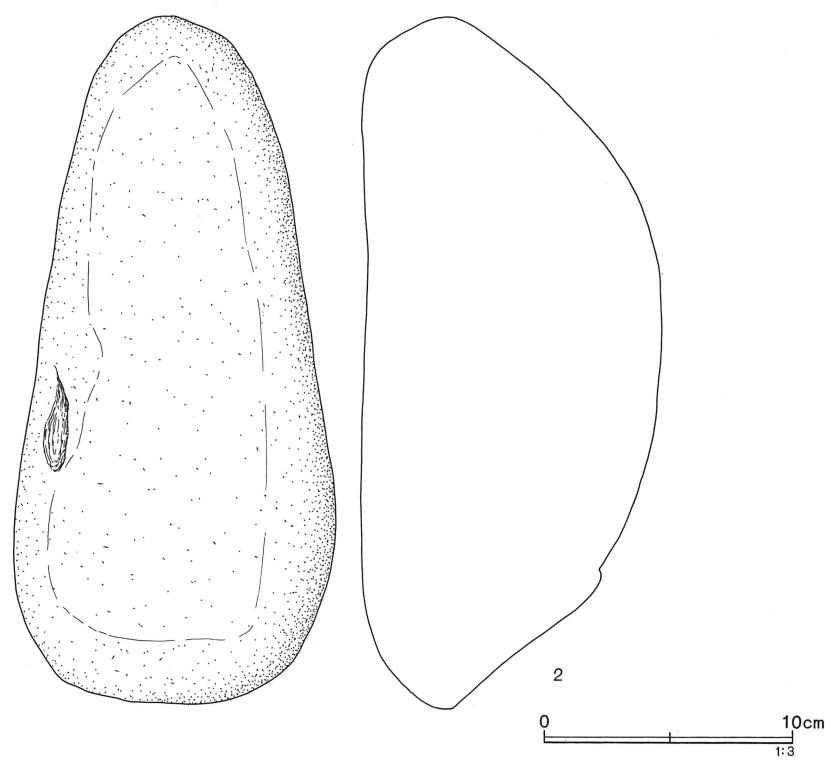
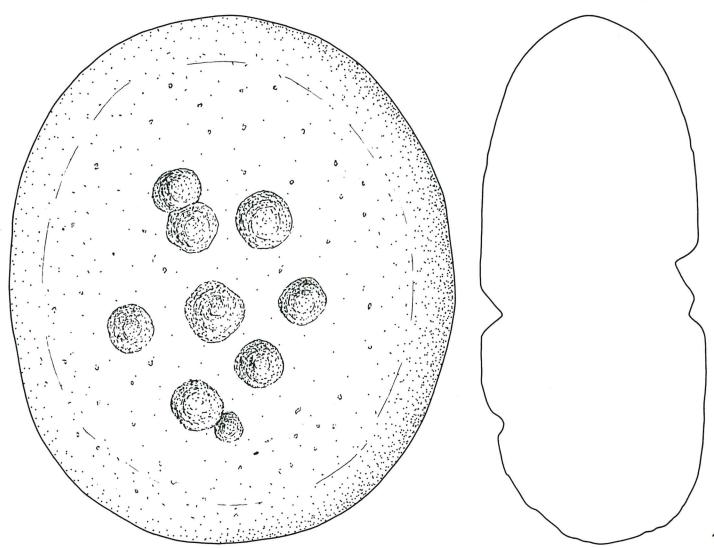
第75号土壙を除いて、土壙からは遺物が殆ど出土しなかった。第118図1～4は第75号土壙出土土器である。おそらく同一個体と考えられるが、接合関係はない。1条の沈線が巡る屈曲した口縁部と幅広い無文頸部を挟んだ密接沈線文の胴部からなる。地文はなく、沈線のみの文様描出である。同図2を考慮すると、3単位の小波状口縁が想定される。推定口径36cm、現存高29cmである。



第128図 土壌出土石器 (8)



第129図 土壌出土石器（9）



第130図 土壙出土石器 (10)

(4) グリッド出土の遺物

樋ノ下遺跡からは、縄文時代前期から後期後半にかけての遺物が出土している。前期から中期中葉の遺物は特に寄居面Ⅰに限られているようである。後期初頭の遺物に最もまとまりがあり、ほぼ調査区全体から出土している。

(1) 土器

第Ⅰ群（第131図1～12）

縄文時代前期の土器を一括した。本群はさらに2分される。

第1類（第131図1～2）

諸磯b式土器を本類とした。1は沈線で、2は浮線で文様が描かれる。いずれも縄文RLの地文上に1は平行沈線文を、2は浮線文をもつ。1は口縁屈曲の度合いが強く、沈線も細いことから諸磯b2新段階の土器であろう。

第2類（第131図3～12）

諸磯c式を本類とした。いずれも寄居面Ⅰの西端部で集中していた。同期の第5号住居跡も検出され、出土土器も同時期であった。1～2は口縁がやや内湾気味に開く深鉢形土器であろう。密接沈線で描かれた文様上に、長短の棒状貼付が交互に装飾されている。装飾の在り方は南西関東的と言えようか。4は口縁部が省略された事例、5以下は胴部破片である。胴部にも装飾が施される。

第Ⅱ群（第131図13～17）

中期の土器を本群とした。出土した土器は、調査区北西端のE-3グリッドから集中して出土したが、遺構は検出されなかった。文様の特徴や胎土から同一個体と思われる。縦状体Lを地文にもち、竹管内面により断面が蒲鉾状の沈線文が描かれている。断片的で文様構成が明瞭ではないが、勝坂終末の土器であろう。胴部で張り、口縁がすぼまる深鉢形土器である。

第Ⅲ群（第131図18～第136図34）

中期末葉から後期の土器群を本群とした。特徴から6分類される。

第1類（第131図18～第132図7）

隆起線で文様が描かれる土器群のうち、口縁部に幅広い無文部をもち、文様帶区画・文様が共に断面三角の隆起線で描かれる土器群を本種とした。文様の構成には、第131図20のように、加曾利E4的な逆U字状のモチーフを想起させる土器群と、第132図1～4・6のように、2条平行のJ字状や渦巻き状に構成されると考えられる2様があるが、小破片のため厳密な分類は適わなかつた。後者には、第132図4のように屈曲したモチーフ構成も含まれ、称名寺式的様相が窺える。本種には第131図21のように、区画と文様の接点が鍔状に突出することも特徴の一つといえよう。

第2類（第132図8～10）

隆起線と沈線文を併用する土器群を本類とした。図示した3点はいずれも波状口縁の深鉢形土器

である。8～9は、口縁に2条の隆起線がめぐり、8は隆起線内面に並列して円形刺突が加えられる。9は剥落があり不明。10は口縁無文部をもたず、口縁を巡る平行沈線間に、単列横長の刺突が加えられる。波頂部直下に突起を持つようである。本類は、第34号住居跡出土土器（第68図1）と共通する構成をもち、胴部文様は沈線で描かれている。いわゆる関沢類型と呼称される土器群であろう。充填される縄文は全てLRである。

第3類（第132図11～第133図22）

沈線間に縄文充填される称名寺式土器を本類とした。器形復元された資料を2点を含め、樋ノ下遺跡では比較的まとまった土器群である。

第132図16は胴中位で張る大型の深鉢形土器である。胴部に2段の文様をもち、胴上半に4単位のJ字文を配する。胴下半は文様が定かでないが、J字文端部から延びて逆方向に開くJ字文が構成されるようである。J字文間にはスペード文が配されている。モチーフ間には縄文LRが充填されている。推定口径38.2cm・現存高23cmである。

第132図18は8字状の貼付文が付された波頂部破片である。貼付上はナゾリによってややくほんであり、単列の円形刺突が加えられる。同様に刺突をもつ資料には、第133図3がある。第132図15は口唇上に小突起が付される。

第133図1は胴部破片から器形復元した。胴部2段の文様帯からなり、胴下部には平行沈線以下に曲線的な文様が配されている。一体化した文様構成とも考えられる。胴上半は残存部位が少なく文様不明。モチーフ間の縄文はLRである。推定最大径15.5cm・現存高13cmである。

第133図2は「ノ」の字状貼付文をもつ波頂部破片で、貼付文は円形刺突を沈線が連結している。貼付文は縦位の隆帯が垂下し、器面を分割している。同図5は特異な土器で、内湾した口縁部には、平行沈線が巡り、沈線に沿った刺突列が、縦位の沈線で連結されている。刺突間の連結や、沈線の描出手法から、本類に含めた。1例のみの出土である。

第133図6～22には胴部破片を一括した。曲線的な文様構成を主体とし、第133図16のように大単位の文様構成のものと、平行沈線の幅が狭く、密接した文様構成の土器がある。モチーフ間に充填される縄文はすべてLRである。

第4類（第133図23～第134図13）

モチーフ間に列点が加えられた土器群である。充填される列点は、モチーフ間に単列に加えられ円形を主体に縦長のものも存在する。第134図1～5が口縁部破片で、第134図1は波頂部破片で、口唇上にも沈線と列点が伴う。第134図3～4は口唇内面に稜をもつ。文様は、第3類と共通し、縄文施文部位に列点が施されたものと、文様が簡素化し列点がやや縦長のもの（第134図12）がある。第134図13は曲線的で密接した沈線文内面に列点が施された例で、他とは文様の趣を異にする。本類は第5類も含め、堀之内1式段階に下降する資料が存在する。

第5類（第134図14～21）

沈線のみで文様描出される土器群で、後述する第7類への傾斜を強めた一群である。文様構成は明確ではないが、第2類に由来し、第4類と同様に文様描出の簡素化が進んだ一群といえよう。器面は研磨され、細い沈線で文様が描かれる特徴が観察される。いずれも胴部破片である。

第6類（第134図22～第136図34）

堀之内1式土器である。樋ノ下遺跡では、第2類とともに出土量が多い。特徴からさらに分かれ
る。

a種（第135図5～6・10～12）

頸部に無文帯をもたず、胴部に沈線文が施文された土器群である。文様は平行沈線や、単沈線で
描かれ、第135図5は第6類と文様の共通性が窺える。口唇は外削ぎ状を呈し、刺突を挟んで沈線
がめぐるものと思われる。同図12には刺突・沈線とも加えられない。

b種（第135図21～24・第136図3）

縄文地上に文様が描かれる土器群である。堀之内1式土器のなかでは沈線文の土器に比較して、
量的には極端に少ない。器面は縦区画され、区画間に曲線的な沈線文が配されている。第135図21
～22は縄文が磨消されている。

c種（第134図22～24・第135図1～4・7～9・13～19・第136図1～2・5～29・31）

口縁と胴部に文様帯をもち、頸部には幅広い無文部をもつ土器群である。頸部から強く外反し、
幅狭い口縁部は直立気味となっている。胴上部が強く張る器形も特徴的である。第134図22～第135
図には口縁部を一括した。平縁と弱い波状口縁とがある。第134図22は口唇上に立体的な装飾が施
されている。口縁部は刺突や弧状沈線を挟んで沈線がめぐり、第134図24のように、隆帯が垂下す
るものもある。第136図以下には頸部以下の破片を一括した。密接沈線文をもつ土器群が主体で、
堀之内I式新段階の特徴を備えている。同図5は口縁部からV字状の隆帯が垂下し、胴部文様の
区画を構成している。隆帯上には刺突が加えられている。

d種（第136図7・30・32～34）

格子目状の沈線文をもつ土器群である。文様は単沈線で描かれる。7を除いて地文をもたない。

第IV群（第136図35～第137図1～6）

堀之内2式土器を本群とした。器形は底部から外反気味に開く深鉢形土器が想起される。第136
図35～第137図1～4は口縁部破片である。1～2条の刺突が加えられた隆帯下に、平行沈線によ
る三角あるいは菱形の文様構成をもつものであろう。口唇内面には1条の沈線がめぐっている。外
面をめぐる2条の隆帯は、刺突をもつ縦位の隆帯で連結されている。平行沈線間には縄文が充填さ
れている。

第V群（第137図7～13・第138図2～8）

加曾利B式に比定される土器群を本群とした。後続する第VI群に比較し出土量は少ない。器形
・文様から4分される。

第1類（第137図7～8）

口唇に眼鏡状の突起をもち、平行沈線間にの字状の沈線が描かれる加曾利B2式土器である。図
示した2例は同一個体と考えられる。

第2類（第137図9～13）

平行沈線間に縄文が充填される土器群である。口唇端は鋭角を呈するものや、内面に沈線が加えられるものがある。

第3類（第138図2～5）

注口土器を一括した。全て加曾利B式で、文様はa種と共通し、縄文が磨消される。3～4は同一個体である。屈曲部以下は無文であろう。2は注口部に沿って沈線がめぐる。底部には網代圧痕がみられる。

第4類（第138図6～8）

加曾利B式浅鉢形土器を一括した。文様は平行沈線を基調とし、沈線間には刻みが加えられている。文様は器内面に限定され、外面は丁寧みがきが施されている。

第VI群土器（第137図15～30・第138図9～17）

曾谷式に比定される土器群を本群とした。調査区北東端部から多く出土しているが、この範囲には第4号住居跡・第89号土壙など、同期の遺構が検出されている。第1～2類は黒褐色から暗褐色の色調で、器壁も薄く胎土も精選された土器が多い。器形・文様から2分される。

第1類（第137図15・25～26・29・第138図9～12・14～17）

斜行沈線を組み合わせて綾杉状あるいは雷状のモチーフを施文した土器群を一括した。いずれも深鉢形土器と考えられるが、全容は定かでない。器面は丁寧に磨かれた後に、ヘラ状工具によって单沈線を密接して施文している。第135図15は、大波状口縁の波頂部で、鋭いヘラ状工具による沈線文が施文されている。同図25～26は胴部が張る深鉢形土器で、先端の鋭いヘラ状工具で雷状の沈線文が施文されるものと思われる。第138図9は胴上半が張る深鉢形土器で斜行沈線が施文されている。同図10以下も胴部破片で、施文方向を異にした綾杉状沈線文をもつ。或いは第2類に該当する破片も含まれる可能性も大きいが、いずれも小破片のため器形・文様の全容が把握不可能であった。

第2類（第137図30、第138図1）

鉢形土器を本類とした。器形が明瞭に把握される資料は図示した2点だけである。直立した口縁で、平行沈線で区画された口唇部には縄文LRが施文される。2点は同一個体であろう。

第3類（第137図16～24・27～28）

紐線文系土器を一括して本種とした。口縁が直立ないしは内湾気味に開く深鉢形土器である。口唇直下に1～2状の隆帯がめぐり、隆帶上には押圧が加えられる。隆帶以下には文様が施文されるものと、条線施文のもの、縄文地文のみの土器がある。第137図20・24・27～28は幅広い紐線間に斜行沈線が施される。

第VII群（第138図20～第139図9）

無文粗製土器および縄文のみの土器群を一括して本群とした。

第1類（第138図20～第139図1～14）

無文の土器群を一括した。堀之内2式からの土器が含まれる。第139図3は浅鉢形土器で、小波

状口縁で、内面に2条の隆起線をもつ。同図1が凹線状の整形痕が顕著である。

第2類（第139図15～19）

縄文施文の土器群を一括した。いずれも胴部破片である。15がLR、18～19がRLである。16～17はRの原体を用いている。

（2）土製品・石製品（第140図）

第140図にグリッド出土の土製品・石製品を一括した。

土製蓋（第140図1～2）

1は周縁部に整形痕があり、おそらく再加工されたものと思われる。中央部に一对の突起をもち、両側には盲穴が穿たれている。突起は頂部が欠損しているが、連結されていたとは考え難い。突起を中心沈線文が施文されている。同図2は貼付の中央部に押圧を加えて一对の突起を作出したものである。一部欠損しているが無文である。

土偶（第140図3）

頭部破片で、粘土紐により眼と鼻の輪郭を、刺突により口を表現している。いわゆるハート形で後期前半の典型的な土偶である。

土製円盤（第140図4）

1点のみ出土した。土器片を円形に加工したものであり、わずかに縄文がこされている。

耳飾り（第140図5）

包含層からは本例のみ出土した。小形で滑車状を呈し、両側にくぼみをもつ。無文である。

石冠（第140図6）

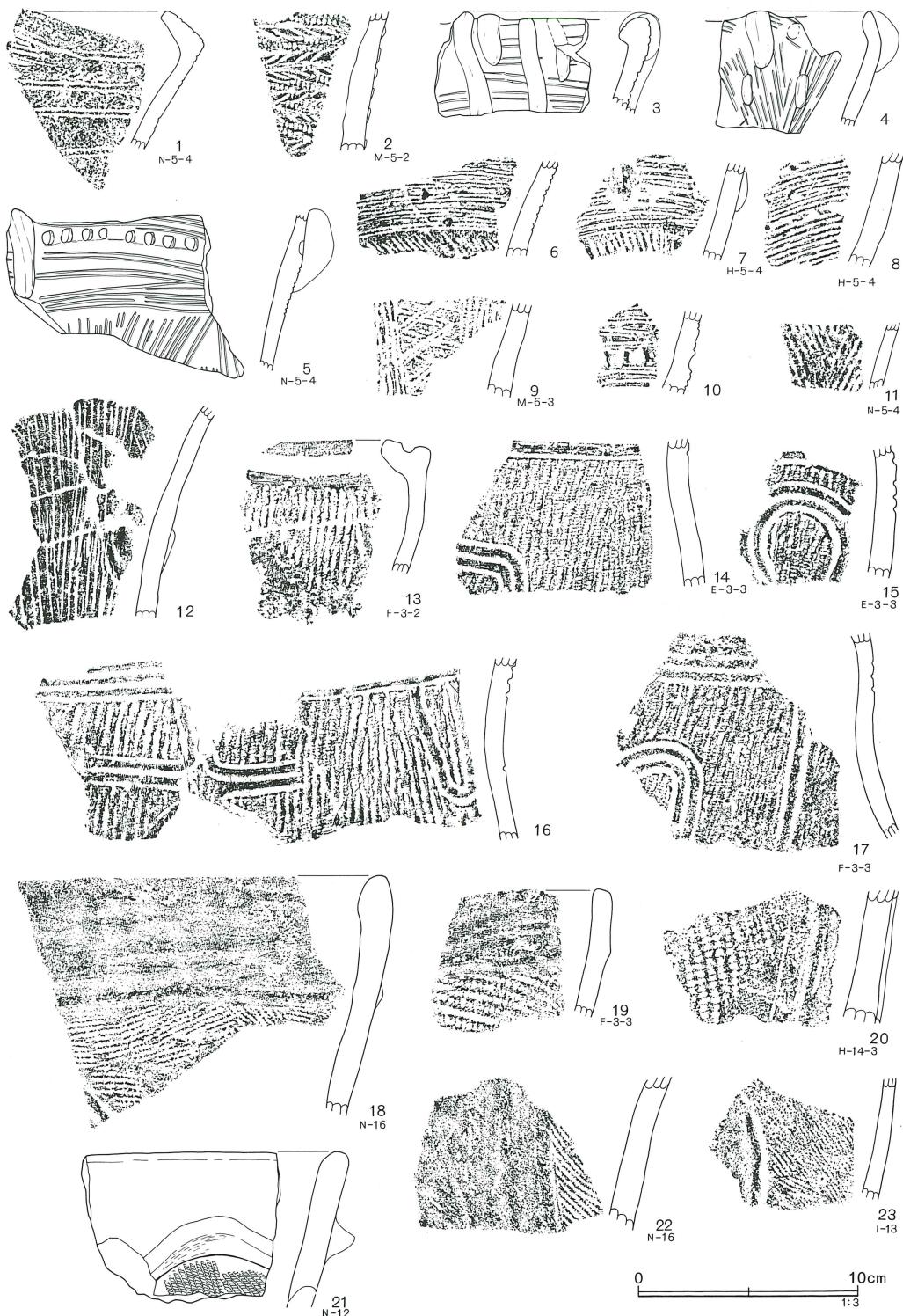
全長3.6cm・幅3.2cmと小形である。スタンプ状の形状をもち特に文様等はない。或いは自然石か。

（3）石器（第141図～第150図）

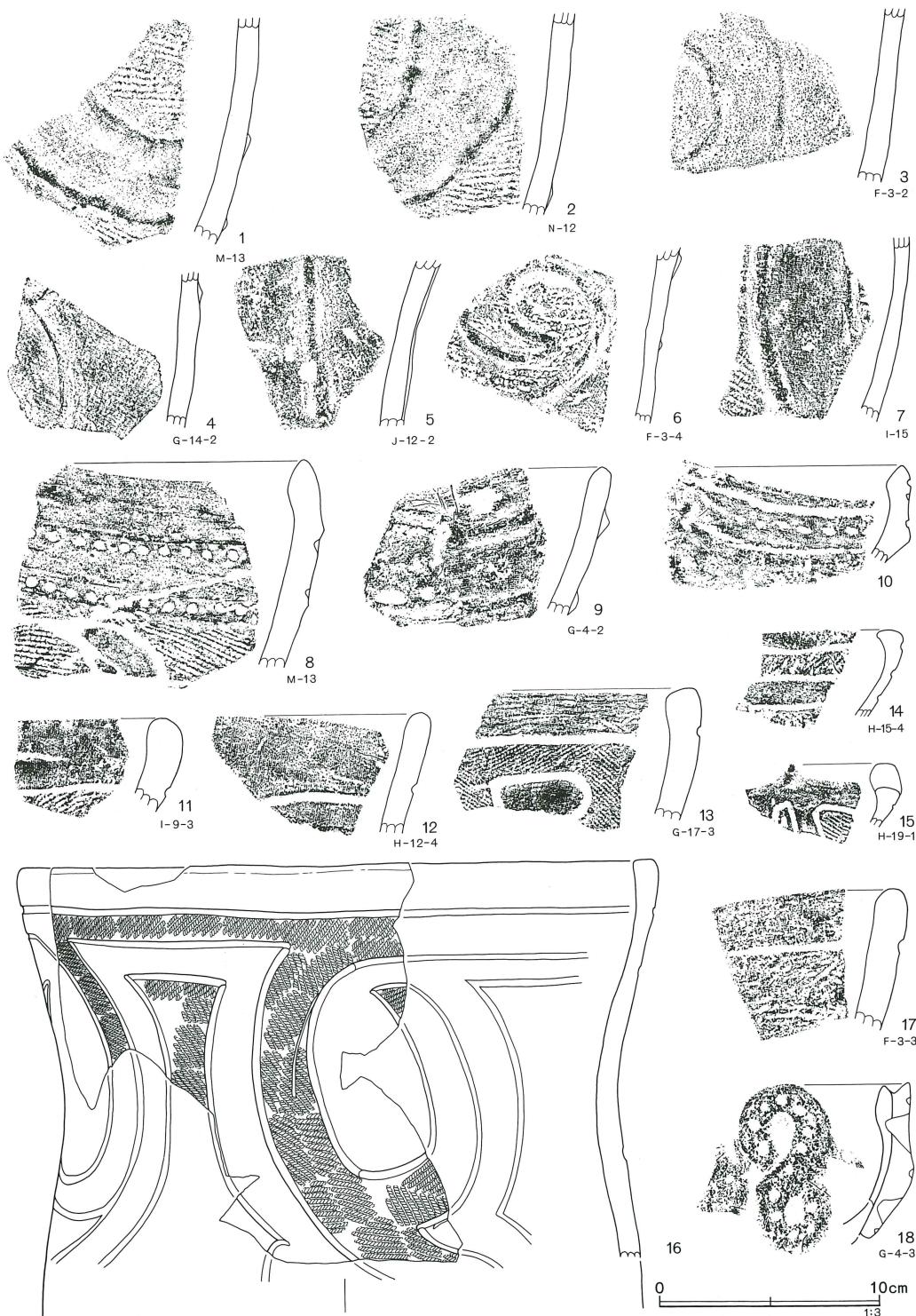
包含層からは、多量の石器が出土した。そのうち最も多くを占めるのは打製石斧であり、包含層出土石器の約7割りを占めている。また、円盤の側縁に粗い剥離を施したいわゆる礫器も特徴的な石器と考えられよう。

打製石斧（第141図～第144図4）

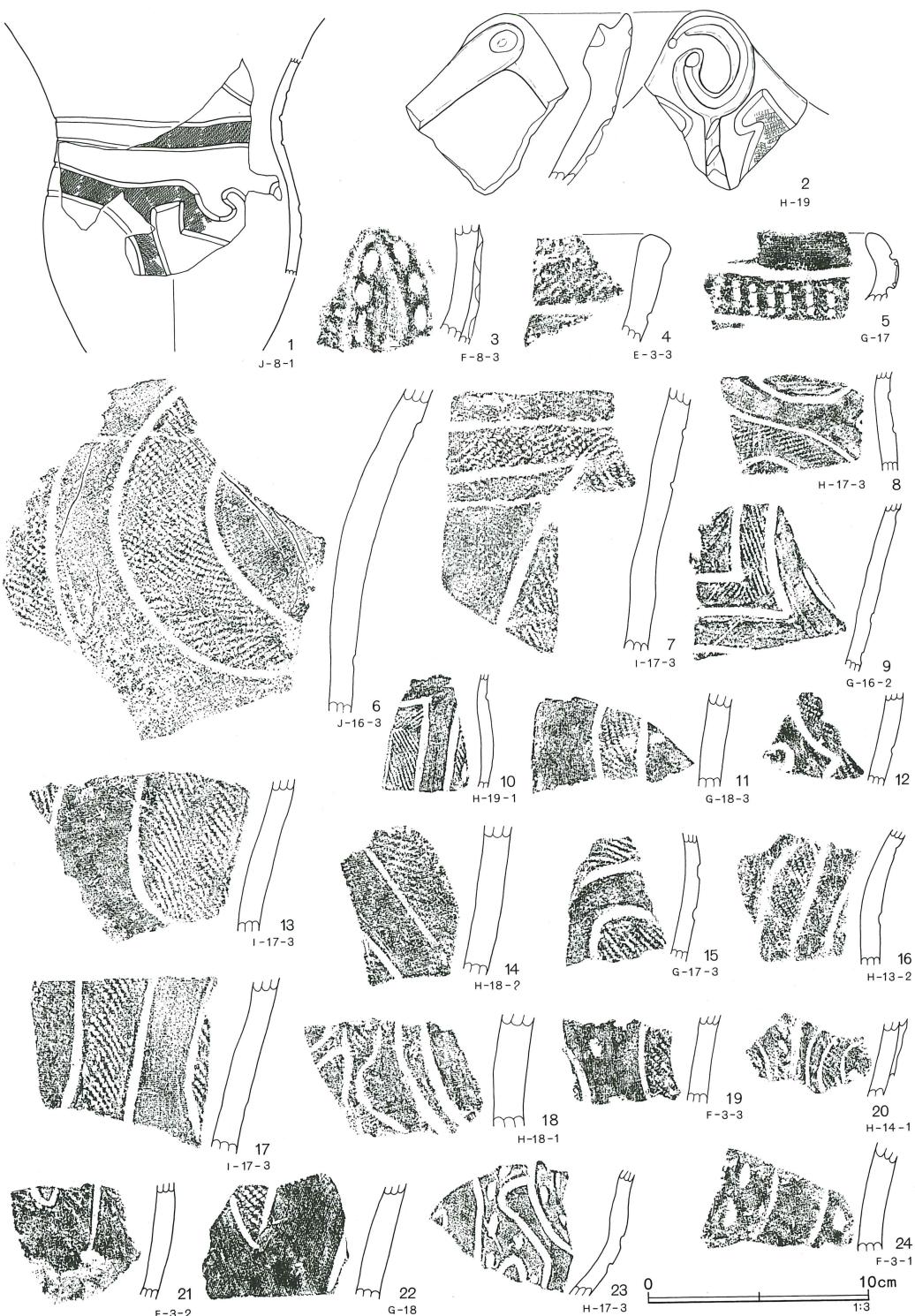
出土した石斧は、いわゆる撥形を呈する第144図1を除く全てが分銅形を呈しており、縄文時代後期の特徴的な形態を呈している。石斧には、全長が20cmを越える大型のものもあるが、平均して15cm程度のものが最も多い。また、10cm程度の小形のものも出土しており、大きさ・製作の精粗に偏りはみられない。母岩から得られた剥片の両側縁から粗い剥離を施しているため、片面に自然面を残すものが多いことも特徴である。抉入部と刃部にはやや細かな剥離を加えて形状を整えているが、全体には粗雑な剥離といえる。抉入部には、敲打による刃潰し加工が加えられたものが多く、形状の大小を問わない。刃部には、使用による磨耗痕を顕著に残しているものは観察されない。



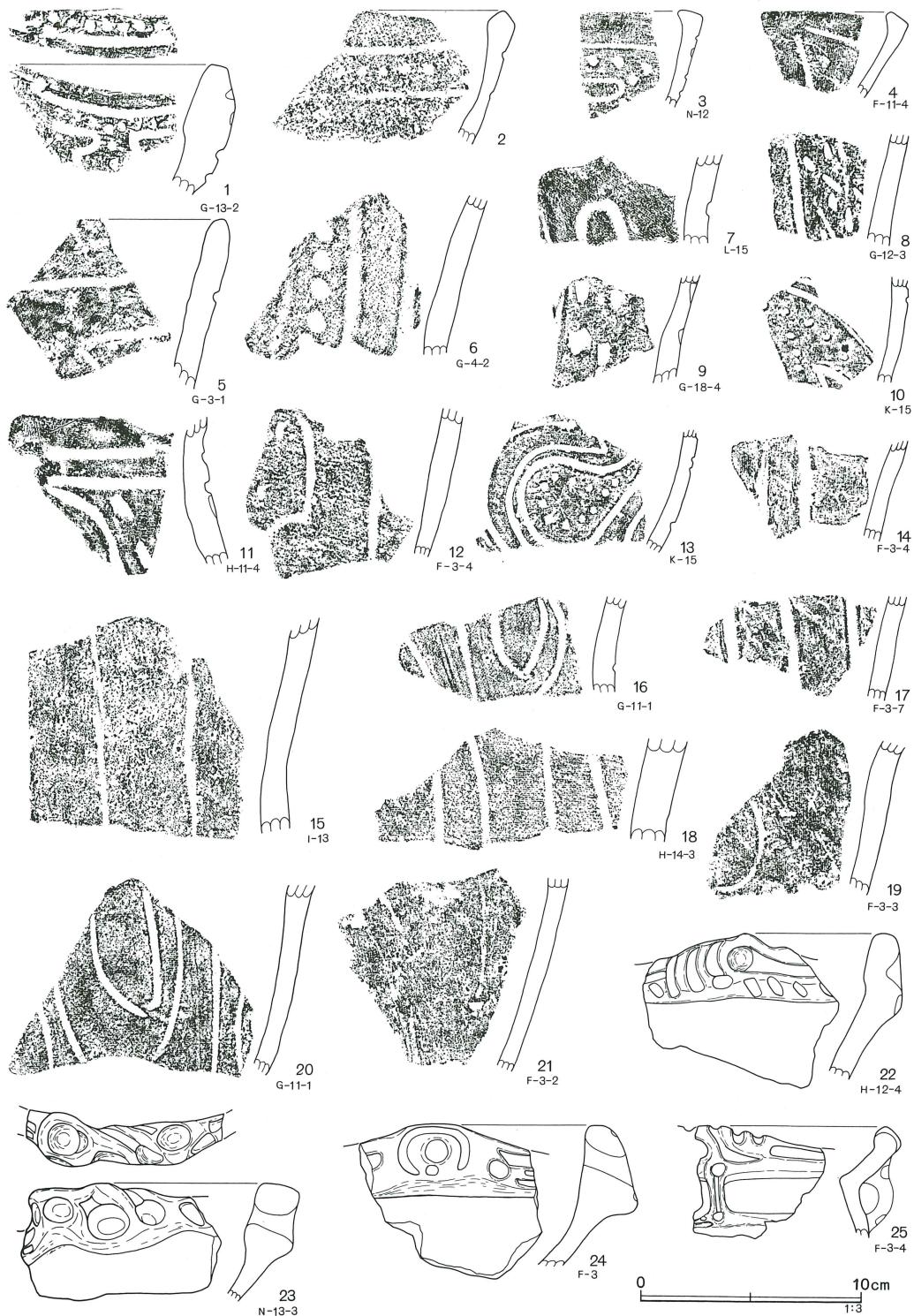
第131図 グリッド出土土器 (1)



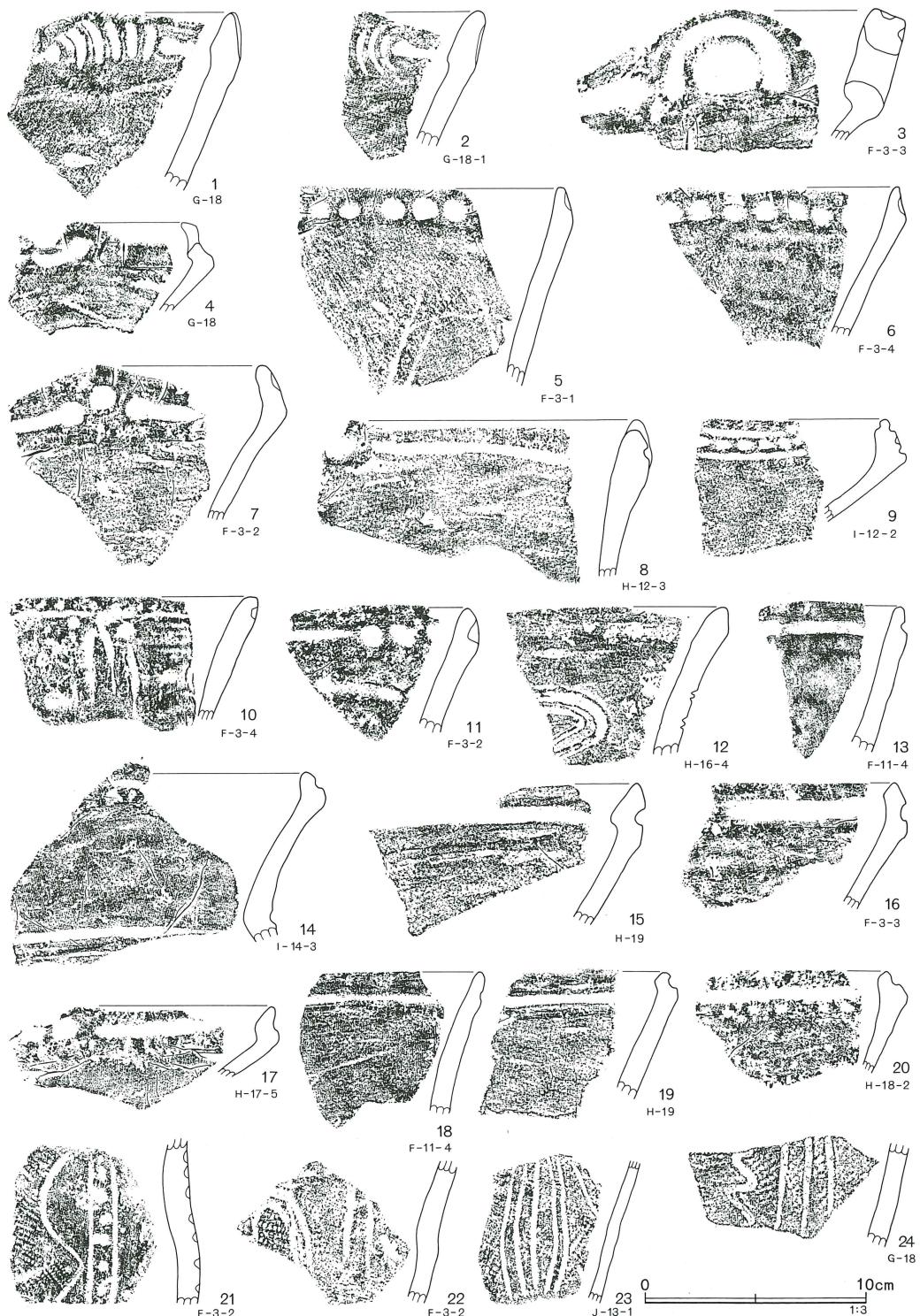
第132図 グリッド出土土器（2）



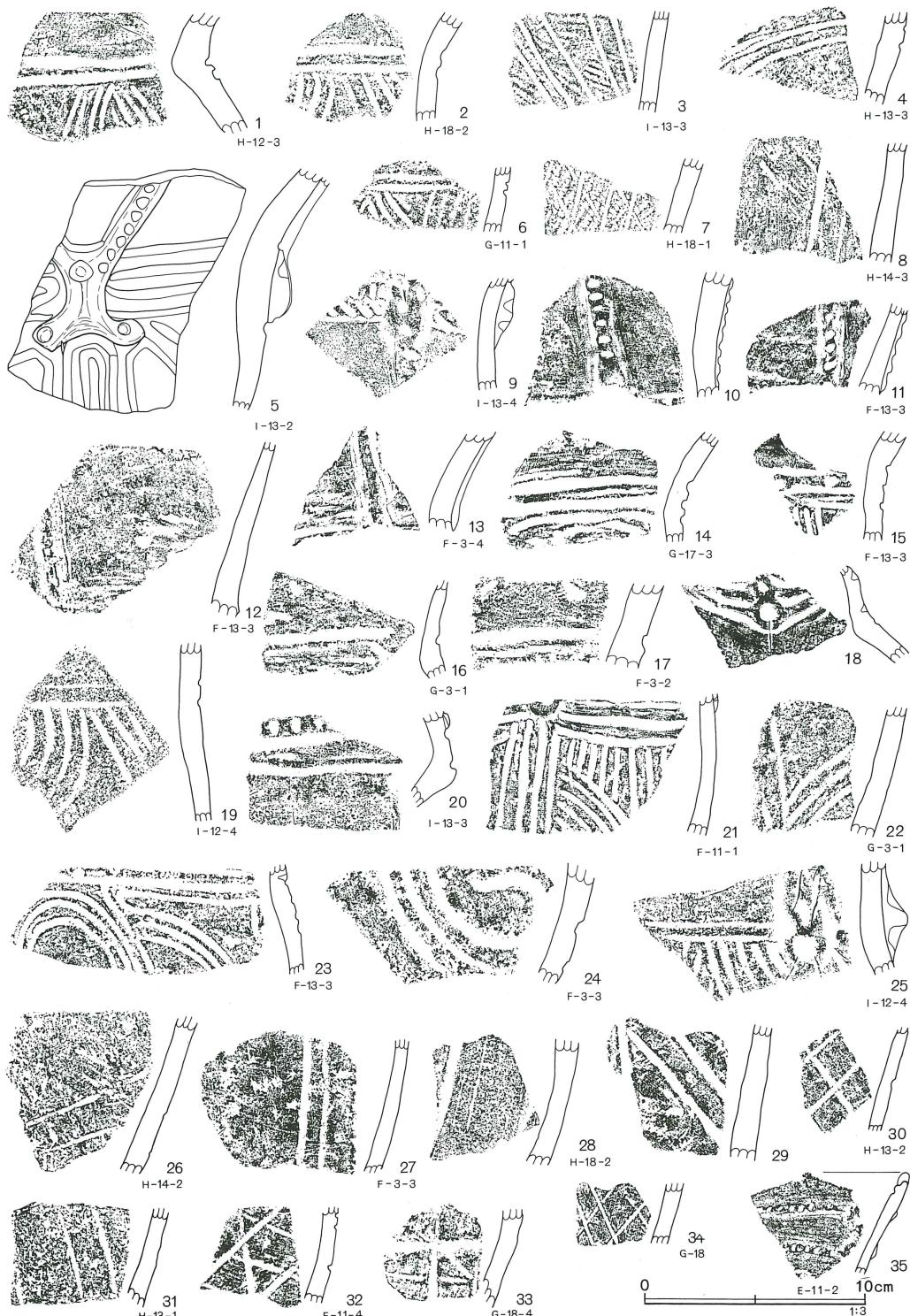
第133図 グリッド出土土器 (3)



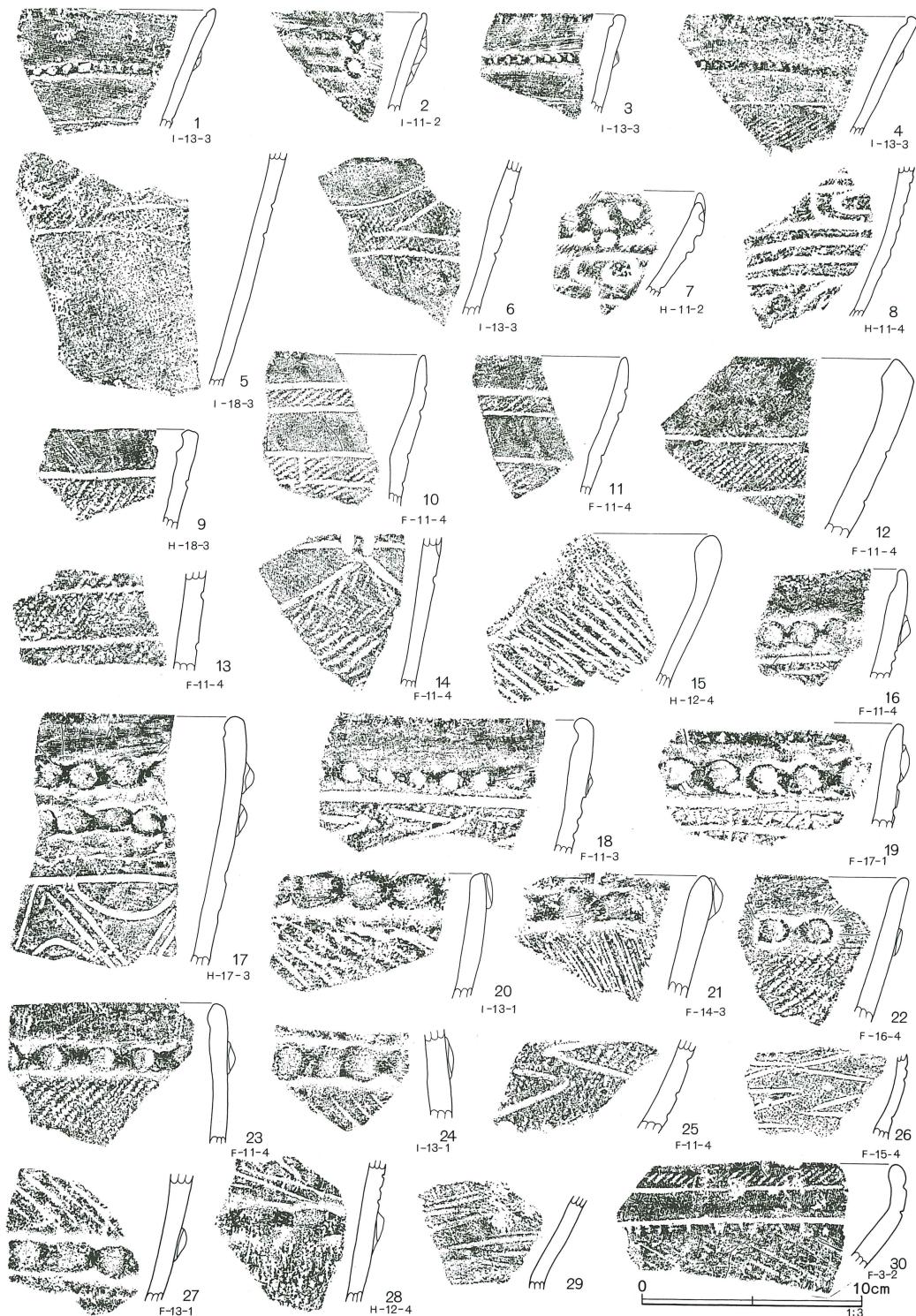
第134図 グリッド出土土器 (4)



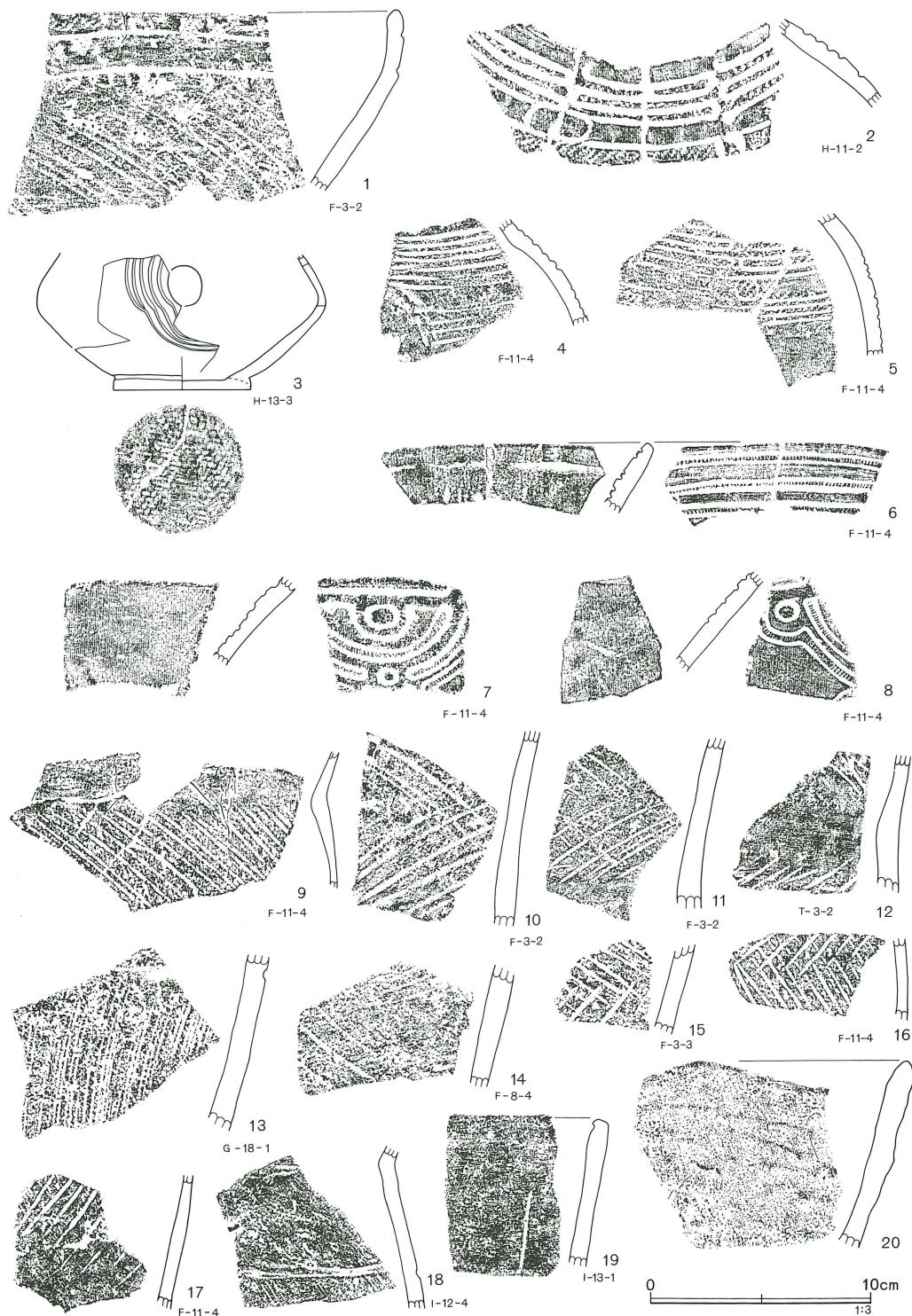
第135図 グリッド出土土器 (5)



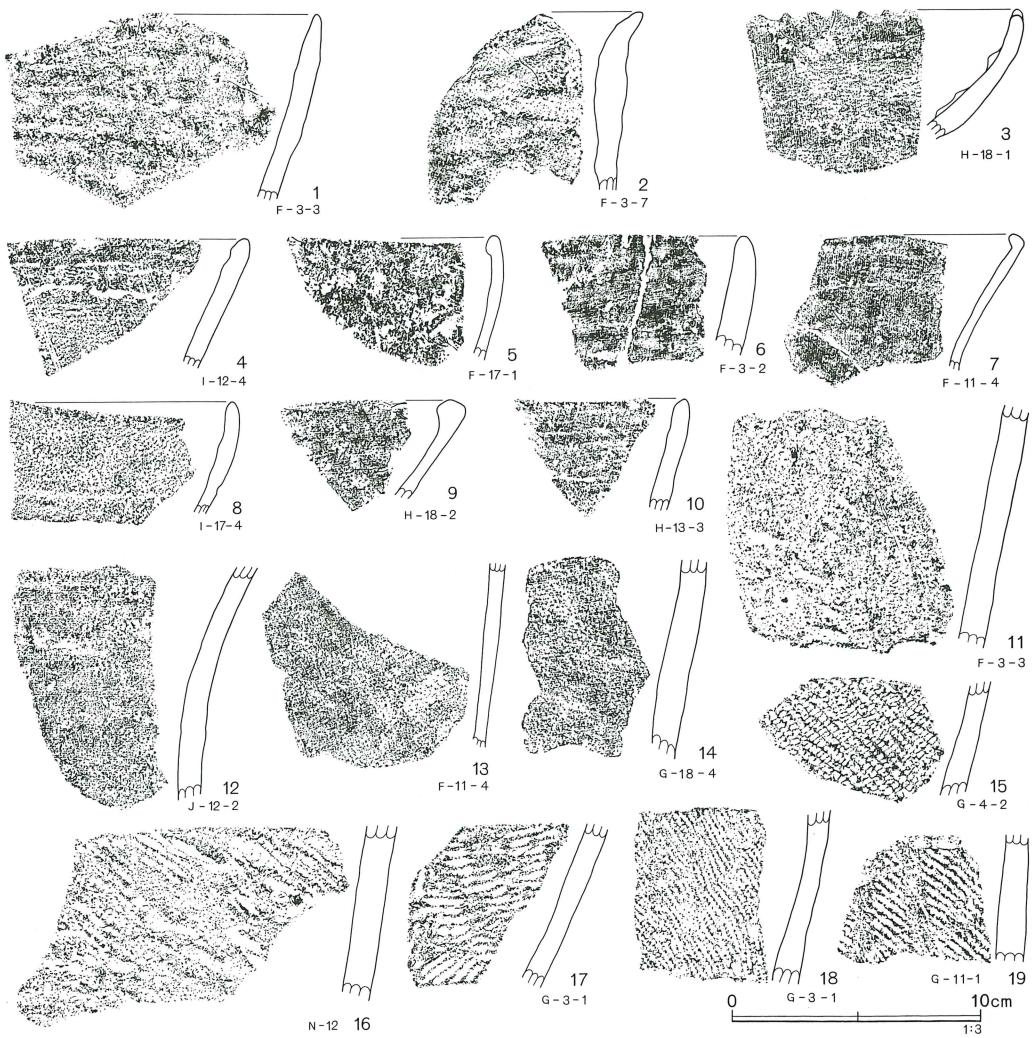
第136図 グリッド出土土器 (6)



第137図 グリッド出土土器 (7)



第138図 グリッド出土土器 (8)



第139図 グリッド出土土器 (9)

削器 (第144図 5・8)

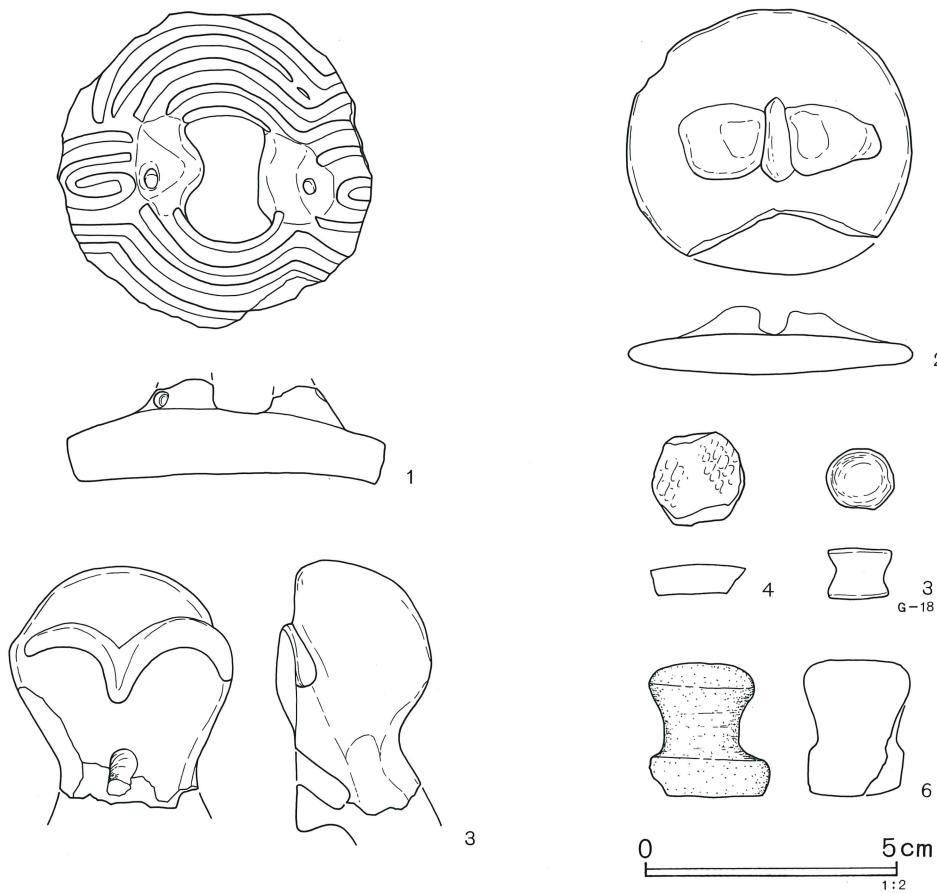
第144図5は形状は分銅形打製石斧の刃部に酷似している。基部は明らかに剥離によって作出されており、或いは石斧の転用とも考えられる。同図4は、薄い剥片の両側からやや細かな剥離を加え、さらに、片縁には挿入部を細かな剥離によって作出している。石斧とも考えられるが、特異な形状から、削器に含めた。

石剣 (第144図 6～7)

包含層からは2点のみ検出された。6は基部破片で、剥離痕を残し、敲打痕が観察される。7は丁寧に研磨されており、部分的に整形の際に生じた擦痕が観察される。

石鎌 (第144図 9～11)

包含層から出土した石鎌は図示した3点が全てである。いずれも無茎で、両側からの挿入によって基部が作出されている。11は脚部と刃部先端が欠損していた。



第140図 グリッド出土土製品・石製品

礫器（第145図～第147図）

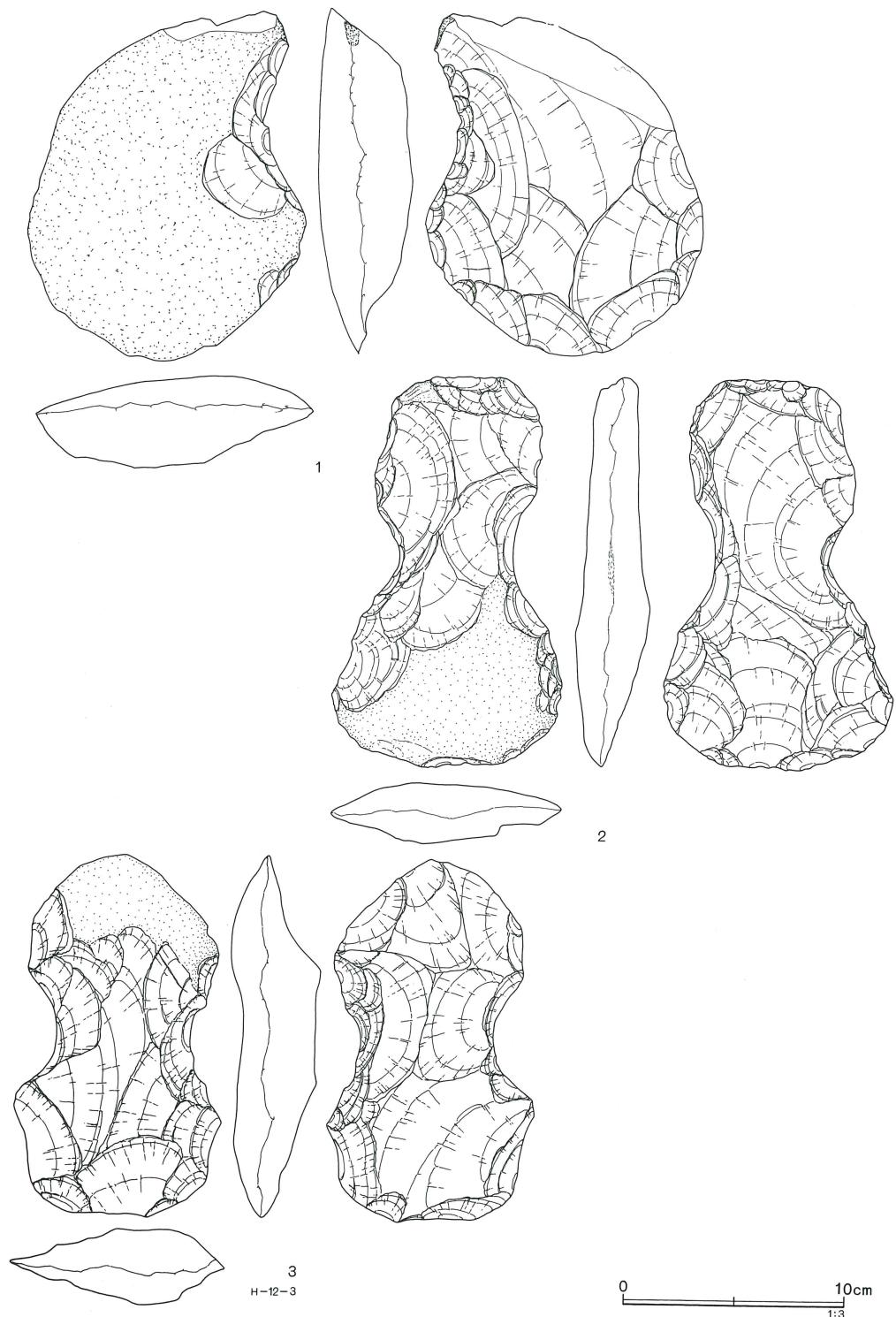
打製石斧とともに特徴的な石器である。肉厚で、河原石の側縁部に粗い剝離を加えただけの粗雑な造りが多く、両面に自然面が残されているものが圧倒的に多い。第145図1は最も大型の礫器で、全長17cm、幅15.4cmである。礫器は平均して長さ・幅ともに10～13cmを前後するものが圧倒的に多く、打製石斧ほど形態の大小がみられないようである。石材には砂岩が多く用いられていることも石斧と同様である。使用による刃部の磨耗や側縁の敲打痕が観察されず、石斧とはまた別の機能が推定される。

石皿（第148図～第149図1）

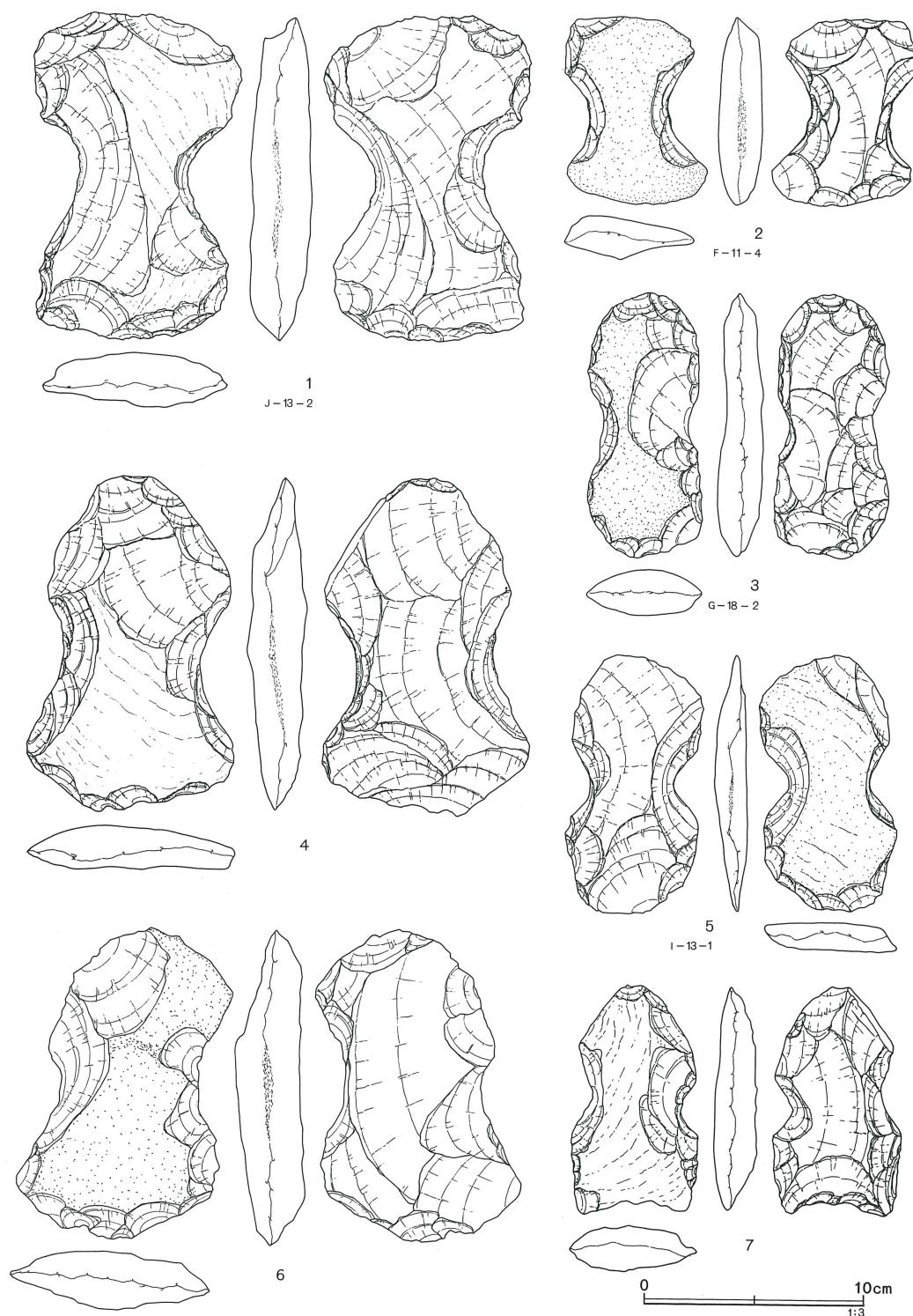
第148図1は造り出しの脚部をもつ石皿で、内外面ともに極めて丁寧な造りである。同様の形態をもつものは、遺構内出土も含めて図示した本例のみである。安山岩製の石皿は極めて少なく、砂岩や片岩製の石皿が多いことも、周辺の石材産地の傾向と一致している。同図2は使用が片面のみに限定され、片岩の剝離を利用して加工が施されている。第149図1も使用は片面に限られ、中央部にはくぼみを有している。

磨石（第149図2～第150図7）

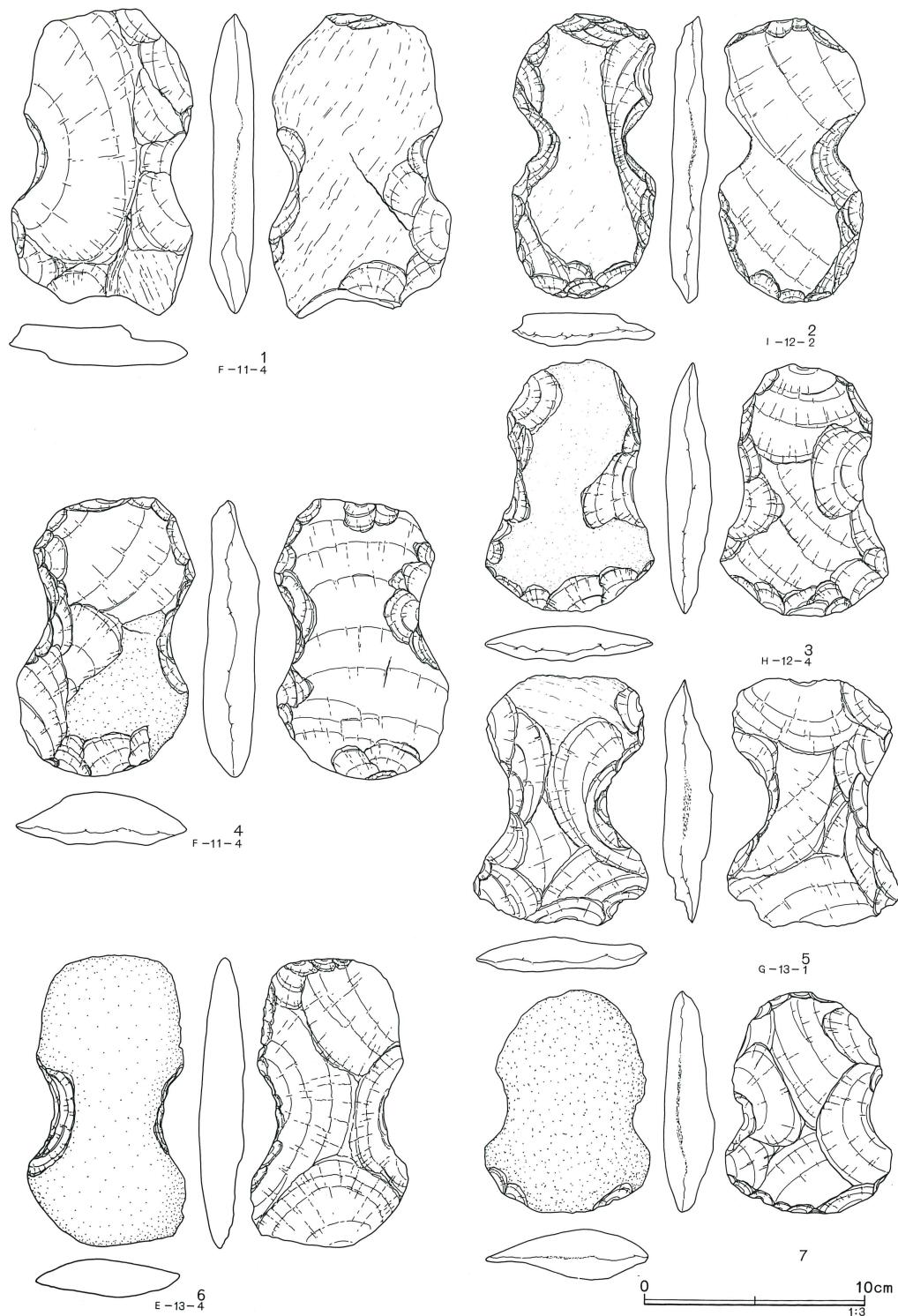
出土した磨石には長楕円形を呈するものと円形のものとに大別される。片面あるいは両面に凹



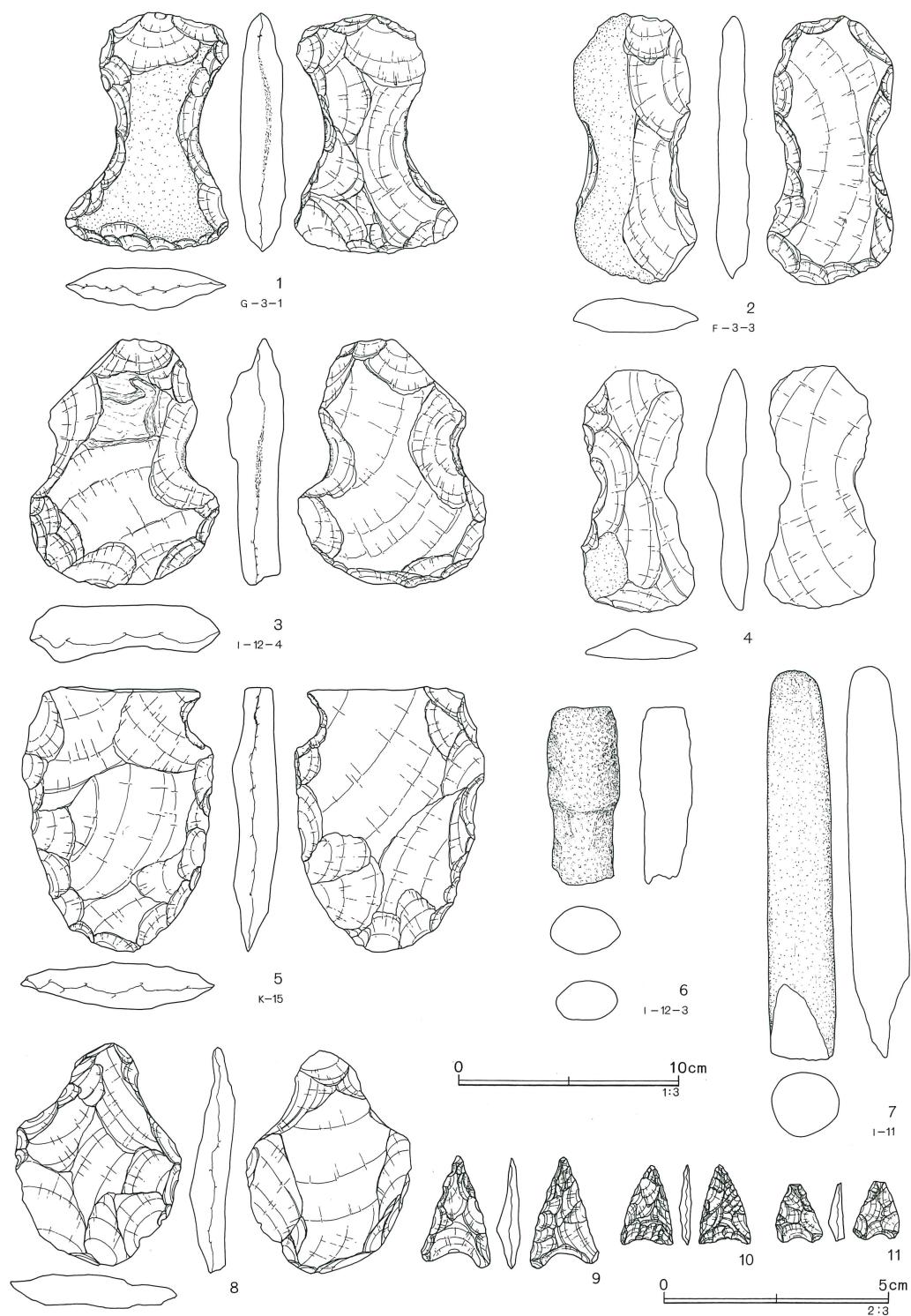
第141図 グリッド出土石器 (1)



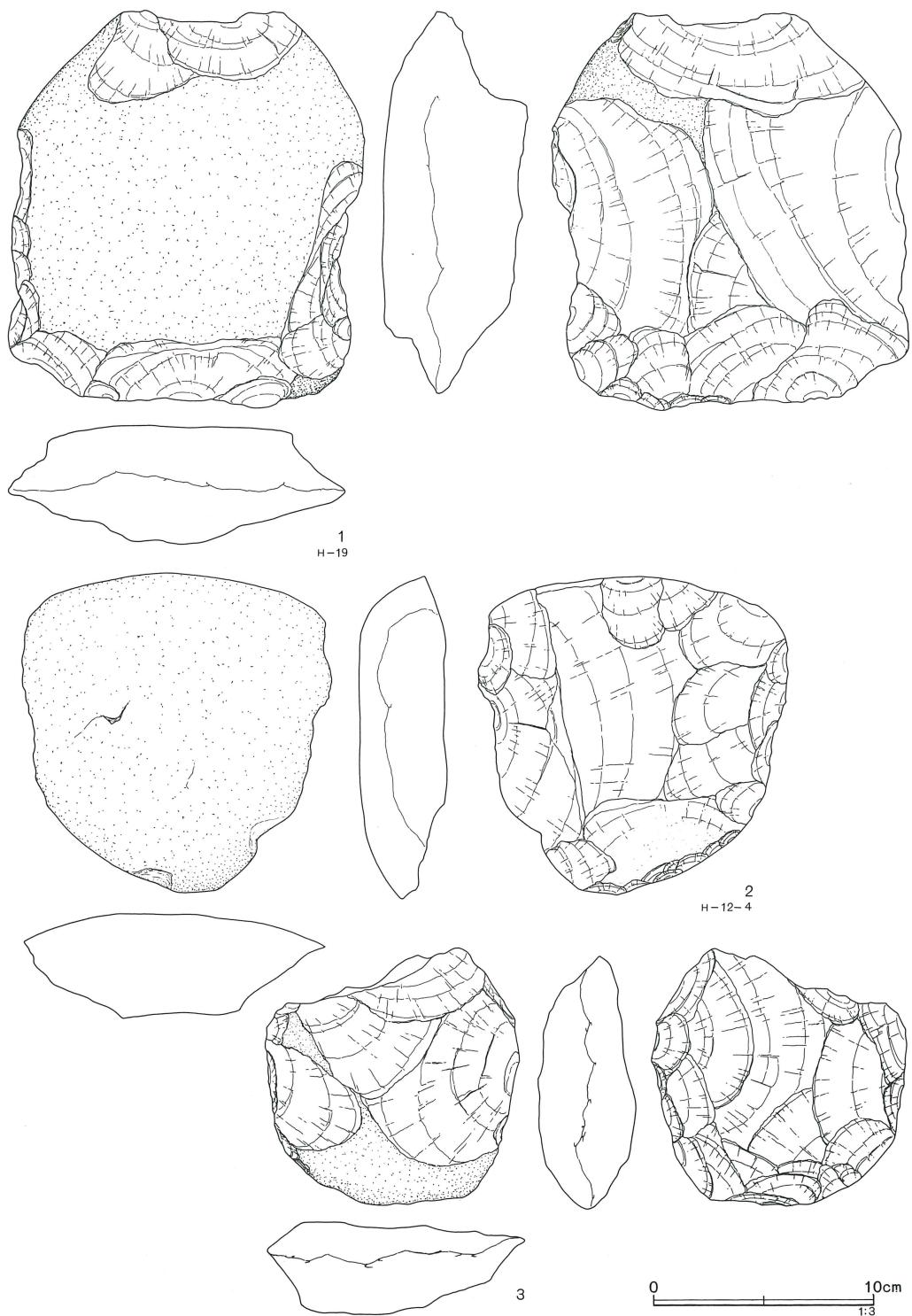
第142図 グリッド出土石器 (2)



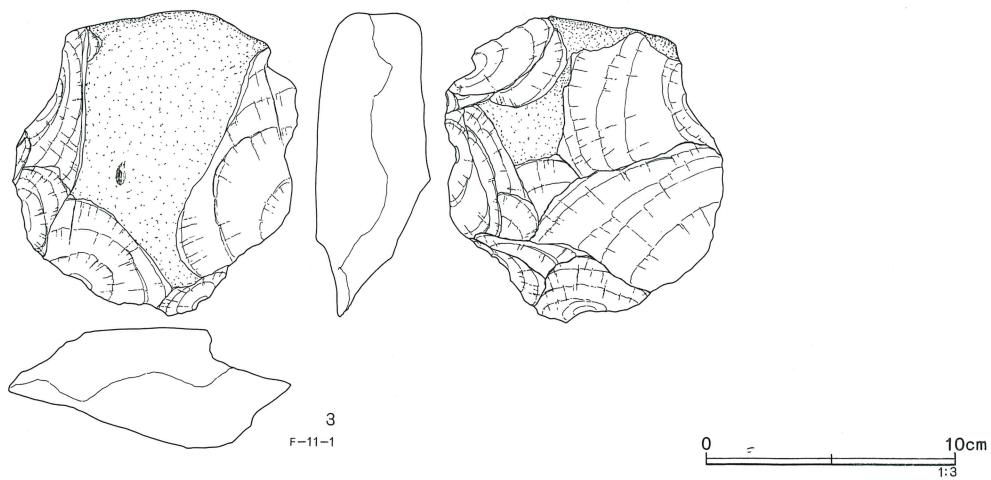
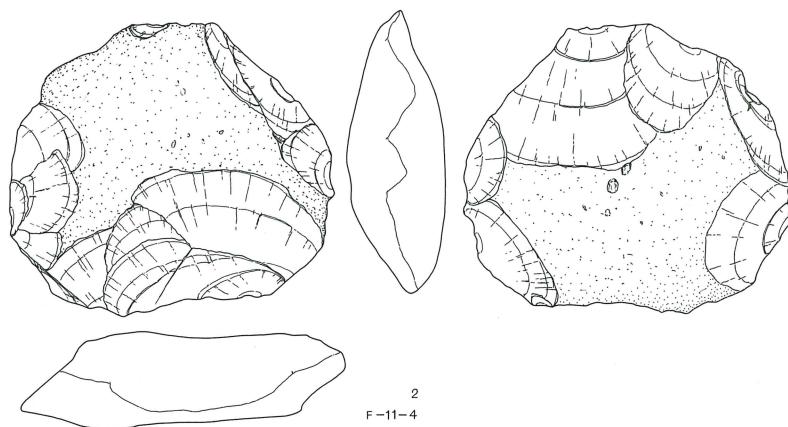
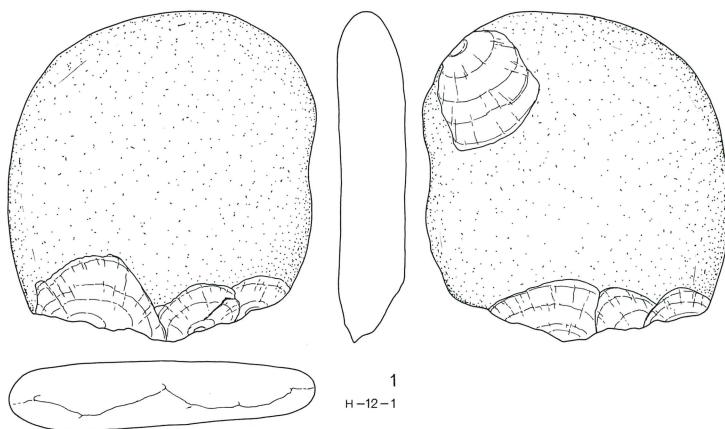
第143図 グリッド出土石器 (3)



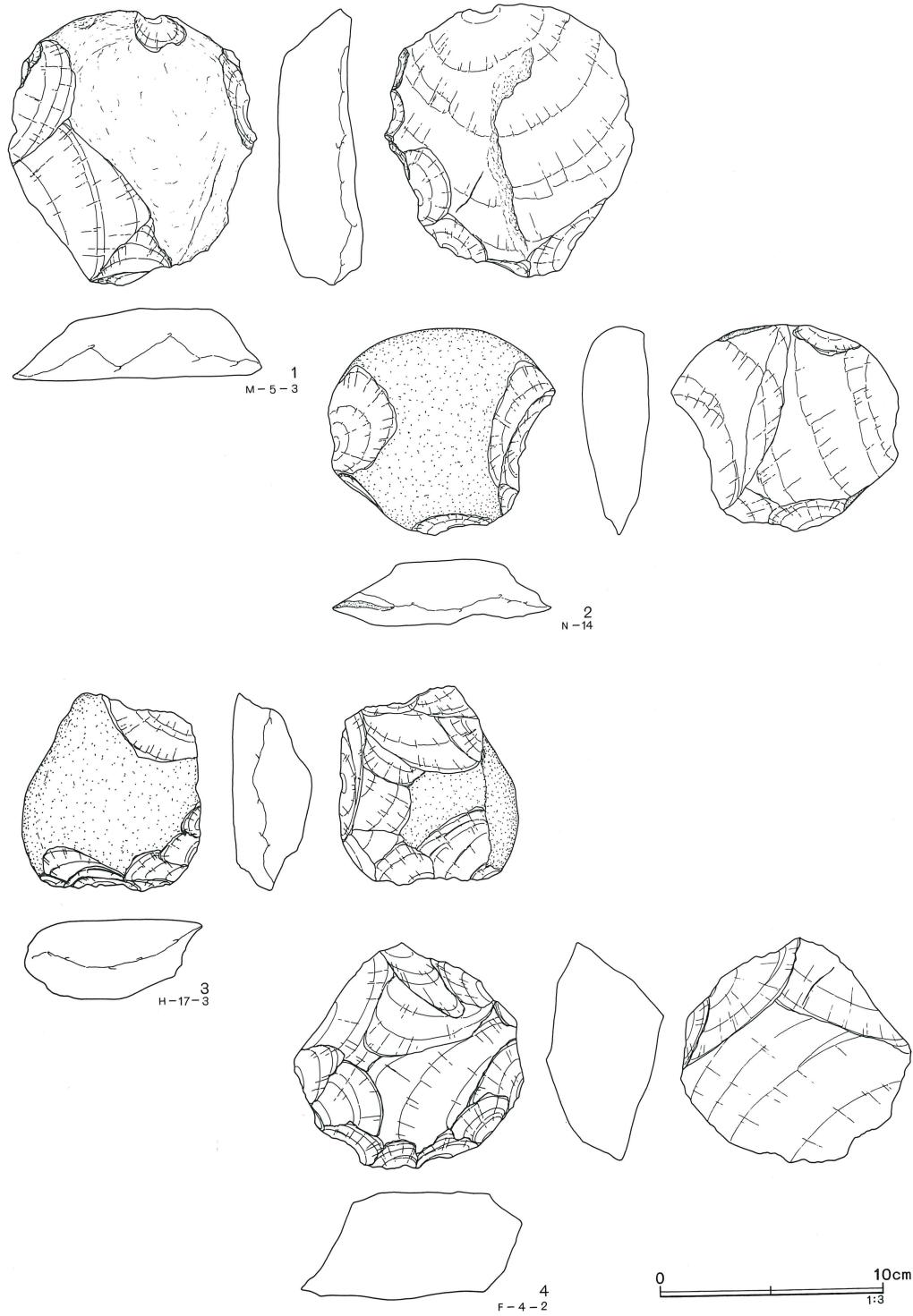
第144図 グリッド出土石器 (4)



第145図 グリッド出土石器 (5)



第146図 グリッド出土石器 (6)



第147図 グリッド出土石器 (7)